

龍谷紀要

第46巻 第2号

2025年3月

近畿方言の諸相	角 岡 賢 一 (1)
動物の魂とは何か：動物と機械と魂の（非）物質性 をめぐる初期近代自然哲学の論争.....	岡 田 典 之 (17)
メキシコのアンナ・ゼーガース.....	國 重 裕 (33)
言語表現から見る気候変動とドイツのエネルギー政策.....	佐 藤 和 弘 (43)
Salvador de Madariaga y sus relaciones con los representantes diplomáticos durante la Segunda República: un análisis de <i>Espanoles de mi tiempo</i> (1974)	安 田 圭 史 (59)
<i>The Lyke Wake Dirge & The Survival of Catholicism</i> in Cleveland, Yorkshire	ロザーティ・サイモン (73)

龍谷大学

近畿方言の諸相

角 岡 賢 一

▶ キーワード

近畿方言、畿内、京阪方言、
旧国名

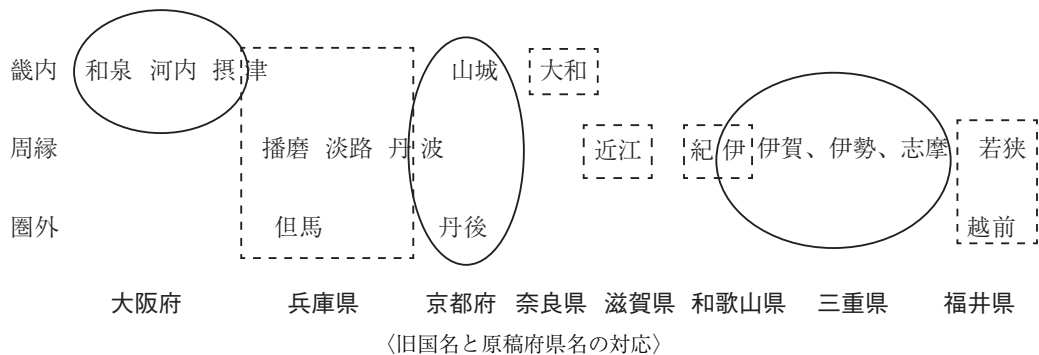
▼ 要 旨

This is a contrastive study of the Kinki dialects, covering seven prefectures which are the results of the redivision of the 17 states under the Tokugawa Shogunate regime. The most crucial idea in this paper is the concentric circles in the district: Kinai, consisting five states; the peripheral areas consisting nine states; the outer circle of Tajima and Tango. The criterion of the classification is the accent pattern, which distinguishes the lexicon with the pitch differences of high and low. Kyo-kotoba (Kyoto dialect) and Semba-kotoba (Semba dialect) are considered to be the core of the Kinai district. The farther from the distance from these cores, the greater differences of the phonological, lexical and syntactic phenomena.

第一節 はじめに

前稿「京ことばと船場ことば」(角岡 2024)では、京阪方言の核をなす二方言について比較対照を行ったが、本稿は対象を広げて近畿方言全体について言語学的諸特徴を分析する。前稿においても畿内五箇国を内心として、隣接する播磨、丹波、近江、紀伊というような周縁部と、近畿方言圏外となる但馬や丹後が同心円を描くという地理的状况を考えてみた。それが三頁の地図であるが、畿内－周縁部－圏外という三重構造が端的に示されているのは一種の驚きである。方言圏論を地図上に忠実に再現したかのような結果になっている。以下では、言語的にこのような三重構造がどう差異化されるかを検証するのである。

まずは明治維新時の廃藩置県によって区画された現行の府県と、旧国名を対応させてみる。



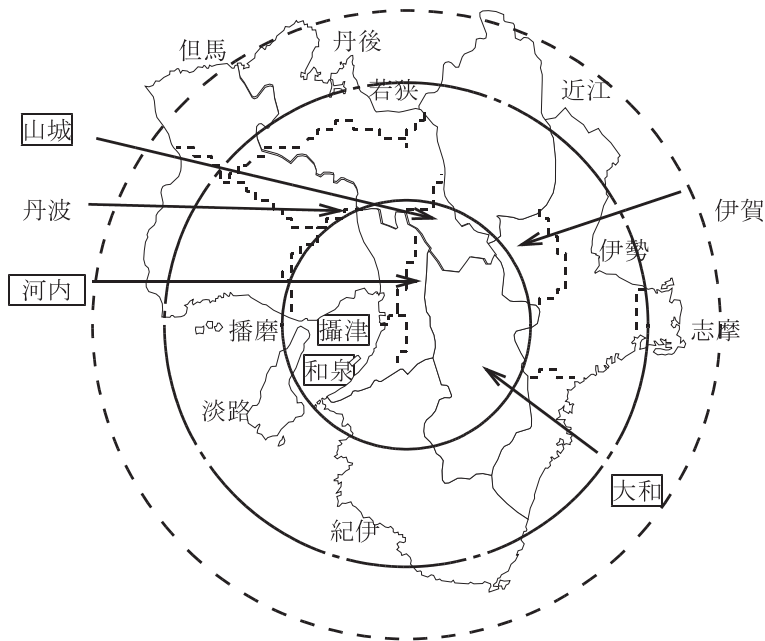
ここには八府県と十七箇国が区画されているが、このうちで現在府県境を跨いでいるのは摂津と丹波の半分が兵庫県に組み入れられているのと、北紀が三重県に組み入れられたので、和歌山県には飛び地が生じている。大和国＝奈良県、近江国＝滋賀県は、一国がそのまま一県に移行したものであり、分かりやすい。他方で兵庫県のように五箇国を一県とし、北は日本海に面し南は瀬戸内海と四国にも通ずるという多様性を見せる場合もある。

ここで一つ、以下の議論において考慮に入れるべき事情を指摘する。それは典型的に府県庁所在地において際立つのであるが、旧国境を跨いだ市町村合併が見られるという点である。古くは、神戸市が播磨国であった垂水区と西区を編入したという例を挙げることができる（旧垂水区は一九五〇年に編入、その五年後に現西区の七箇村を垂水区に統合したが、一九八二年に分区）。今世紀に入って、以下のような市町村合併があった（『最新基本地図』、括弧内は年）。

京都市（2005） 京北町
 奈良市（2005） 月ヶ瀬村、都祁村
 津市（2006） 久居市、河芸町、芸濃町、美里村、安濃町、香良洲町、一志町、白山町、美杉村
 大津市（2006） 志賀町

この中で旧国境を跨いでいるのは、京都市と京北町である。京北町は一九六五年に周山町、細野村、宇津村、山国村、黒田村及び弓削村という一町五村が合併して発足した。旧丹波国である。その後、二〇〇五年に京都市に組み入れられたのであるが、面積は市域の四分の一を占めている。素朴な疑問であるが、京北町の住人は京都市民になったからとて、京ことばに鞍替えする訳でもあるまい。ことばという文化的背景を無視したかのような拡大主義には、疑念を呈する。

ここで前稿から、近畿方言を三重の同心円で区画した地図を引用してみよう。



〈旧国名による畿内と周辺諸国〉

このように地図では現行の府県境と旧国境が錯綜して見づらいが、上掲のように旧国名を並べた方が理解が早そうである。しかし畿内－周縁－圏外という距離感を得るにはこのような地図が適している。同心円の中心は摂河泉三国の国境が交わる大和川に近い。この川は摂津と和泉の国境である。畿内一円は、ここを中心として半径は十里ほどである。周縁圏となると二十五里と二倍半ほどの距離になる。最外円は半径三十里余りで、距離は周縁圏の二割増しほどである。距離としては志摩は丹後や但馬と同程度に中心から隔たっているが、区分としては近畿方言圏内である。

地図を眺めて再認識するのは、紀伊半島の大きさである。面積で、近畿圏の南半分を占めている。紀伊国から名前が取られているのは、海岸線の半分を占めるからであろう。西側は摂津と和泉、東側は伊勢と志摩であるが、南側が全て紀州である。この半島にすっぽり納まっている内陸国が大和と河内である。

距離もさることながら、域内での行き来について考えておきたい。畿内五国は互いに境を接して隣り合う位置関係である。京には長く都が置かれ、政治経済文化全ての面において日本の中心であった。各地から用向きで上ってくる人も多かったことであろう。周縁部となると、隣り合う他国よりも畿内と行き来することの方が多かった、というような事情も考えられる。播磨を例にとると、隣の丹波とは地理的な近さから行き来など多少あったかもしれないが、近江となると途端に関連は稀薄になってしまったのではないだろうか。圏外の但馬丹後志摩となると、隣り合う但馬と丹波の繋がりこそあったであろうが、全般に畿内との距離が遠いので生活面でも不便であったと想像する。

江戸時代は交通手段が基本的に徒歩しかなかった。淀から天満の八軒屋まで淀川の上り下り、あるいは琵琶湖矢橋の渡しや兵庫の港から天保山までの渡しなどは例外的で、限られた場

所でしか見られない水運交通である。興味深いのは、これら三箇所での船旅は噺の題材になっているという点である。それぞれ『三十石夢の通い路』、『矢橋舟』、『兵庫の渡海 鯨の見入れ』として今でも高座にかかる旅ネタである。『矢橋舟』は琵琶湖内の渡し、『兵庫の渡海』は摂津内の渡しであるが『三十石』では山城から摂津へ下る船路である。三十石は七里半、兵庫から天保山までは五里であった。矢橋舟は湖上一里であるが、東海道は草津から大津へは琵琶湖に沿う道筋であるために行程は二里半になる。旅人にとっては、足を休ませながら旅程を稼ぐことができたので「板子一枚上は極楽」であった。

噺の題材という視点を採ってみると、長屋の住人であった喜六と清八、場合によって源兵衛という三人目を加えて旅に出かけるという旅ネタが一つの大きな題材供給源となっていることに気付く。東-『伊勢参宮神之賑』、西-金比羅詣り『兵庫の渡海』、北-『池田の猪買い』、南-『紀州飛脚』、異国巡り-『島巡り大人之屁』、天上界-『月宮殿星都』、海の底-『竜宮界竜都』、冥界-『地獄八景亡者戯』というように、現実世界を超越して想像を羽ばたかせているのが大きな特徴である。現実世界においてさえ旅に出ることは非日常の体験であるが、それを一挙に想像世界にまで広げているのが上方噺なのである。江戸噺には、現実世界での旅ネタそのものも少ない。ましてや、異国や異界を巡るという桁外れの跳躍は全く思いも付かなかっただろう。

以下では、畿内-周縁部-圏外という節立てをし、それぞれの方言で特徴を分析していく。

第二節 畿内方言

本節では、畿内五箇国の方言諸相を分析してみる。

平城京が置かれた大和には、南北朝の時代に南朝も都を置いた。長岡京の短い時代を経て平安京に都が移ってからは、千百年の長きに及んで帝のお膝元であり続けた。摂津は、古くは難波宮が置かれた地として早くから開かれた土地柄であった。泉州では堺が、経済力を背景として一時期自治独立を果たすなど地の利を活かしているとも言える。河内は他の四箇国全てと境を接している。以下、各方言を並べて比べる。前稿では京ことばと船場ことばを対比したが、それぞれ山城と摂津の中心となる方言である。言語学的には、長らく都が置かれていた京と「天下の台所」と称されていた大坂を括った「京阪方言」が近畿方言においても核をなし、標準無標という位置付けである。前項でも検証したように京ことばと、船場を中心とする浪速のことばは音韻や語彙などの面で相違はあるが、両者を合わせて近畿方言の標準無標として代表させているのである。

摂津

明治維新の折に廃藩置県によって、摂津国は東西に分断されてしまった。府県境は淀川の支流である神崎川から北へ延ばしたような引き方になっている。ここから東を東摂津とする。西側は更に、芦屋川と住吉川の間近辺で分け、ここから西は神戸（西摂津）、間を中摂津とする。このように細分化した理由は、東摂津が京阪方言で標準的な地位を占めるのに対して、神戸方言は以下に述べるように京阪方言とはかなりの差がある故である。中摂津は中間に位置し、緩衝地帯であるとも考えられる。一般に「阪神間」と言えばこの地を指す。更には百年は

ど前には船場から移転してきた人たちによって船場ことばが移された。住民人口という視点から考えればごく一部であろうが、阪神間と神戸方言の区画確立にどのように影響したかという定量的検証が必要であろう。

前稿では船場ことばを摂津方言の中でも標準無標で、地理的にも社会的にも中心となるというように位置づけた。山田庄一氏『京なにわ暮らし歳時記』では、船場ことばとは島之内と雑喉場と堂島から天満にかけて、大店の主が話す一種の社交用語と定義されている（第四章）。船場だけに限定してしまうと地理的にはごく狭い範囲であるが、船場周辺と広げる一方で社会階層として定義する視点が重要である。本稿でもこの定義を採用する。

神戸方言は、摂津の西半分を占めているものの、船場ことばとは異なる特徴がある。最も頻繁に指摘されるのは、「～シテイル」という相が「～シトウ」になる現象であろう。「知ッテイルカ」は船場ことばでは「知っとるか」、神戸ことばでは「知っとうか」となる。これは播磨でも共通で、これを聞くだけで神戸以西の方言であることが明らかになる。摂津の東半分に接する西宮や伊丹、尼崎では耳にすることがないように思われる。

語彙と音韻の側面で、神戸は摂津でありながら船場ことばとは全く違った特徴を示すのである。以下は『関西弁事典』からの引用である。左が神戸以西、右が阪神間である。

男・女	オトコ、オンナ	オトコ、オンナ
眼鏡、花火	メガネ、ハナビ	メガネ、ハナビ
電車、選手	デンシャ、センシュ	デンシヤ、センシユ
十、地図	ジュー、チズ	ジュー、チズ

筆者は生まれてから三十五歳まで東播磨方言域に在住していたが、神戸以西の型と完全に一致する。「眼鏡、花火、電車、選手、十、地図」は全て頭高であり、京阪方言の型を見聞きすると強烈な違和感を持ったものである。従って、この面で境界線は神戸市と芦屋市の間で引くのが妥当であろう。

『関西弁事典』では、神戸と明石の間に境界線を引いて摂津と播磨方言を分けている。他方で鏡味明克氏による区画案では、神戸から旧揖保郡と宍粟郡の東半分までを神戸播磨方言と括っており、芦屋以東は阪神方言という分類である（同事典に引用してある）。本稿では、後者の立場を採る。理由は、上掲の語彙抑揚型や「～しとう」は神戸以西に特有であって、芦屋以東には見られないこと、神戸以西は西播を除く播磨方言と共通であることである。

山城

船場ことばと共に、京ことばも前稿で論じた。洛内も船場も比較的狭い土地柄であるので、方言変種は限られる。『関西弁事典』には京ことばの中に公家、中京の商家、西陣の職人、祇園の花街という下位分類を挙げている。これらは、一定地域に特有の階層なり職種が集住しているという事情から発生したものである。どの変種も、頻用される語彙において顕著に特徴が顕在化する。洛内のすぐ北は丹波で、全く別個の方言圏である。南へ下ると宇治である。旧南桑田郡と乙訓郡は摂津と接し、和楽郡は伊賀と大和両国に境を接するという地理情勢である。綴喜郡と和楽郡を南山城、それ以外を北山城と分ける。

ここで京ことばの音韻的特徴を列挙する。まずは一音節語の母音長化で、キー（木）、メー（目）のようになる。逆に長音の短縮化があり、センセ（先生）、イコ（行こう）、ハヨ（早う）と、名詞に限らない。次にサ行転呼音で、サ行音がハ行に変わる部類である。オバ^ハハン（おばさん）、ヒチ（七、質）、布団をヒク（敷く）、ヒツレイ（失礼）、ホレカラ（それから）などである。質屋はヒチャ、七条は古い世代ではヒッチョウ（若い世代ではヒチジョウ）であった。最後にヤ行音の拗音化を挙げる。トッ^ショリ（年寄り）、オン^ミャハン（お宮さん）、ニッ^チョー（日曜）、シン^ニョル（死による）、カッ^ジャ（火事や）などである。傍点を附した促音と撥音は、拍数を保つために挿入されたものと考えられる（『関西弁事典』）。この段で挙げた音韻変化は、全て摂津方言でも同様に見られる。近畿方言全体でも普遍的と考えられる変化である。

同事典には、「京ことばと浪速ことば」という見出しの下に次のような対比が挙げられている。京／浪速の順である。

ソードスエ／ソーダッセ（そうですよ）、アツオスナー／アツオマスナー（暑いですね）、イカハル／イキハル（「行く」の尊敬語）、ドーシタン／ドナイシタン（どうしたの）、シーヒンニャテ／セーヘンネンテ（しないんだって）

浪速ことばを基準として京ことばを対比させると、両者の違いが興味深い。浪速ことばの助動詞「だす」に対して京は「どす」、本動詞の活用形が「行きはる」に対して「行かはる」、「せえへん」と「しいひん」、疑問副詞が「どない」と「どう」、というように違いが見られる。「どす」が京ことばの代表格であるかの如くに目立つのに対して、「どうしたん、しいひん」は微妙な違いであるように感じられる。

南山城に特有の語彙としては、ケツネ（狐の訛音）、コロモン（沢庵漬）が挙げられる。

大和

『関西弁事典』では、大和方言を北部と南部に二分している。南部は吉野郡天川村、上下の北山村、大塔村（現在は五條市の一部）と十津川村である。面積は大和国の三分の一にもなるが、人口は大塔村を除く四箇村で五千二百人ほどと、現行の域内人口で千分の四ほどを占めるに過ぎない。特に十津川村は、一村だけで大和国全体の六分の一という広さで、村としては全国一の面積である。一帯は標高二千米に迫る紀伊山地の中であり、鉄道は北部方言域である吉野町まで近畿日本鉄道吉野線が通っているのみである。つまり南部方言地域には鉄道網はない。

同事典によると、北部方言は京阪式であるのに対して南部は関東式で、「方言の島」になっているという。つまり、周囲は全て近畿方言圏に取り囲まれているのである。しかしながら以下は関東方言とは関わりなく、南部方言特有の事象である。ダ行鼻濁音が十津川村では〔～d〕、下北山村では〔nd〕となり、動詞の音便形「書いて、泣いて」がそれぞれ「カーテ、ナーテ」と長音化するという。また十津川村ではオクル（起きる）、シラブル（調べる）、ワラワルル（笑われる）、ミサスル（見させる）、トバルル（飛ぶことができる）というように、動詞と助動詞の二段活用が残っている。このようにざっと挙げただけでも、大和南部方言は周囲

とは隔絶されたような特徴を有している。

山城方言の項で挙げた、一拍語における母音の長化やサ行転呼音は大和方言でも同様である。しかし大きく異なるのがザ行とダ行とラ行の混交である。座敷はダシキ、風邪はカデ、雑巾はドーキン、満足はマンドクとなる。この混交は主として播磨－丹波や紀伊といった周縁部で見られるもので、畿内では大和のみであろう。

北部方言で特徴的な文法形式に、過去の推量「降ッタヤロ」と継続態「降ッタル、降ットル」、結果態「降ッタル」がある。また、使役表現にはスとヤスがある。共に未然形に接続し、五段動詞とサ変動詞にはス、それ以外にはサスを後続させる。イカス（行かせる）、ノマス（飲ませる）、ネサス（寝させる）、ミサス（見させる）、コサス（来させる）などである。一段活用動詞にヤスを後続させて、ネヤス（寝させる）、ミヤス（見させる）、コヤス・キヤス（来させる）というのは古い言い方であるという（同事典）。

南部方言は、一拍語における母音の長化がなく、断定の助動詞がジャヤダであるという点も近畿方言としては特異である。過去の推量は「降ッツロー」で、京阪式と同じである北部方言の「降ッタヤロ」とは大きく異なる。継続態は「降りヨ（一）ル」、結果態は「降ットル」と、共に北部方言とは異なっている。一段活用動詞の五段化も特徴的である。「見ラン、見リター（見たい）、見レ、見ロー」となるのである。どれも頻用度が高い基幹動詞であるだけに、短時間会話を交わすだけでも耳にする機会が多いものと思われる。

河内

河内国は北で山城と接し、南は紀州と接するというように南北に細長い地形である。西では摂津と和泉に接している。つまり、畿内の国全てと境を接している。そういう視点で眺めると、地理的に河内が畿内の中心と言うことも可能であろうが、文化的にはそれとは異なる様相を呈している。

『関西弁事典』によると河内方言の特色として、「イッコル（行きよる）、ノンモル（飲みよる）」、「ヨロガワノミル（淀川の水）、カロノウロンヤ（角の饅飴屋）」、疑問終助詞の「ケ」、ラ行の巻き舌音や談話速度の速さが挙げられている（但しこれらは嘗て近世後期から昭和初期にかけて摂津方言と共通であったと指摘されている）。「イッコル、ノンモル」は本動詞「行く、飲む」に助動詞「ヨル」が接続した際の音韻変化であるが、促音便と撥音便に後続して「ヨル」が「オル」に変化している。現代の摂津方言であれば「イッキョル、ノンミョル」となるところであろう。「ヨロガワノミル、カロノウロンヤ」においてはザ行とダ行とラ行の混交が見られる。元来は摂津方言でもこれらの特色が共通していたのであるが、この百年ほどで社会の近代化が進んで消滅したものであろう。他方で、河内地方は農村色が濃かった分これらの特徴も最近まで残っていたという可能性がある。ラ行の巻き舌音も特徴的で、聴覚的にも荒っぽいという印象を与える。

また地域差として、これらの特徴は南へ下るほど色濃く残されたという点も指摘できる。北河内は京と大坂の中間に位置しており、近代化と共に都市化が進んだ。中河内や南河内も大坂に近いという点では同様であるが、京とは離れているのが決定的な違いであろう。意識するかせざるかは別として、京すなわち雅のところ、という辺りに淵源がありそうである。生駒山系が途切れた平地は、大和盆地に続いている。今東光師の小説や、一九七十年代の流行歌にあっ

たような「河内弁」は、典型的に南河内の荒っぽい物言いを強調したような傾向があった。対称詞を「ワレ」とするのが典型的であろう。そのために河内方言全体があのように荒っぽいものという誤解が全国的に広まってしまったのであろう。方言拡散の型としては、悪しき例である。

和泉

和泉国は大和川で摂津と分かたれ、東は紀伊山地に到るまで河内と接している。南は和泉山地に隔てられて紀州である。『関西弁事典』によると、堺と高石、大津、和泉市までを泉北、岸和田以南を泉南と二分している。昭和後期——ということは、ごく最近まで——大坂市域での例で隣接する河内や和泉に波及していた動詞活用形として、「キサス（来させる）、カカヘン（書かない）、ミーヘン（見ない）」を挙げている。否定助動詞の「ヘン」に接続する本動詞の活用形二例については、京阪方言全体でこれらを本則として分析するべきであろう。

泉北と泉南の境界は山や川という自然地形で隔てられたものでないのにも拘わらず、両方言の違いは大きく、地理的な説明では及ばないという（同事典）。泉北は摂津方言に近付いて行くのに対して、泉南は険しい紀州山地で隔てられた紀州方言との類似が見られる。その類似は語彙類に留まらず、語法面にも見られる。継続態の降ッチャーラは統語分析すると降る＋テ＋アルに由来する。また、ラは自称詞に由来する終助詞ワシとチャールとの音融合でチャール＋ワシ→チャーラシ→チャーラという経緯を辿ったものであるという。これは紀州方言と共通である。終助詞の語源が自称詞であるというのは、統語範疇の飛躍或いは超越とも言えそうである。

第三節 周縁圏

周縁圏は畿内五箇国を取り巻く諸国で、西は播磨、北は若狭、東は伊勢、南は紀伊という位置関係になる。若狭と志摩を除いて、七国は畿内五国に接している（海を隔てた淡路を含める）。周縁圏相互の行き来というのは畿内との交通に比べて機会も少なかったことであろう。街道などは畿内から山陽道（西国街道）、東海道、中山道、紀州街道というように放射状に整備されていたからである。中山道と北陸道は近江国で分岐しており、これは現代にまで続く陸運事情と同じである。言語学的比較としても、各方言が京阪方言とどのように異なっているかという視点が中心であり、周縁圏方言同士の比較ということは少ない。テ敬語が、摂津や山城でのナハル圏を取り巻くように播磨や丹波に分布しているのは、例外とも言えるであろう。

淡路

淡路島は瀬戸内海に浮かぶ日本有数の大きな島で、現在の人口は約十四万人である。佐渡や壹岐、隠岐など大きな離島は淡路と同じように独立した藩として認められていたのである。明治維新までは阿波藩の支配下にあり、地理的にも政治的にも四国との結びつきが強かった。そもそも淡路という名は「阿波への道」という意であるから、人形浄瑠璃が盛んな土地柄というような共通点があることも頷ける。

方言区分としては北中南の三分割がなされるが、これは現行行政区分である淡路・洲本・南

淡路と一致する。今世紀に入る前後に市町村合併が進んだが、淡路島の場合は偶然であるとしても方言境界と行政区分が一致したのである。ザ行とダ行とラ行の混交は、対岸にある紀州方言の影響と言われる。

語法面では、断定の助動詞が「～ダ」である点が特筆される。近畿圏全体では「～ヤ」が基本である。推量の意味では「～ダー、～ダレ（北部）、～ダロ（南部）」になるという（『関西弁事典』）。助詞の「が、は」は名詞と融合して「蛸が、蛸は、鷹が、鷹は」は全て「タカー」となる。こうなると、格助詞としての「が」と係助詞としての「は」は区別できない。そもそも単独名詞としての「蛸、鷹」が音声上は融合してしまい、区別ができない。また「～してください」が「～テッカ」で、例えば「教えテッカ」であるという。京阪式の敬語助動詞「なはる、おます」という文末形で共通であるが、全体としては敬語は少ないという（同事典）。

播磨

周縁圏で最も西に位置するのが播磨国である。西隣は備前や美作であり、因幡国とも境を接している。但馬とも長い国境を共有するが、同国は中国方言圏である。近畿方言と中国方言との方言差は大きい。播磨は両方言境界の最前線に位置する。京を起点とする西国街道が播磨灘沿いに東西に通じており、海運でも要地である。

基本的に京阪方言と同じであるが、西播磨と東播磨で差異が認められる。東西の境は姫路市内で分かたれるようである。『関西弁事典』によると西播磨方言は「垂井式アクセント」体系で、「その船が見える」は全高、「無い」は高低となっている。京阪式では「その船が見える」では「その」と「が」と「る」が高で他は低、「無い」は低高で筆者（東播磨方言域で生育）の内省とも一致する。「その船が見える」が全高というのは、隣接する地で三十五年間生活していたとは雖も、非常に奇異に感ぜられる。「眼鏡、花火、電車、電池、選手、十、地図」は全て頭高であり神戸方言とも共通であるが、「猫」は頭低で、これが神戸市のどこまで同様であるかは積年の課題である。西播磨方言の特徴としてはガ行鼻濁音の劣勢、東播磨方言ではザ行－ダ行－ラ行の混交が挙げられている。

言い回しとして「べっちょない」（「べっちょ」は別条）、「ごおわく」（腹立たしい、「業を煮やす」の業であろう）、「せんどぶり」（久しぶり）、「せがない」（張り合いがない）、「ずつない」（食べ過ぎて苦しい）、「だっちもない」（しょうもないの意、ダッチは埒からの変化）、「しょーとろしい」（興味はあるが高価すぎて手が出ない）などが際立つ。「しょーとろしい」のみは他への言い換えが不可能である。例えば店頭である品が目に残ったが、高価すぎて手が出ない、というような場面である。「だっちもない」は「埒が開かぬ」からの転で、物に値打ちがないことを言う。どれもが日常感が溢れる場面で頻用される部類の言い回しである。

以下のようなテ敬語は、京阪方言的な面と中国方言的要素を併せ持っている同事典は指摘する。

「先生今日来てか」「じき来てや、昨日も来た一ったで」

後者の「来た一った」は京阪式では「来てはった」であろう。カ行変格動詞「来る」の過去形「来た」にテ敬語が加わって、複雑な音韻変化過程が作用した結果である。

丹波

丹波は内陸国で、周囲は播磨－但馬－丹後－近江－山城－摂津に囲まれている。地理的にも言語的にも、西半分は摂津との関係が深く、東半分は山城との結びつきが強いと言える。『関西弁事典』によると西半分は旧氷上郡（丹波市）と多紀郡（篠山市）、東半分は北部（福知山、綾部）と南部（南丹市や亀岡市など）というように四分割できるという。東西で大きく二分した場合は、西では過去の否定形が「～ヘンダ」、東では「～ヘナンダ」である。東側は更に、福知山と綾部で「来ない、来なかった」が「コン、コナンダ」、南丹や亀岡では「キーヒン、キヤヘンカッタ／キーヒンカッタ」という差が生じる。「キーヒン」は山城方言で「しなかった」が「シーヒン」となるのと共通点があると言える。

敬語使用はやや複雑で、西部である篠山と東部の福知山や綾部でテ敬語が見られるのは播磨方言と共通である。しかしそれ以外の地域では摂津方言と同じハル敬語に加えて、過去形にタッタやチャッタがあるという（同事典）。京阪式で「行きはった、行かはった」が丹波では「行ッチャッタ」となる。更にヨルが加わると、「先生あっちゃこっちゃ行ッキャッキョッターッタ」というように複雑になる。行き＋歩き＋ヨル＋テ＋ヤッタと複合すると、早口ことばのような活用形になるのである。

アクセント体系は、東西よりも南北で対立を示す。南部は京阪式で北部は垂井式という対立がある。南部は摂津や山城に隣接しているので、アクセントも地続きであると考えられる。篠山では京阪式で「雨、秋」が単独では頭低で二音節目が高→低となる記号「\」が附され、助詞「が」を伴うと二音節目は高となっている（同事典）。音節内で高→低と音高が推移すると、必然的に一拍半以上の長さになる。京阪式では低－高と二音節二拍である。助詞「が」が後続すると一拍になるので、複雑な音高推移はなく単に高となってアクセント核が付与されている。北の丹波市は垂井式で、単独でも「が」後続でも全て頭高になる。

若狭

若狭と越前の国境は、敦賀と美浜の間に位置する。若狭は丹波と地続きであり、京までは鯖街道を通じて行き来が盛んであった。但し鯖街道は近江路によって琵琶湖の水運を利用したことであろう。小浜は京の真北で直線距離では十里ほどであるが、間には険しい丹波高地が立ちわだかっている。陸路としては東に抜けて近江に入るか、西に舞鶴に向かうのが順当であろう。嶺南方言と括ると、越前である敦賀が含まれるので、若狭方言とは区別が必要である。越前では嶺南－嶺北と京から離れるに連れて、近畿圏外という色合いが強まってくる。若狭までを近畿方言圏内とみなすのが通説のようである。

東部の美浜町や若狭町では準垂井式で、小浜以西は垂井式アクセントである。また文節の切れ目で揺れる音調は北陸方言に顕著であるが、若狭でも聞かれるという（『関西弁事典』）。語法では、カカン（書かない）、アメヤ（雨だ）、コータ（買った）、アコーナル（赤くなる）というように、近畿方言との共通点が多い。若い世代で「来ない」をコーヘンとするように、近畿圏の若年層と同じ変化を起こしつつあるようである。動詞相の「～している」が～トルとなって、中国方言に近い面も見られる。敬語体系は些か複雑である。高齢層では周辺部に古形の～ッシャル、～ンスが残っているほか、全域で～ナサル、ナル、小浜中心部と旧上中町や高浜町には～テヤが分布するという（同事典）。

近江

近江一国は、琵琶湖が面積で六分の一を占める。街道筋は、東海道と中山道と北陸道が分岐する要衝の地である。京から見れば、東国に下るにはこの地を避けて通ることはできないという地理関係である。方言区分も、琵琶湖を基準として東西南北の四つに分ける。湖北は伊香から浅井長浜を経て坂田までで、残る東西南の三方言とは大きく異なる。北陸道を辿れば越前に抜け、中山道で美濃に続くという地理的な要素から、近畿方言よりも隣接する越前や美濃のことばと共通点を持っていたとしても不思議ではない。京から大津に抜けるには、山科を通して追分の峠越えをするだけで、呆気ないほどの近さである。この近辺は湖南であり、比良山系麓の湖西と八日市など湖東と共に近江方言の中核をなしている。

湖南方言の特徴として挙げられているのが、イカヘン（行かない）、ミーヒン（見ない）というような否定形で、これらは隣接する京ことばと同形である（『関西弁事典』）。従来は湖南方言という区画内であった甲賀は、イカヒン、ミヤヒンというような湖東方言との共通点や、隣接する伊賀方言のミサッサル（ご覧になる）という敬語方式やイコニー（行こうね）における終助詞ニーなどの影響が指摘されている。

湖東方言は、「行く、見る」の敬語形イカ（一）ル、ミヤ（一）ルが、湖東北部でイカンス、ミヤンスとなる。後者は湖北方言と共通であるという（同事典）。「来る」に助動詞ヤンスを後続した場合、キヤンス、キャンズ、コヤンス、ゴンズなど地域によって活用形が異なる。他には「危ないホン」（危ないよ）という終助詞ホン、「ほんでナーシ」（それでね）という間投助詞ナーシ、「そこに行くトサイガ」（行ったら）「行くサケ／ハケ／デ」（行くから）というような接続助詞という部類が見られる。「一緒に行こマイ」という勧誘表現では、終助詞マイが隣接する美濃方言の影響であると指摘されている（同事典）。

湖西方言の特徴ではシェンシェー（先生）やジェーキン（税金）というようにセ・ゼが口蓋化してシェ・ジェになるというが、若い世代では最早聞かれないであろう。動詞の否定形式は（ヤ）セン、接続助詞ハケ／サケ、敬語（ヤ）ンスという辺りが湖北方言と共通である（同事典）。

このように近江国全体では、琵琶湖を取り巻いて東西南北という四方言が有機的に結びついている様子が窺える。湖北を除いては京ことばの影響が強いという点も共通しているであろう。

伊賀

伊賀国は、周囲を山城－近江－伊勢－大和に囲まれた内陸地である。山城と大和は畿内であるから、言語的にも畿内の言葉遣いに近いと考えられる。面積としては志摩よりは大きいが和泉国と同程度であって、他の諸国よりは小さい。小さいながらも、北半分は近江を介して京に心理的に近く、南の名張は大和を介して難波と繋がりが強いという傾向が観察される。

伊賀方言では連母音の融合現象が見られ、ダエコ（大根）、アカエ（赤い）となる。語彙では、メボ（麦粒腫、京阪ではメバチコ）、イコニ（行こうよ）、机をツル（運ぶ）など伊勢方言を通して東海方言的要素も入っている。他方ではカエルサカイ（帰るから）、シアサッテ（明後日の翌日）、雨がフッテル（降っている）など京阪方言の言い様である。そして「帰ってクレル」は授受表現ではなく敬語で「お帰りになる」というのは伊賀方言特有である。また「行

ってだーこ」が「行ってください」という意になるのも伊賀特有である。

伊勢と志摩

伊勢は南北に細長い地形である。北は中部圏の美濃と尾張に接し、西では近畿圏の近江と伊賀と大和に接し、南は紀伊である。志摩は志摩半島の先端を占めるだけというようになっており、面積としては畿内と周縁圏を合わせても最も小さい。方言区分としては、度会郡を南北に二分割して以北を北伊勢方言とし、同郡の南半分と志摩を一つとして南伊勢・志摩方言と区分する（『関西弁事典』）。つまり、志摩方言は南伊勢方言と同一の区分となっている。これは面積が小さいという事実からも必然的であったかもしれないが、三方を海に囲まれて残りは伊勢と地続きであるという地理的情勢からの結果であろう。東西アクセント型の境界は、木曾三川で最も西を流れる揖斐川である。ここから西が、近畿方言圏である京阪式アクセント型を示すのである。

語彙面で、北伊勢は地続きである尾張方言の影響を受けている例がある。コーライ（玉蜀黍）やメンボ（麦粒腫、京阪ではメバチコ）である。コーライの語源は「高麗」であろうか。これらは中伊勢以南ではナンバ、メボである。京阪式のオーキニがオーキンナ、ヨーオコシがヨーオイナシテと変化する場合もある。語彙の次元に留まらず、日常会話の語法でも京阪式と共通点が多いと言えよう。

志摩方言の布施田には、動詞の音便形で特徴的な活用が見られる。マ行五段活用で母音が「ウ」ならば撥音便で「ツンダ、クンダ（積む、汲むの過去形）」と京阪式と同様である。ところが「ウ」以外では「ノーダ、コーダ（飲む、嘔むの過去形）」というようにウ音便であるという。京阪式ではノンダ、カンダと撥音便であるところが、特異な活用形を示している。これは大和南部の十津川方言や九州方言と共通であり、室町時代の口語形式とも一致する古形である（同事典）。

文法にも京阪式と名古屋式の平行が見られる。京阪式の否定のヘン、敬語のナハル、原因や理由を表すサカイやヨッテと、名古屋式のセン、敬語のイカッセル（いらっしゃる）、ミエル（お越しになる）が併用される。伊勢方言全体として、一段活用やサ行変格・カ行変格活用動詞の否定にはヤンを用いる。ミヤン（見ない）、シヤン（しない）、キヤン（来ない）という具合である。これは畿内中心部の規範的な語法とは一致しない。否定の過去形は、イカンダ（京阪ではイカナンダ）、ミヤンダ（ミナンダ）というように京阪式のナンダガンダとなる。ミヤンダは現在形の否定ミヤンからの派生と考えれば筋道が立てやすい。しかし近畿方言としては規範的語法から外れている。

紀伊

紀州は、紀伊半島の半分ほどを占める。西は泉州との境から、東は伊勢との境になる尾鷲まで長い海岸線に沿って延びていたのである。河内や大和とは陸地だけで境を接している。海岸線の延長は四囲が海である淡路よりも長く、圏内で最長である。このように細長い地勢であるから、方言区分も多様である。大きく紀北－紀中－紀南と分けるのが一般的であろうが、紀南は更に西牟婁－東牟婁－南牟婁－北牟婁というように区分するのが現行の行政区域の境界とも一致している。今の県境は東牟婁と南牟婁の間にあり、新宮は東牟婁の東端で熊野川を渡れば

南牟婁の地である。紀北は畿内と接しているが、紀中－紀南と南下するに連れて地理的また心理的な距離も増大することであろう。紀中と紀南では、海沿いでない地域は奥地方言と区分する。

アクセント型に関して、方言圏論の観点からも非常に興味深い言及がある（同事典）。中紀方言の北端に位置する田辺で、次のような型が見られるという。

サガル（サガル） アカイ（赤い）

京阪式であれば、サガル、アカイとなるところである。この田辺型が龍神村を経て、京阪式に変化していったというのである。細い線が繋がっていけば、方言圏論を裏打ちするような材料に変容するであろう。

音韻面では、長母音の短呼と短母音の長化が混在している。前者はシンボ（辛抱）やサト（砂糖）であり、後者はニール（煮る）やターカイ（高い）である。前者は、船場ことばでも「シンボしといと」というように耳にすることもあるので、一定程度の普遍性が認められよう。しかし後者は紀伊方言に特有と思われる。促音節は、ミトモナイ（みっともない）では脱落、オッサエル（押さえる）では付加と、これも予測不能である。ザ行－ダ行－ラ行の混交も顕著で、雑巾はドーキン、「まだ」がマラになる。母音交替はマツト（もっと）、ハソム（挟む）、タノキ（狸）、ヨムギ（蓬）において見られるが、交替の方向は一定ではない（『関西弁事典』）。

助詞類の特徴は、主格助詞で雨ン（雨が）、勧誘を表す「連れもって行こう」（一緒に行こう）のラ、比較を表すソレシカ（それより）、否定的な限定の一本ハカナイ（しかない）が表格である。丁寧な態度を表す終助詞ノシは、紀中方言に特有である。

紀伊方言における動詞活用的一大特徴であると考えられるのが、母音語幹動詞に接続する否定辞のヤンである。シヤン、来ヤン、見ヤン、起キヤン、寝ヤン、食べヤンなどで、これらは従来の方言伝播とは逆方向に、畿内への影響が見られるという（同事典）。状況可能形式で二段活用するヨムル（読める）、キルル（着られる）は古風であるが、奥地方言に僅かに残るのみである。

第四節 近畿方言圏外

最後に採り上げるのは、地理的に近畿圏内の二府四県内でありながら、方言区分では近畿方言と分類されない丹後と但馬である。両国は日本海に面し、隣り合っている。西隣は中国方言圏の因幡であるが、南は播磨と丹波で東は若狭というように近畿方言周縁圏と接している。但馬と丹後の両方言は近畿方言的ではなしに、中国方言的な要素が強いと見られている。近畿方言圏と中国方言圏を分かつ最大の基準は、アクセント型である。近畿方言圏は京阪型を基準として、その変種であることが基本要件である。中国方言圏は首都圏型であって、京阪型と交わらないような変異を示す。また首都圏型ではない南但馬方言は、垂井式アクセントという、輪をかけて耳に馴染みがないような抑揚を具現化させる。その次には母音融合というような音韻変化によって、近畿圏方言と聞いた印象が全く異なる話し方となる。

但馬

但馬は北が日本海で、周囲は因幡と播磨、丹波、丹後に囲まれている。三方を山に囲まれており、特に南西部の水ノ山などが高峻である。海岸線も切り立った岩場が多い。方言区画としては、日本海に面した旧美方・城崎・出石郡を北、養父郡と朝来郡を南と二分割するのが定説であろう。

近畿方言との隔たりが最も大きいと考えられるのが、アクセント型である。北但馬は首都圏式、南但馬は垂井式である。

浜坂、豊岡	$\overline{\text{フネ}}$	$\overline{\text{このフネ}}$	$\overline{\text{フネが見える}}$
垂井式	フネ	このフネ	フネが見える

首都圏と同じような抑揚は耳に馴染みもあるが、垂井式というのは初めて接したとすれば基準をどこに置くべきか戸惑いを覚えるような感覚である。京阪式とも首都圏式とも全く異なる体系のように聞こえる。「フネが見える」では名詞－格助詞－動詞という統語構造になっているが、六音節を通して全高となっているので、どこで語句の切れ目が入るのか理解に戸惑うのである。また文末の終助詞ネーが下降＋上昇という複雑な音調になるのは、北陸の「うねり音調」と呼ばれるものである（『関西弁事典』）。

語彙では、瀬戸物をカラツモノと呼ぶのが日本海特有であると指摘されている。瀬戸内では瀬戸物として流通しているのだから、九州の地名で呼ばれるのは北前船で運ばれていた名残であろう。カラツモノは淡路でもそう呼ばれている。

断定の助動詞はダで、「今日は、エー天気ダ」などとなる。これも首都圏方言と同様で、京阪式のヤとは異なる。敬語はハル、ナハルで、この点は京阪式である。

丹後

丹後も日本海に面して、周囲は但馬と丹波と若狭に境を接している。海岸線は切り立った岩場で、舞鶴のような良港や天橋立という景観地を擁している。

丹後方言を中国方言圏と分類するのは、京阪式ではなく首都圏式のアクセント型であることが決め手であろう。第二の音韻的特徴として、連母音の融合を挙げることができる。アイとアエはヤー、オイはエー、ウイはイーとなる。アキヤー（赤い）、ナミヤー（名前）、シレー（白い）、ワリー（悪い）といった具合である。奥丹後西北部（久美浜）ではワ行五段活用 of 過去形とテ形がそれぞれカータ（買った）、カーテ（買って）、サ行五段動詞のイ音便形がハナエタ（話した）となる。これは西隣の但馬と共通であるという（『関西弁事典』）。次に、五段動詞以外の意志形がオキョー（起きよう）、アキョー（開けよう）というようになる。母音融合によって複数の母音素が長音化によって一つになり、地域外の聞き手にとっては聞き慣れない音型になる。その他音韻的特徴として、語頭以外のガ行音が非鼻濁音になることが指摘されているが、これは近畿方言全体において若年層に見られる共通点である。

語彙では、シャッテモ（ぜひとも、どうしても）、イカメー（羨ましい）、ホテ（脇、傍、側）などが固有である。「シャッテモ」は京阪方言「さ（っ）ても」との関連が考えられるが、追加考証が必要である。

語法面では、ナ行変格活用「死ぬる」の保存、形容詞の仮定形タカケリヤ、タカカロー(ガ)、原因や理由を表す接続助詞デがある。敬語体系はナ(一)ルが特徴的である。行きナ(一)ルというようになる。

第五節 結び

ここまで、方言圏論に立脚して近畿方言の諸相を論じてきた。畿内－周縁部－圏外という三重の同心円で区画される地理的状况は、地図によって視覚的に表示することができた。明治維新後の府県境よりも、旧国名で区画されている方が方言差を論じるには好都合であった。通時的には、明治維新後の百五十年ほどに経た変化よりも、それ以前に形成されていた方言圏が強固であったと言えよう。区分としても、二府五県なり六県(福井を含めた場合)というのは大まかに過ぎる。同じ府県内でも方言差が大きすぎる。旧国名では十七箇国であり、中分類としては妥当な数である。これ以上に細分化するとなると、各国を二分するなり三分するなりと段階を踏まねばならぬ。本稿においては和と近江は一国一県であったので、下位分類によって分析した。

細かく考察すると、但馬と丹後は畿内から比較的に近いのに中国方言圏であるのに対して、遠く離れている志摩が周縁圏であるというような「矛盾」するような場合も見られる。これは畿内からの距離という単純な要素だけではなく、間を隔てる山や川あるいは交易の必要性や頻度というように多様な尺度によって左右されると考えられる故である。

近畿方言圏であるか否かという最大の基準は、アクセント型であった。一千年以上の間、京に都が置かれていた時代を通して醸成された京ことばと、天下の台所であった船場を中心として形成された船場ことばによって、現代における京阪方言の基礎が築かれたと言えよう。その規範は語彙における抑揚型であり、西播磨や南但馬に見られる垂井式は畿内型とは直接に接していない。必ず周縁圏という緩衝地帯を挟んでいたのである。

前稿で見たような京ことばと船場ことばの語用論的な側面は、外に住まう者には通じにくい、武芸の間合いというような様相を呈していた。本稿で見てきたような方言差は、もっと皮相の次元であるとも見える語彙の抑揚を基準としたのである。

本稿で前提とした方言圏論は、近畿圏においては京阪方言、特に船場ことばと京ことばが規範として機能しているという事実を再確認する結果となった。畿内においても和、河内、和泉では京阪方言と少し異なる要素が見られる。播磨や丹波や近江など周縁圏でも京阪方言との違いがあるという点では、相対的な違いである。そして周縁部では常に畿内との距離感が意識されながら独自の方言が形成されていったという経緯が観察された。

前世紀末から今世紀にかけて行われた市町村合併について触れておきたい。合併前は三千以上あった地方自治体の数が、合併によって千七百二十七と半減に近い。日本全体として人口減という状況があり、近隣自治体を統合することによって合理化を目指すという意図があったのであろう。しかし反面で自治体としての纏まりに欠け、広すぎて地域事情に応じた行政ができないなど改善点も出現しているのではないだろうか。全国規模での例で見ると、岐阜県高山市のように香川県や大阪府より広いというような極端な事例もある。近畿圏では、丹波国西半分が旧氷上郡→丹波市、旧多紀郡→篠山市というように僅か二市になってしまった。郡名も、旧

町名も目にする機会は激減した。このように、半ば強引とも思われる市町村合併によって失われるものも多い。方言学では、これまでに蓄積されてきた地名との齟齬が生ずるといような混乱も想定される。

参考文献

- 泉文明（2012）『京ことばとその周辺』京都：晃洋書房。
- 稲垣史生（編、2007）『三田村鳶魚 江戸生活事典』（新装版）東京：青蛙房。
- 井上章一（2015）『京どぎらい』東京：朝日新聞出版。
- 井上章一（2018）『大阪的』東京：幻冬舎。
- 大淵幸治（2022）『本当は怖い京ことば』名古屋：リベラル社。
- 桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻 増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp.3-22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉よう子、他（編）所収。
- 角岡賢一（2021）『上方落語に見られる待遇表現』東京：くろしお出版。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 陣内秀信（2023）「都市空間のなかの長屋」田中優子（2023）所収。
- 関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇 B。
- 田中優子（編著、2023）『落語がつくる〈江戸東京〉』東京：岩波書店。
- 田中優子（2023）「「長屋」という思想」上掲書所収。
- 帝国書院（2022）『最新基本地図』四七訂版。東京：帝国書院。
- 秦恒平（2012）『京のわる口』東京：平凡社。
- 前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 三島佑一（2016）『船場道修町 薬・商い・学の町』大阪：和泉書院。
- 山田庄一（2021）『京なにわ暮らし歳時記』東京：岩波書店。

動物の魂とは何か： 動物と機械と魂の（非）物質性 をめぐる初期近代自然哲学の論争

岡 田 典 之

▶ キーワード

Ralph Cudworth
Thomas Willis
Walter Charleton
Margaret Cavendish
機械論

▼ 要 旨

デカルト主義・機械論の動物観を受けて、十七世紀英国では動物の魂についての議論が盛んになった。プラトン主義者であるカドワースは、機械論的自然観の意義を認めつつも、動物、さらには植物の生命活動は機械論では説明できないとし、非物質的実体である魂や plastic nature が物質からなる自然界に行きわたり、運動、生命を与えるとした。医師であるウィリスやチャールトン、動物の魂は物質的なものであり、火のような、活発な微粒子からなると考えた。微粒子が動物の運動、感覚を引き起こすというのはディグビーに見られる機械論的な説明と同じだが、これを魂と呼ぶところに大きな違いがある。ただし、この動物の魂は、人間の非物質的な魂と比べるとはるかに劣るものであった。カドワースやウィリスが前提としている精神（非物質）と物質という二元論的枠組みに対して、キャヴェンディッシュは生氣論の唯物論を唱え、動物、植物、鉱物を含めてあらゆる被造物は生命を備えた matter からなると考えた。それによれば、すべての被造物は生きており、動物のものも含めて魂のような非物質的実体を前提する必要はない。魂の物質性、非物質性をめぐるこのような多様な議論は、機械は意識や知性を持つことができるのかという現代の問題についても何らかの示唆を与えることができるかもしれない。

序論 動物の魂

動物に魂はあるか。あるいは魂という語があまりにも茫漠としているというのなら、動物に感覚や感情や理性や意識はあるのかと問うこともできるだろう。そこで、昆虫には喜怒哀楽のようなものはないであろうという推定のもと、哲学研究者の金森修は、昆虫はほとんど機械のようなものなのだから「蟬が死んだ」ではなく「蟬が壊れた」と述べてもいいのだと講義中に語るのだが、その言葉を発した途端、ある受講生が大声で叫ぶという反応を見せる（金森3-6）。この「不謹慎な」発言は、ある種の知的露悪趣味にすぎないと言えるかもしれないし、また若気の至りでもあるのだろう（「蟬が壊れた」に対して徐々に醜さを感じるようになったと金森は述べている）。とはいえ、この「蟬が壊れた」という表現とそれに対する学生の反応は、動物（さらには生物一般）の生命と魂の関係について、様々な問題の端緒となる。昆虫が生き物であることを金森は否定していないのだから、生き物は喜怒哀楽を持つものと持たないものとに分けられることになるが、その線引きはどこにあるのか、また持たないものが「壊れる」と言っているのかどうか。大声で叫んで異議を唱えた学生は、昆虫にも喜怒哀楽があると考えたのか、あるいはそれがなくても「壊れる」という表現を使うべきではないと考えたのか。

ここで「喜怒哀楽」という代わりに「魂」という言葉を使うこともできるだろう。昆虫には「魂」があるのか、あるいは「魂」はないが、「壊れる」とは言えないのか。魂を持つものが生きているのは当然だとして、生きているものはすべて魂を持つのか。魂を持たない生き物がいるとすれば、それは魂を持つ生き物とどう違うのか。ある生き物が魂を持つかどうかをどのように判断するのか。いや、そもそも魂とは何なのか、あるいはそんなものが存在するのか。

こうした動物の魂の問題は（人間の魂の問題とも絡み合い）十七世紀の自然哲学の重要な論争のテーマの一つとなった。本稿では、主として十七世紀後半の英国において、魂、機械、生命、動物といったものが自然哲学者たちによってどのように語られたのかを検討し、またそのような議論の意義が単なる歴史的興味にとどまるものではないことを示したい。

1. 動物の非物質的魂

動物の魂をめぐる十七世紀の議論、論争の重要なきっかけはデカルトの機械論的自然観だが、デカルト自身は動物を機械と同一視していたわけではなく、生命現象を機械論的に説明することが可能であることを示そうとしたのであり、生命を機械に還元しようとしたのではなく、機械の地位を生命にまで高めようとした（Riskin 44）とも言える。とはいえ、非物質的な理性、精神と物質、延長を厳密に区別し、あらゆる自然現象を機械論的に説明しようとする態度は、理性を持つ人間以外の動物をすべて単なる機械、時計と同じように巧妙精緻に作られ正確に動作するが生きてはいないものとみなす態度に容易に変化してしまう。そこで動物の魂をめぐる議論のひとつは、まず、非物質の実体（魂、あるいは生命）を奪われて完全に機械化された自然界に機械論以外の要素を取り戻そうという議論になるが、こうした論を展開したのがいわゆるケンブリッジ・プラトン派と呼ばれる哲学者たちであった。かつてデカルトの自然哲学をいち早く英国に紹介したヘンリー・モア（Henry More, 1614-1687）は、動物は機械に過

ぎず感覚を持たないとする考えを、殺人的で致命的であると非難し、これ以上に嫌悪感を催させるものはないとまで述べている (Muratori, 2012, 207-208)。またラルフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617-1688) も、『宇宙の真の知的体系』 (*The True Intellectual System of the Universe*, 1678) の中で次のように述べている。

But they would have concluded it, the greatest Impudence or Madness, for men to assert that Animals also consisted of mere Mechanism; or, that Life and Sense, Reason and Understanding, were really nothing else but Local Motion, and consequently that themselves were but Machins and Automata. (Cudworth 51)

ここで「彼ら (they)」と言われているのは古代の自然哲学者たちで、カドワースは彼らの説を紹介、解説するという形で自説を述べていくのだが、彼らによれば、動物を単なる“Mechanism” と考えることは狂気なのである。とはいえ、カドワースは、自然の機械論的説明そのものを否定するわけではない。『体系』の中でカドワースは、自然界は微細な粒子・原子によって構成され、それらの機械的な運動によって自然現象が説明されるという、原子論のかつ機械論的自然観を古代哲学の伝統ととらえ、その利点を次のように述べている。

And now this Atomical Physiology of the Ancients seems to have two Advantages or Preeminences belonging to it, the first whereof is this; That it renders the Corporeal World Intelligible to us; since Mechanism is a thing that we can clearly understand, and we cannot clearly and distinctly conceive any thing in Bodies else. (48)

物質的世界を理解可能なものにするのは原子論的自然学であり、私たちが物質において明確に理解可能なのはメカニズムである。このように、自然をよりよく説明するための原理として機械論を評価する態度は、近代的な意味での科学的態度のようにも思われるが、カドワースはさらにもうひとつの利点を付け加える。

The Second Advantage, which this Atomical Physiology seems to have, is this, That it prepares an easie and clear way for the Demonstration of Incorporeal Substances, by settling a Distinct Notion of Body. (48-49)

... there are many such Particular Phaenomena in Nature, as do plainly transcend the Powers of Mechanism, of which therefore no Sufficient Mechanical Reasons can be devised, as the Motion of Respiration in Animals; as there are also other Phaenomena that are perfectly Cross to the Laws of Mechanism.... (148)

つまり、原子論的自然観は物質の明確な定義を与えることによって、非物質的実体の存在を証明する明快な方法を示し、機械論は、原子の衝突という機械論的な説明では説明できない現象があることを示すことによって、非物質的実体の存在が必要であることを強く示唆するもの

となる。カドワースの重点は、明らかに物質ではなく非物質的実体の方におかれ、そしてここでは機械論的に説明できる現象とそうではない現象を明確に切り分けることが重要となるのである。カドワースは、古代原子論はエピクロス、デモクリトスによって無神論的に堕落させられたと批判しているが、それは原子論が唯物論的になり、あらゆる現象が原子とその（偶然の）運動によって説明できるとされたからである（51）。動物の運動、感覚、誕生、成長などは、カドワースにとっては粒子の衝突によっては説明できない現象であり、何らかの非物質的な実体、つまり魂を必要とする。カドワースにとって真正の原子論、粒子論、およびそれに基づく機械論的自然観は、機械的に説明できない領域を残すことによって非物質的実体の存在を必要とする、つまりは有神論的なものなのである。

またカドワースは、魂、あるいは少なくとも感覚的魂を（理性的魂とは異なって）物質的であると考えることも強く批判しているが、例えば火のような物質が魂を構成すると考えることは、何の感覚も持たない物質が単に運動することによって感覚を備えることになることとしてであり、機械と非機械、物質と非物質を混同する過ちなのである（46）。

このようにカドワースは動物の魂の存在、そしてそれが非物質的実体であることを主張するのだが、ここで問題が生じる。もし動物にも非物質的魂があるとすれば、動物の死後その魂はどうなるのか、という問題である。もし動物の死後、その魂が消滅するというのなら、それは非物質的実体が消滅する可能性があることになり、ひいては人間の魂の永続性にも疑問を投げかけるものとなる。しかし、動物の魂は非物質的実体なのだから消滅しないとするなら、その死後、魂はどうなるのか。人間の魂と同様に救済されると考えることも可能だが、昆虫やさらには無数の目に見えないような動物の魂まで救済されると考えられるのか。これに対してカドワースは、動物の魂に永続性を認めるのは、神が創造した matter や atom は自然的に消滅し無に帰することがない、つまり永続すると考えるのと同様、absurd なものではなく（44）、また動物の魂の永続性が、人間の魂の永続性の観念を弱めることにはならないと主張する。

Neither will this at all weaken the future Immortality or Posteternity of Humane Souls. For if we be indeed Theists, and do in very good Earnest believe a Deity..., we must then needs acknowledge, that all created Being whatsoever, owes the Continuation and Perpetuity of its Existence, not to any Necessity of Nature without God..., but to the Divine Will only. (45)

すなわち、動物の魂、人間の魂も含めて、被造物の永続性は自然によるものではなく、神の意志によるものなので、これを疑う余地はないのである。ただし、永続するとはいえ、動物の魂には、理性、道徳、自由意志を持った人間に与えられる報いとしてのあの世での永続性は与えられない。

And for ought we Mortals know, there may be good Reason, why that Grace or Favour of future Immortality and Post-eternity, that is indulged to Humane Souls, endued with Reason, Morality, and Liberty of Will, (by means whereof they are capable of Commendation and Blame, Reward and Punishment) ..., may notwithstanding be denied to those

lower Lives and more contemptible Souls of Brutes, alike devoid both of Morality and Liberty. (45)

カドワースはまた、動物の魂は神が創造するものであり、自ら無に帰することはないとはいえ、神が自ら創造したものを「望みのままに無に帰する (Annihilate it at pleasure, 45)」ことは疑いえないと言う。つまり非物質的実体である動物の魂は自然的には消滅することはないが、神の判断によって消滅させられうるのである。この答えはもはや自然学の範囲にあるものではないが、有神論者カドワースにとっては必要不可欠なものである。魂を非物質的実体と考える限り、不死性の問題を避けることはできない。カドワースにとって、自然界で非物質的原理が働いていると想定することは、少々強引な説明を用いてでも認めなければならない自然学と宗教の要諦なのである。

原子論、機械論を有神論と結びつけ、動物にも非物質的魂を認めるというカドワースの魂論にはさらに問題が生じる。カドワースにとって、機械論的に説明できる現象とそうではない現象を明確に切り分けることが重要となることは先に述べたが、その境界線をどこに引くか、機械的に説明できる現象の範囲をどの程度認めるのかという問題も生じる。例えば、運動し感覚する動物に非物質的魂があるとして、運動、感覚は持たないように見えるが発生、成長する生物である植物に魂はあるのか。あるとすれば動物の魂と同様のものなのか。あるいは植物は魂を持たないが生きているのか、生命を持たない機械と同様のものなのか。そこでカドワースは、動物の魂とはまた別の非物質的実体を提唱する。それが plastic nature である。

That it is a certain Lower Life than the Animal, which acts Regularly and Artificially, according to the Direction of Mind and Understanding, Reason and Wisdom, for Ends, or in Order to Good, though it self do not know the Reason of what it does, nor is Master of that Wisdom according to which it acts, but only a Servant to it, and Drudging Executioner of the same; it operating Fatally and Sympathetically, according to Laws and Commands, prescribed to it by a Perfect Intellect, and imprest upon it.... (172)

つまり、動物の生命より低位の存在で、理性などの命令に従ってある種、定型的功能を果たすが、自らの機能について認識、理解することはできない非物質的実体が plastic nature なのだが、では自らの機能を理解できない実体がどのようにその機能を果たすのだろうか。

Nature is Art as it were Incorporated and Imbodied in matter, which doth not act upon it from without Mechanically, but from within Vitally and Magically, (158)

Wherefore the Plastick Nature acting neither by Knowledge nor by Animal Fancy..., must be concluded to act Fatally, Magically and Sympathetically. (161)

Now that which acts not by any Knowledge or Fancy, Will or Appetite of its own, but only Fatally according to Laws and Impresses made upon it... may be said also to act

ここでは magically という言葉に着目したい。非物質的実体（魂や plastic nature）が物質にどのように働きかけるのかという問題は、デカルトの二元論の難問、非物質的実体である人間の精神（魂）が物質である肉体をどう動かすのかという問題と同じ性質のものだが、これを「魔術的に」と言うことは（Sympathetically という語もまた魔術的なものを連想させるだろう）ほとんど自然学の限界のような解決法である。

またカドワースは、デモクリトスのような唯物論的（つまり無神論的）原子論者を批判する中で「魔術的」という語を用いている。

They make a kind of Dead and Wooden World, as it were a Carved Statue, that hath nothing neither Vital nor Magical at all in it. Whereas to those who are Considerative, it will plainly appear, that there is a Mixture of Life or Plastick Nature together with Mechanism, which runs through the whole Corporeal Universe. (148)

唯物論的原子論者の世界には magical なものはなく、その宇宙は死んだ木彫りの彫像のようなものである。これに対してカドワースはこの物質的宇宙全体に、メカニズムと結びついた形で plastic nature が行きわたっていると言う。つまり、plastic nature の適用範囲はもはや動植物にとどまらないのである。

... their Laws of Nature concerning Motion, are Really nothing else, but a Plastick Nature, acting upon the Matter of the whole Corporeal Universe, both Maintaining the Same Quantity of Motion always in it, and also Dispensing it (by Transferring it out of one Body into another) according to such Laws, Fatally Imprest upon it. (151)

... there must be also a general Plastick Nature in the Macrocosm the whole Corporeal Universe, that which makes all things thus to conspire every where, and agree together into one Harmony. (167)

運動の法則も機械論的なものではなく plastic nature であり、運動の伝達も（機械論的に衝突によってではなく）plastic nature によって行われる。そして宇宙全体の plastic nature によって宇宙は調和に導かれる。もはや機械論で説明できる領域はごくわずかしが残されていないと言うべきだろう。

このように、機械論の意義を一応は認めていたように見えるカドワースは、その範囲を狭めることで、世界を魔術化してしまおうとしているようにも見える。動物に非物質的な魂を認めようとするのは、単に動物に対する何らかのシンパシーの表れであったり動物の地位向上を目指したりするものではなく、被造物の世界、自然界全体に非物質的（霊的、オカルト的）原理を復活させようという宇宙規模の目論見の一側面なのである。

2. 動物の物質的魂

カドワースの問題、つまり動物の魂を非物質的実体と考えることで生じるいくつかの難問（動物の死後の魂に関する自然学を超えた説明、デカルト的二元論に対する magical な回答）を避けるための手っ取り早い方法は、魂を物質的なものと考えることである。物質的な魂ならば、動物の死とともに分解、消滅すると考えることが可能であり、動物の来世や救済を考える必要はなくなる。またそもそも物質であるので、それが同じく物質である肉体を動かすことには何の不自然さもない。医師、解剖学者、王立協会創設メンバーの一人であるトマス・ウィリス（Thomas Willis, 1621-1675）は、魂についての思索がいかに素晴らしいものであるか、また魂を探索しようとしなかった哲学者などこれまでいなかったと述べ、人間と野獣に共通の魂について哲学的に探究しようと言う。つまりウィリスにとっては、動物に魂があるのは当然のこととして前提されており、問題はそれがどのようなものであるかということになるのだが、ウィリスによると、この魂は肉体に依存し、肉体とともに生まれ、ともに死に、肉体を活性化させ、端的に物質的（plainly Corporeal, Willis 1）であるように思われる。また同じく医師であり、自然哲学者、著述家、原子論の英国への紹介者でもあるウォルター・チャールトン（Walter Charleton, 1619-1705）も、動物にある種の理性のような働き、知識や学習のようなものを認めつつ、それらを説明するのに何か非物質的性質を備えたもの（immaterial natures, Charleton 41）を導入する必要はないと述べている。

では、動物の物質的魂とはどのようなものなのか。ウィリスによると、それは火のようなものである。というのも火というものは、急速な運動状態にある連続した微粒子の集合体（an heap of most subtil Contiguous particles, and existing in a swift motion, Willis 5）であり、魂の存在は運動と生命に依存するという点で炎に似ており、魂も炎もいったん消えると元に戻らないのである。

The Existency of the Corporeal Soul, depends altogether on its Act or Life; and in this respect it seems most like to Common Flame.... as soon as it Ceaseth from all motion, it is no more, and can by no means be made whole again in the same number. (6)

それゆえ、物質は、いわば可燃物質が点火されることによって炎となるように、運動を始めるのである。

Wherefore, the Essence of this begins altogether from Life, as it were the infiring of a Certain subtil matter; to wit, when many active, and chiefly spirituous, and sulphureous Particles..., being praedisposed to Animality or Life, come together, in a fit Furnace or fire-place, take Life, sometimes being as it were inkindled by another Soul, sometimes of their own accord.... (6)

このような運動する微粒子が動物精気と呼ばれ（These most subtil particles are called the

Animal Spirits, 23)、炎から光が発するように、脳へといわば蒸留されて入っていく (those which are chiefly Subtil, as it were Beams of Light sent from a Flame, are, as it were distilled into the Brain, 23)。要するに、まさしく動物精気と呼ばれるこの希薄で不可視で活発な粒子 (most thin, invisible, and nimble, we rightly call the Animal Spirits, 23) が動物の物質的魂を構成するのだが、この「精気」と比較できるような自然物はほとんどなく、例えばワインの「精気 (spirit)」のようなものとは異なり、譬えるなら光に近い (it is better ... that we liken these Spirits sent from the Flame of the Blood, to the Rays of Light, 24) もなののである。

動物の魂は、このように物質性の極限にあるものとして想定されているのだが、しかしあくまでもそれは物質であり、不可視の微細な粒子の流れである。動物の様々な行動、理性的にも見える行動は、この魂と精巧な機械である肉体との結合から生じ (33)、巧みな技巧 (神の技) によって組み立てられた機構によって、素材にすぎない物質、物体は本来そこに備わった以上のことを為すことができる。技巧が素材を超える (the Workmanship Excels the matter, 33) このような巧みな機構の譬えとしてウィリスはオルガンを持ち出す。

... by Wind sent into musical Organs, and that being carryed variously thorow manifold openings of Doors, into these or those pipes, that it should create a most grateful Harmony, and Composed Measures of every Kind; this I say deservedly amazes us, and we acknowledg this Effect, far to Excel both the matter of the Instrument, and of the hand of the Musitian striking it. (33-34)

優美な調和にとって肝心なのはオルガンの機構であって、それがもたらす効果はオルガンの素材や奏者の技量を上回る。だとすれば、必ずしもそこに演奏者がいる必要はない。

... yet sometimes I have seen such an Instrument so prepared, that without any Musitian directing, the little doors being shut up, by a certain law and order, by the mere Course of a Water, almost the same harmony is made, and the same tunes, equal with those Composed by Art. (34)

ここでウィリスは、人間の奏者 (理性の比喩) がいなくてもほとんど同じハーモニーを奏することができる自動オルガンを動物に譬えているのだが、もし動物が自動オルガンに譬えられるのなら、それは機械論的動物観とほとんど変わらないのではないだろうか。いかに巧みなメロディーを奏するといっても、自動オルガンは決められたとおりに機械的に音を出すだけなのだから。さらにまた、魂は運動する微粒子のようなもの、という考えは、粒子の流れと衝突で動物の運動や感覚を説明しようとする機械論的動物観と、説明原理としてはさほど違いは無いとも言える。もちろん、機械論者はそれを魂とは呼ばないとしてもである。

ここで興味深いのは、ケネルム・ディグビー (Kenelm Digby, 1603-1665) の機械論的動物観へのウィリスの評価である。ディグビーにとって「魂」とは人間の理性的魂、非物質的で不死の実体であり、したがって動物には魂は存在しない。その意味で、熱烈な魂賛美者であるデ

ィグビーが徹底したデカルト的二元論者であり、また動物機械論者であることは拙論（岡田 39-41）で触れたとおりだが、動物の運動は、いわば “an artificial Motion of a Mechanical Engine” (Digby 158-159) であるとするディグビーについてウィリスは次のように述べている。

But our Digby supposing mobility of the particulars of this kind, out of which the Soul is made, adds further, That certain most thin Effluvia's, falling away from the sensible Body, do not only affect the Exterior sensories, but entring into the more interior recesses, mix themselves with the spirits, and moving them into Various fluctuations, do produce sense, and divers sorts of local motions.... (Willis 3)

ここでウィリスは、ディグビーの「流体 (Effluvia)」が、自らの運動する微粒子と同様のものであると評価している。神経内を流れる微粒子の物理的な衝突によって動物の行動を説明しようとするディグビーの機械論と、その微粒子全体を動物の物質的魂と呼ぶウィリスの間には、説明原理そのものに関してはほとんど違いは無いのである。

とはいえやはり、それを機械と呼ぶか魂と呼ぶかは動物、さらには自然界の捉え方に影響を与えないわけではない。例えばディグビーは、鳥の求愛や繁殖行動について次のように述べる。

Above all others, the orderly course of Birds, in this affair, is most remarkable. After they have coupled, they make their nest, they line it with moss, straw and feathers; they lay their eggs, they sit upon them, they hatch them, they feed their young ones, and they teach them to flie: all which they do with so continue and regular a method, as no man can direct or imagine a better. (Digby 408-409)

こうした場合の動物の行動の規則性は確かに驚異的なものだが、だからこそ、機械的に説明が可能となる。その細部のメカニズムを同定するのは困難だが、鳥のこれらの行動が物質的精気の運動、機械論的な衝突によって引き起こされることを示せばディグビーにとっては十分であり、鳥に理性を与えるような非物質的原理（理性的魂のようなもの）を想定する必要はないのである。

I conceive, it will be sufficient for us in this, to shew how these actions may be done by the senses, by the motion of corporeal spirits, and by material impressions upon them; without being constrain'd to resort to an immaterial principle, which must furnish birds with reason and discours (409)

例えば、鳥が巣作りにおいて快適な巣を作るのは、快適さを理解しそれを目指して巣材を整えるからではなく、巣の中の不快な刺激（例えば巣材が突き出ている体には刺さる等）に反応して体が動いているうちに巣が均されて快適な状態になるにすぎない。鳥は何らかの知識や反省によってではなく、上位の理性（すなわち創造主の意図）に従って機械的に運動する道具のよ

うなものである。

... the birds are but material instruments to perform, without their knowledg or reflexion, a superiour reason's counsels; even as in a clock, that is composed of several pieces and wheels, all the parts conspire to give notice of the several effluxes and periods of time, which the maker hath order'd it for. (411)

... which, by the design of the supream workman, bring to pass such effects as we see in the building of their nests..., as may be compared to the strikings of the clock, and the ringing of the alarm at due times. (412)

Wherin the Birds... are but passive instruments, and know not why they do those actions: but do them they must, whenever such and such objects... make such and such impressions upon their fantasies; like the allarum that necessarily strikes, when the hand of the Dial comes to such a point, or the Gun-powder, that necessarily makes a ruine and breach in the wall, when the burning of the match reaches to it. (413-414)

鳥は神の material instruments であって時計のようなものであり、巣作りから産卵、孵化、子育てから巣立ちまで、すべてにおいて passive instruments として自分が何をしているかを知らずに、刺激に応じて必然的に運動しているにすぎない。それでも鳥（動物）は少なくとも（刺激に応じるための）感覚を持っているのではないか、つまり単なる機械ではないと言えるかもしれない。たしかに上記の引用の一つでディグビーは “these actions may be done by the senses” と述べているのだが、そこでディグビーが譬えに持ち出すのはやはり時計や火薬といった無生物なのである。非物質的理性を持たない動物は、感覚的に行動しているのだが、その感覚刺激による運動とはディグビーから見れば生物的なものではなく、時計や火薬の発火に譬えられるような機械的なものなのである。

これに対して、デカルト、ディグビー、ウィリスをまとめて “excellent Men, and curious wits” (Charleton 41) と評価するチャールトンは、同じく鳥の求愛、繁殖活動を次のように描写する。

... in the Spring, when Birds feeling the warmth and invigorating... influence of th' approaching Sun... find themselves pleasantly instigated to their duety of Propagation; then, without any other impulse, or direction, but that of natural instinct, they dextrously ... address themselves chiefly to that most delightful work. First, with a kind of chearful Solemnity they choose, and espouse their Mates, all their Femals bringing love, obsequiousness, diligence and feather-beds for their dowry. Then they seek for places convenient to reside in, and there with skill and art exceeding the proudest of humane Architecture, they build their Nests. Which are no sooner finished, than they lay their Eggs therein. Upon these... they sit with admirable constancy and patience untill they have

hatch'd them. And that great work done, they in fine with exemplary tenderness and care feed, cherish and protect their young, till they are able to live of themselves. Now here, you see, is a multiplicity of actions regularly and with design done ... such as cannot possibly proceed from simple impressions of external objects. (43-44)

ディグビーとほぼ同じことを描写しているにもかかわらず、pleasantly, delightful, chearful, constancy and patience, tenderness and care といった語彙は、鳥が単なる機械ではないことを示唆し、この「規則的な」行為が「外的対象物の単なる刻印」からは生じないものである、つまり純粋な機械論の説明が通用しないことを強調する。チャールトンもまた鳥に理性や判断力を認めない点ではディグビーと同じだが、ディグビーの描写が機械仕掛けの鳥を思わせるのに対して、チャールトンの鳥は、本能的に運動しているだけとはいえ、たしかに生きた動物を思わせる。どちらも微粒子による運動であり、本能によるか機械的な衝突によるかは別にして、いずれにしても鳥の自由意志のようなものは無い。にもかかわらず、その微粒子を「魂」と呼ぶことで、動物は機械ではなく生物として表象されるようになるのである。

とはいえ、その魂はやはり物質的なものであって、人間が持つ非物質的で不死の理性的魂とははっきりと区別される。ウィリスによれば、動物は魂を持っているおかげで、定型的ではない行動もできれば、経験から知識を得、学習のようなこともできる。さらに動物には自己と種の保存のための本能が備わっており、これと経験的知識を組み合わせることで、推論のようなことさえできる。動物の能力に対するこのような評価は、機械論の動物観からは導き出せないものであろう。しかし、どれほど人間の魂に近づこうとも、それは物質的なものであり、可死的なものであり、アリストテレスの言う「動物的魂」であって感覚と運動を司るにすぎない。「理性的魂」と比べればその限界は明らかである。

From what we have said is to be understood, how much it is that Brute Animals are wont to do with the whole furniture of the Corporeal Soul, and to obtain towards the use of Reason: But now we shall endeavour to shew, how far they are below it, and how much less they are able to do than Man, endued with a Rational Soul. (Willis 38)

理性的魂は動物の物質的魂と比べて、その対象とするものにおいて、またその知識の様相において圧倒的に優位である。自らの働きを認識し、自己を意識できるのは理性のみであり、また感覚や想像力を超えた対象を把握できるのも理性のみである。

... the Rational Soul comprehends, as it were by its own proper light, God to be Infinite and Eternal, that he ought to be Worshipped, that Angels or Spirits do inhabit the World, Heaven, and places beneath the Earth.... (39)

したがって、動物の推論能力は、人に比べると、大海に対するバケツの水の一滴程度のものにすぎないのである。

... which truly, if the whole be compared with the functions of the humane Intellect, and its Scientifick Habits, it will hardly seem greater than the drop of a Bucket, to the Sea. (39)

動物の魂は、動物を生き物として機械と明確に区別するものではある。しかし同時に、それは同じ生き物として動物を人間に近づけるといよりは、人間と動物を区別し、人間の地位の独自性を強調するために用いられるのである。

3. 物質としての魂、魂としての物質

機械論的な動物観に非物質的魂を回復しようとする、プラトン主義的な考え方、またそのような非物質的な原理を批判し、物質的な魂を想定するウィリスやチャールトン。両者の立場は大きく異なっているように見えるかもしれないが、物質と非物質の実体（精神）からなる二元論的な思考法に基づいているという点では共通している。またカドワースの動物の魂は、人間の魂と同じく非物質の実体ではあるが死後の永続を保証されていないという点で人間の魂とははっきりと区別され、動物の魂は物質的であると考ええるウィリスやチャールトンも、人間の魂についてはそれが理性的なものであり非物質的なものであることを認め、人間と動物の間に明確な線引きを行っている。

このように、両者ともに二元論の枠組みに立ちながら人間優位の魂論を構築するという点では共通しているのだが、そのような議論の枠組みそのものを破壊し覆す、あるいは無視する議論を提示するのがマーガレット・キャヴェンディッシュ (Margaret Cavendish, 1623-1673) である。物質そのものが生命を持ち、運動し、認識すると考えるキャヴェンディッシュにとっては、動物の魂の存在、あるいはその本質（非物質的か物質的か）はそもそも問題にならない。あらゆる被造物は、理性的物質、感覚的物質、ただの物質の三種類の matter が分かちがたく結びついて成り立っているのだ、動物に魂があり、理性や感覚があるのは自明の前提なのである。

But to return to Motion, my opinion is, That all matter is partly animate, and partly inanimate, and all matter is moving and moved, and that there is no part of Nature that hath not life and knowledg, for there is no Part that has not a comixture of animate and inanimate matter; and though the inanimate matter has no motion, nor life and knowledg of it self, as the animate has, nevertheless being both so closely joyned and commixed as in one body, the inanimate moves as well as the animate, although not in the same manner.... (PL, 98-99)

animate matter とは理性を備えた matter と感覚を備えた matter の二つを指し、inanimate matter とは文字通り生命を持たない matter である。物質に animate と inanimate を想定する点で、キャヴェンディッシュ自身が批判する精神と物質の二元論的構図と同様ではないかと思えるかもしれないが、自然界のあらゆる部分で matter は「混合 (comixture)」してお

り、あくまでも一体として運動しているのであって、例えば運動するもの（魂や spirit）が運動しない（死んだ）物質を機械的に運動させる（衝突によって運動を伝える）のではない。したがって自然界はすべての部分が自ら運動し（生命を備え）、理性が人間に、感覚が動物に限られるわけではない。

Neither can I perceive that man is a Monopoler of all Reason, or Animals of all Sense, but that Sense and Reason are in other Creatures as well as in Man and Animals; for example, Drugs, as Vegetables and Minerals, although they cannot slice, pound or infuse, as man can, yet they can work upon man more subtilly, wisely, and as sensibly either by purging, vomiting, spitting, or any other way, as man by mincing, pounding and infusing them, and Vegetables will as wisely nourish Men, as Men can nourish Vegetables.... (PL, 43)

人間と動物、あるいは他の被造物との違いがあるとすれば、それは混合の仕方や程度の差以外にはありえないものであり、そこに本質的な差や優劣があると考えるのは人間の傲慢さの表れにすぎない。また、人間が他の被造物もそれ独自の方法で感覚し推論することに気づかないのは、人間とは異なるやり方による感覚、推論に人間が気づけないだけであって、例えば動物に推論能力が無いように見えるのは、人間の優位性を証明するものではなく、動物と同じく被造物の一部にすぎない人間の限界の表れなのである。

... according to my Reason I cannot perceive, but that all Creatures may do as much; but by reason they do it not after the same manner or way as Man, Man denies, they can do it at all; which is very hard; for what man knows, whether Fish do not Know more of the nature of Water, and ebbing and flowing, and the saltness of the Sea? or whether Birds do not know more of the nature and degrees of Air, or the cause of Tempests? or whether Worms do not know more of the nature of Earth, and how Plants are produced? or Bees of the several sorts of juices of Flowers, then Men? And whether they do not make there Aphorismes and Theoremes by their manner of Intelligence? (PL, 40)

... none can be said to be *least knowing*, or *most knowing*: for, there is (in my opinion) no such thing as *least* and *most*, in Nature: for, several kinds and sorts of Knowledges, make not Knowledg to be more, or less; but only, they are different Knowledges proper to their kind, (as, Animal-kind, Vegetable-kind, Mineral-kind, Elemental-kind) and are also different Knowledges in several sorts: As for example, Man may have a different Knowledg from Beasts, Birds, Fish, Flies, Worms, or the like; and yet be no wiser than those sorts of Animal-kinds. (GNP, 163-164)

このようにあらゆる被造物、人間から鉱物までが独自の感覚と知識を備えて自発的に運動す

る世界は、例えばデカルト的機械論者から見れば、無秩序で混乱した世界に見えるだろう。しかしキャヴェンディッシュによれば事態は全く逆である。物質である自然は、生きて認識する物質であることによって秩序を生み出すのである。

If Nature were not Self-knowing, Self-living, and also Perceptive, she would run into Confusion: for, there could be neither Order, nor Method, in Ignorant motion; neither would there be distinct kinds or sorts of Creatures, nor such exact and methodical Varieties as there are: for, it is impossible to make orderly and methodical Distinctions, or distinct Orders, by Chances: Wherefore, Nature being so exact... must needs be Self-knowing and Perceptive.... (*GNP*, 7)

この宇宙の秩序が偶然からは生じないと考える点では、キャヴェンディッシュはプラトン主義的二元論者と共通しているとも言えようが、その秩序をもたらすためにキャヴェンディッシュは非物質的、精神的原理を必要としない。動物に限らず、そのあらゆる部分に魂を備えた物質的自然は、文字通り自然に秩序立っていくのである。

結論 動物の魂と機械

自然は生命を持った物質のみからなり、あらゆる現象は非物質的原理なしで説明できるというキャヴェンディッシュの生氣論的唯物論は、動物の魂という問題に対する究極の回答であるとも言える。キャヴェンディッシュが示しているのは、動物の魂の問題は、精神（非物質的実体）と物質の二元論、他の被造物に対する人間の優位性という観念を前提とするものであって、それがなければそもそも問題にならないということなのである。

しかしキャヴェンディッシュが、例えば当時の自然哲学の権威であり主流派であったとも言える王立協会に受け入れられることはなく、人間と動物、魂と機械、非物質と物質といった二項対立的な思考の枠組みは強固に維持されていく。ウィリスが物質的魂との関連で描写する、ある“Fool”のエピソードは、この枠組みの中では、ある種の皮肉な効果をあげている。

An Example of this Kind of Natural assiduity is admirable, which was told me for certain, of a Fool living some years in our Neighborhood; who, tho he were silly and foolish, yet did he know exactly, without any sign, the interspaces of the Hours, and as often as the space of an whole Hour was elapsed, as if he had been a living Clock, he would presently personate the like Number of the Hour, with so many hoarse sounds.... He at the beginning was wont to imitate aloud, by making a noise, every stroke of the sounding Clock; and as often as he heard the sounding of the Bell of the Clock, presently he cry'd, One, Two, Three, & c. ... hence it hapned afterwards, that the Animal Spirits, by daily imitation, being accustomed to be stirred up, to such a Motion, according to the set spaces of Time, at length they were able to distinguish the same Periods of their own accord, nothing directing, as if the sliding spaces of time, had been measured out by the

理性の機能を失っているこの Fool の Animal Spirits は、時計の動きを真似ているうちに、時計の歯車のように運動し続ける (continue their Motion, like the Wheels of a Clock, 96) ようになる。この Fool は時計に譬えられているのではなく、時計と化しているのである。理性的魂を失っただけでは、動物性=物質的魂は残っているのだから、その人間は少なくとも生きた動物であって単なる機械ではないはずだが、その animal spirit が時計の歯車と同じ機能を果たすことによって、この人間は機械となる。理性を失った人間は、動物になるどころではなく機械と同一視されてしまうのである。この例を admirable というウィリスは、人間がいかにか容易に機械に化してしまうかということに抵抗感やためらいを示してはいない。

動物性「魂」が機械化され歯車になるのとは逆に、Meghan O’Gieblyn は、脳をネットワークに接続して意識をクラウド上にアップロードするというテクノロジーの即物的な夢の中に、非物質的で不死の魂という観念が反映されていると見て取っている (O’Gieblyn 55-57)。電脳化、情報化された世界で、コンピューターのメタファーが肉体を超越した魂の観念を呼び戻し、情報は matter から切り離されて、ほとんど immaterial なものとして理解されるようになる (63)。彼女によれば、二十一世紀において魂はもはや単なるメタファーにすぎないものになってしまっているが、それでも私たちが魂に替わる言い回しを見出せず、魂という語が使われ続けていることは、魂という概念を捨て去ってしまうことへの深いためらいを示しているのかもしれない (6)。

たしかに現代では、動物の魂、あるいは魂そのものはもはや自然学の対象ではないであろうし、動物の魂をめぐる初期近代における議論は、歴史的興味のみを引くものとみなされるかもしれない。とはいえ、「動物の魂」という問題は、「機械の知性や意識」という問題に形を変えて問われているとも考えられる。機械に意識が宿るのかという問題は、技術的なものである以前に、精神と物質という二元論的思考の枠組みがいかに根強く私たちの中に残っているのかを明らかにしているのかもしれない。

人間と人間以外の存在にどのように区分線を引くのか、その区分線は一方の優位性を含意するものなのか、人工物=機械と人間以外の動物を区別するものは何なのか、そもそも私たちは、魂抜きに生命を考えることができるのか、十七世紀に問われたこのような問題は、いまでもその意味を失ってはいないのである。

参考文献

- Cavendish, Margaret. *Philosophical letters, or, Modest reflections upon some opinions in natural philosophy maintained by several famous and learned authors of this age, expressed by way of letters*, 1664. EEBO TCP, <https://name.umdl.umich.edu/A53058.0001.001>
- . *Ground of natural philosophy divided into thirteen parts*, 1668. EEBO TCP, <https://name.umdl.umich.edu/A53045.0001.001>
- Charleton, Walter. *Natural history of the passions*, 1674. EEBO TCP, <https://name.umdl.umich.edu/A59161.001.001>
- Cooney, Hadley. “Cavendish vs. Descartes on Mechanism and Animal Souls,” Steven Nadler et al. eds. *The Oxford Handbook of Descartes and Cartesianism*, Oxford University Press, 2019, 643-658.

- Cudworth, Ralph. *The true intellectual system of the universe. The first part wherein all the reason and philosophy of atheism is confuted and its impossibility demonstrated*, 1678. EEBO TCP, <https://name.umd.umich.edu/A35345.0001.001>
- Digby, Kenelm, Sir. *Of bodies and of mans soul to discover the immortality of reasonable souls: with two discourses, Of the powder of sympathy, and, Of the vegetation of plants*, 1669. EEBO TCP, <https://name.umd.umich.edu/A35985.0001.001>
- Kaldas, Samuel. "Descartes versus Cudworth On The Moral Worth of Animals," *Philosophy Now*, Issue 108, 2015. https://philosophynow.org/issues/108/Descartes_versus_Cudworth_On_The_Moral_Worth_of_Animals
- 金森修『動物に魂はあるのか』中公新書, 2012.
- Muratori, Cecilia. "Henry More on Human Passions and Animal Souls," Sabrina Ebbersmeyer, ed. *Emotional Minds: The Passions and the Limits of Pure Inquiry in Early Modern Philosophy*, De Gruyter, 2012, 207-224.
- . "In human shape to become the very beast!': Henry More on animals," *British Journal for the History of Philosophy*, vol.25, 2017, 897-915.
- O'Gieblyn, Meghan. *God, Human, Animal, Machine: Technology, Metaphor, and the Search for Meaning*, Vintage, 2021.
- 岡田典之「初期近代自然哲学における機械、驚異、自然」『龍谷紀要』45 卷 2 号, 2024, 31-46
- Riskin, Jessica. *The Restless Clock: A History of the Centuries-Long Argument over What Makes Living Things Tick*, The University of Chicago Press, 2016.
- Stanciu, Diana. "The sleeping musician: Aristotle's Vegetative Soul and Ralph Cudworth's Plastic Nature," Manfred Horstmanshoff et al. eds. *Blood, Sweat and Tears — The Changing Concepts of Physiology from Antiquity Into Early Modern Europe*, Brill, 2012, 713-748.
- Strickland, Lloyd. "God's creatures? Divine nature and the status of animals in the early modern beast-machine controversy," *International Journal of Philosophy and Theology*, vol.74, 2013, 291-309.
- Wilkins, Emma. "'Exploding' immaterial substances: Margaret Cavendish's vitalist-materialist critique of spirits," *British Journal for the History of Philosophy*, vol.24, 2016, 858-877.
- Willis, Thomas. *Two discourses concerning the soul of brutes which is that of the vital and sensitive of man. The first is physiological, shewing the nature, parts, powers, and affections of the same. The other is pathological, which unfolds the diseases which affect it and its primary seat*, 1683. EEBO TCP, <https://name.umd.umich.edu/A66518.0001.001>

メキシコのアンナ・ゼーガース

國 重 裕

▶ キーワード

アンナ・ゼーガース、
亡命文学、ナチス、メキシコ

はじめに

1900年マインツで生まれたネティ・ライリングは、(アンナ・)ゼーガースというペンネームで執筆活動を開始。1928年には「聖バルバラの漁民一揆」、「グルーベチュ」でクライスト賞を受賞する(この年、共産党に入党)。彼女の小説は、ドス・パソスといったアメリカの作家の影響を受け、カットバックやモンタージュを多用し、また体験話法や内的独白を駆使する実験的な作風で知られ、とりわけ長篇小説において、時代を映す表現主義的な群像劇を得意とした。以降1983年に亡くなるまで創作をつづけた。ゼーガースはドイツ語で書く女性作家として、はじめて世界的に認められた存在であったが、その後半生をドイツ民主共和国で送ったために「共産主義作家」という先入見から忌避されもした。

1933年ナチスが政権を獲得するや、ゼーガースは身の危険を感じ⁽¹⁾、フランスへ、そして第二次世界大戦勃発後はメキシコへと亡命を果たす⁽²⁾。

1. メキシコのアンナ・ゼーガース

ゼーガースはメキシコで、ドイツの文化活動を行うハインリヒ・ハイネ倶楽部⁽³⁾、ドイツ語書籍を刊行するEl Libro Libre、新聞Freies Deutschlandの立ち上げにかかわった。危険な祖国を逃れたことへの良心の呵責をおぼえながらも⁽⁴⁾、ヨーロッパでファシズムと闘っている人を描くのが自分の役割だと自認し、ヒトラーのドイツによって歪められたドイツ文化を守るべく精力的に活動する。

彼女はもっぱらヨーロッパ情勢、とりわけ独ソ戦の行方に目を凝らしており、亡命中メキシコを舞台にした作品は書かれなかった⁽⁵⁾。作家ゼーガースにとって亡命は「母語との距離を有効に利用し、母語を相対化することによって新たな言語世界を切り拓く」機会にはならなかった⁽⁶⁾。彼女がメキシコで完成した長篇『トランジット』、中篇「死んだ少女たちの遠足」にわ

ずかにメキシコが登場するが、その描写はきわめて表面的であり、かつネガティブである。ゼーガースにおいて例外的に、ライン川河畔で成長したみずからの生い立ちを題材とした後者では、メキシコは灰色の印象で彩られている。この暗い描写の背景には、1943年6月24日夜更け、交通事故に遭い、四日間意識を失うという病からの回復期に執筆されたことが影響しているのであろう⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

メキシコでのゼーガースの生活は、最初の数ヶ月をのぞいて経済的には安定していた。それは、1942年『第七の十字架』（1938年～40年執筆）がアメリカで刊行されたからである⁽⁹⁾。イタリアの民衆の内的・外的全体を描いたマンゾーニの『いいなずけ』の影響を受けて構想、執筆されたこの長篇は⁽¹⁰⁾、ナチスの横暴さと、ファシズムと闘う不屈の精神を描いた傑作として象徴的存在となっていた。

文化活動に打ち込み、政治的な抗争からは距離を置きたいと願っていたゼーガースであるが、戦後ドイツの在り方をめぐる路線闘争に否応なく巻き込まれていった。ソ連に亡命したモスクワ・グループとの、将来のドイツにおける主導権争い。メキシコ組の中でも不協和音が絶えなかった。

そのあらわれの一つが、マルセイユで書きはじめられメキシコで完成した『トランジット』のEl Libro Libreでの出版拒否である。マルセイユの滞在ビザ、フランスからの出国許可、亡命先の入国ビザを求めて右往左往する登場人物たちの心境を、みずからの体験を生かしてリアルに描いたこの小説は、1942年10月、希望のない終わり方でいいのかという自問の末、結末2ページが書き直され⁽¹¹⁾、43年2月4日ハインリヒ・ハイネ倶楽部で朗読された。しかし「ほかの作家に出版のチャンスを譲るため」という理由で、出版は見送られた。本当の理由は、主人公が場当たり的な性格の持ち主に造形されていたためだった。彼は確固たる意志を持った闘士からはほど遠く、ほかの登場人物たちもファシズムと闘うより、目先の打算で行動する。戦争が長引き、ドイツの早期解放という希望が萎み、絶望が膨らんでいた時期、『トランジット』はふさわしくない書だった⁽¹²⁾⁽¹³⁾。

ゼーガースがメキシコで着手した長篇は『死者はいつまでも若い』である。1918年のスバルタクス団の蜂起（の挫折）から、ヴァイマル共和国期を経て、なにゆえドイツはヒトラーという破局へと突き進んだのかを問う全体小説である。

こうした中、1945年5月8日ドイツは無条件降伏する。

2. ドイツのアンナ・ゼーガース

ゼーガースは1947年1月5日メキシコを発ち、4月22日ベルリンへ帰還を果たす⁽¹⁴⁾。彼女を迎えたのは変わり果てたベルリンだった。廃墟となり、寒さと飢えに苦しむ都市。しかし彼女を苦しめたのは精神的孤独だった。多くの友人は大戦中命を落とすか、まだ亡命先にとどまっていた。ベルリンでの彼女は森で迷子になった子どものようだったという⁽¹⁵⁾。彼女は東地区（ソ連占領地区）だけでなく西地区（米英仏占領地区）でも読まれたいと願い、ベルリンの西地区（ヴァンゼー近く）に居を定めていた。それは、ソルボンヌに進学した二人の子どもに会いに行くためでもあり⁽¹⁶⁾、メキシコの国籍を維持するためでもあった⁽¹⁷⁾。

5月10日、「焚書の日」の記念集会上に登壇したゼーガースは、これまで感じたことのなかっ

た苦痛に直面する⁽¹⁸⁾。それは、誰が直接的・間接的ナチス支持者だったか、反ユダヤ主義者だったかわからない一般聴衆の前で話すことの困難であった。そして占領下のドイツにあって、将来が流動的で不透明な中、ヒトラー後のドイツはどうあるべきか、思惑がバラバラな聴衆を前に話す困難でもあった。このような苦痛はメキシコでは感じないものだった。政治状況ははるかに複雑化していた⁽¹⁹⁾。

帰国から一年以上経った 1948 年 6 月 28 日、友人のルカーチ・ジェルジに宛てた手紙で次のように心情を吐露している。「わたしは自分が氷河期に來たように感じられます。そんなにも何もかもが冷たいのです。わたしがもう熱帯にいないからではありません。多くのことがあまりにも息が詰まりそうで、わたしには恐ろしいまでに凍てつくようだからです。仕事であれ、友人関係であれ、政治的、人間的なことであれ、すべてにおいてです。」⁽²⁰⁾

亡命時代に書きはじめられドイツで完成した『死者はいつまでも若い』の評判も芳しくなかった。「敵の像が曖昧」、「党の指導的役割が描かれていない」というのがその表向きの理由だった。しかし、背景にはモスクワではなくメキシコに亡命していたゼーガースに対するドイツ社会主義統一党の書記長ウルブリヒトの根強い不信感があったとされる⁽²¹⁾。過去を振り返るより、未来の明るい展望を描くことが期待されていた。

帰国以来、ゼーガースは権力闘争に晒されていた。メキシコで亡命生活を共にしていたメンバーのうち、ゲオルク・シュティビは党を除名、モスクワ派とメキシコ組を統合しようとしたオットー・カッツも失脚。パウル・メルカーはシオニストの烙印を押され、除名。チェコスロヴァキアでのスランスキー裁判、ハンガリーのライク裁判からも無縁でいらなかった。メキシコ時代からの友人レオ・カッツ（Andre Simone の筆名で活躍）は死刑判決を受ける。レンカ・ライネロヴァーも禁固刑に処された⁽²²⁾。何よりも大きかったのは 1956 年のハンガリー蜂起で、文化大臣を務めていたルカーチを救出しようと、アウフバウ出版社の社長で、メキシコ時代から苦楽を共にしたヴァルター・ヤンカを派遣しようと計画したものの、ウルブリヒトの横槍で頓挫、ヤンカは国家転覆罪の嫌疑で裁判に処せられ、五年の独房生活を余儀なくされた。ゼーガースはこの見せしめ裁判で、傍聴席の最前列で傍聴することを強いられた⁽²³⁾。ブレヒトは病死し、カントロヴィチュはドイツ民主共和国に幻滅し、再度西側へ亡命した。

3. メキシコへの再「亡命」？

「メキシコであろうと故郷であろうと、作家は木のようにその土壌から栄養を摂る」⁽²⁴⁾、「作家は、その言葉が話されている地を離れてはいられない」⁽²⁵⁾と語っていたゼーガース、ドイツ語を取り戻すことを願っていたゼーガースだが、このような残酷な政治状況を眼の前にして、現実を芸術へと昇華できないでいた。帰国の時期に書かれた作品は、神話やメルヘンの形を借りたものか、メキシコやカリブ海を舞台にしたものがほとんどで、ドイツを描いたものはわずかである。

「描かれた時代－メキシコのフレスコ画」（1947）と題された評論は、メキシコへの郷愁とドイツの厳しい現実への戸惑いがよく反映されている。「ヒトラーがメキシコで、よりよい未来へのあらゆる示唆、文化遺産を抹殺しようと試みるとしたら、ここベルリンのように本を燃やすのではなく、すべての絵を引き剥がさせるだろう。というのもメキシコの画家たちは、この

二十年、省庁、学校、市庁舎の壁に描いてきたからだ。ベルリンではアジ・ビラや本が回覧されるが、メキシコでは壁画が見学される。』⁽²⁶⁾

ゼーガースがディエゴ・リヴェラと直接出会ったのは1946年になってからのことである。出会いが遅れたのは、リヴェラがトロツキストだと見做されていたため、ドイツ人たちが彼との接触を回避していたからだとされる⁽²⁷⁾。しかし、ゼーガースはメキシコ市だけでなく、交通事故のあと療養していたクエルナバカで彼の壁画に接し、感銘を受けていたと思われる⁽²⁸⁾。彼女はリヴェラが壁画を描く姿を見学するのを好んだという。また彼女はリヴェラの家で、コルテスによる征服以前のメキシコ文化に触れることができた⁽²⁹⁾。

ゼーガースは壁画を火山の噴火になぞらえる⁽³⁰⁾。火山の爆発さながら、生成のさなかにある民衆のもっとも重要な姿が表現される。「このような最良の表現の前では、これが党派的芸術か純粋芸術かなどという空虚な問いかけは沈黙せざるをえない」、「ここでは時代 Zeit がじつに純粋なので、芸術は永遠 zeitlos になる。』⁽³¹⁾誰のために書くのか、何のために書くのかという問いに、つねに民衆との結びつきを強調していたゼーガースは、壁画にその理想を看取ったことは容易に想像できる。

「このメキシコの画家（リヴェラ）は、その民衆の歴史の中で触れることのなかったテーマを、どのようにして見出したのであろうか？ リヴェラが恋人なり数本の樹木を描いたとき、それでさえ強弱や、意図してか、せざるにかかわらず、運動家になる。というのも観る者にこの国やその民衆を意識させ、それによってそっけなく無知な見物人を歴史の中に引き込むのである」と1949年に書かれた「ディエゴ・リヴェラ」で述べている⁽³²⁾。彼女が感銘を受けたのは、その国の歴史を映す壁画、表現するための芸術ではなく、描きながら変革する、大衆のための教育的な力を持つ壁画運動だった⁽³³⁾。

そんな彼女がメキシコ時代に影響を受けたもう一つの芸術が映画だった⁽³⁴⁾。ゼーガースは、壁画の表現力と映画（俳優）の表現力を同一視していた。映画の中の俳優の演技と、壁画が訴えかける表現力はメキシコの文盲の民衆に大きな影響力を与えると考えたのだ。民衆のための芸術、民衆に深く根ざした芸術こそ、彼女が考える芸術家の使命だった。

この時期の注目すべき作品が「クリサンタ」である。この短篇は1950年、ゼーガースが苦境にあった時期に書かれ、翌51年に出版された。クリサンタは孤児で、親が誰かもわからない。養い親のゴンザレス一家のもとで成長するが、成長したクリサンタはメキシコ市のトルテイージャの店で働きはじめる。その時知り合った青年と恋に落ち、いっしょに映画を観に行ったり、夜間学校に通ったりするが、クリサンタはいっこうに字を書けるようになれない。ある日青年はより良い生活を求めて、クリサンタに内緒でアメリカに移住する。クリサンタは自暴自棄になり、娼婦となる。メキシコ市の街角で偶然彼女をみかけたゴンザレスが、彼女をふたたび家に連れ戻す。クリサンタは親が誰かわからない子どもを産み、果物屋で働き始める。以上が「クリサンタ」の粗筋である⁽³⁵⁾。

この小説に現れる類型的なメキシコ描写を批判することはやさしい。当初メキシコについて石油、サボテン、ソンプレロというイメージしか持っていなかったというゼーガース⁽³⁶⁾。この短篇にも西欧中心主義的でステレオタイプなメキシコ像が端々から感じられる。パターンリステックな展開も否定できない。

一方で、メキシコを、スターリン型社会主義、現実のドイツ民主共和国のオルタナティヴと

して描こうとする志向性も感じられる。また、破壊されたドイツと混迷するメキシコが重ね合わせられているようにも読める。安全な場所、避難所を求めるクリサンタの心境は、戦後ドイツの状況、とくにユダヤ人の運命を反映しているという評者もある⁽³⁷⁾。ドイツに帰国しても、どこかに属しているという安心感を得られなかったゼーガースが、メキシコへの郷愁から書いた作品であることは間違いないだろう。

「クリサンタ」の中で彼女が恋人と観る映画が、1945年公開の「捨てられた女 La Abandonadas」であることが今日明らかにされている⁽³⁸⁾。この映画の主演俳優 Dolores del Rio について1947年に書かれたエッセイが2002年発見されたのだ。映画「捨てられた女」では、男の子を産んだ捨てられた女が、子どもが学校で読み書きを習い、学者か政治家になることを夢みる。クリサンタも自分が産んだ子の将来に希望を託しているように思われる（もっとも、「クリサンタ」では子どもが男の子か女の子かはっきりしないのだが）。

「クリサンタ」はのちに、無名で単純（素朴）な人々の暮らしを描く短篇八篇を集めた『弱き者が持つ力』の巻頭に置かれる。「まったく声を上げず重要なことを成し遂げている。わたしはその人たちについて書かなければ、人びとはまったく知らないままに終わっただろう。」⁽³⁹⁾とゼーガースは語る。

彼女によると作家の役割は「見せかけのヴェールを払い、起きたこと、起きていることをはっきりと示すこと」、「歪められていない真の現実を描くこと」である⁽⁴⁰⁾。「クリサンタ」はゼーガースの信じた文学観を忠実に反映した作品だといえるだろう。

1961年8月ベルリンの壁が建設された際には、抗議の声を上げないことに対して、若手作家グラスから公開書簡を受けたゼーガース。ドイツ民主共和国から脱出していたヨコストラは、西ドイツのルフターハント社がゼーガースの著作を刊行する破廉恥さへ抗議する書簡を公開する。しかしゼーガースは沈黙を守った。1976年ビーアマンが市民権を剥奪された際にも、反対署名をすることを拒んだゼーガース⁽⁴¹⁾。

短篇集『弱き者の持つ力』の巻末に置かれた短篇「消えた民族の帰還」では、カルデナスをスターリンに対置し、現実に存在する社会主義への失望、ユートピアの喪失の嘆きを投影しているとされる⁽⁴²⁾。

メキシコを題材にした最後の小説「ほんとうの青」では⁽⁴³⁾、現実でのユートピア喪失を、文学作品の中で理想を描こうとしているともされる。大戦の勃発により、ドイツから焼き物に使う青い顔料が手に入らなくなったため、代わりとなる顔料を求めてメキシコを旅する壺焼き職人ゲレロの姿は、芸術家としてみずから進むべき道を探求する主人公を描いたノヴァーリス『青い花』に重なる。そして舞台をメキシコにしてメルヘンの形式を借りることでドイツ民主共和国への失望をカモフラージュしているとも⁽⁴⁴⁾。

ゼーガースの本当の亡命は、じつは1947年に始まったのではないか。そして「亡命文学」と呼べるものはナチスから亡命していた地メキシコを題材にした作品にこそ当てはまるのではないだろうか。

註

(1) 一時逮捕されるが、彼女がハンガリー国籍を持っていたため保釈された。翌日、亡命の途次につく。

(2) 1941年3月24日ボール・ルメール号でマルセイユを発ったゼーガース一家は、オラン、ジブラルタル

を経てマルチニクに至る。ここで船を乗り換えてドミニカ、そしてアメリカ合州国に到着する。6月16日のことである（エリス島収監中に独ソ不可侵条約の報に接する）。しかし、娘ルートの健康状態を理由に入国を拒否された一家は、さらにハバナ経由で6月30日メキシコの港町ヴェラクルスに上陸、列車でメキシコ市に落ち着く。当時のメキシコは、1910年にはじまったメキシコ革命の真っ最中で、とりわけ1930年代後半に政権を担っていたカルデナスが、石油産業の国有化、教育の普及など左派的な取り組みを行い、スペイン内戦後にフランコに追われた共和派のメンバーをはじめ、アメリカに入国を拒否された多くの社会主義者の亡命者を受け入れていた。Vgl. Wedermann, 2020, S.8-10.

なおルメール号にはブルトンやレヴィ=ストロースも乗船していたが、男性と女性では甲板の階が分けられており、またフランス人とドイツ人との交友はなかったといわれている。

- (3) 彼女はその代表に推挙された。倶楽部ではレッシングやビューヒナーはじめ演劇や朗読会が催された。
- (4) 最高発行部数4000部。ちなみにメキシコに亡命していたドイツ、オーストリア人は約3000人と目される。
- (5) ちなみに、メキシコを訪れたヨーロッパの作家の作品として、以下のものが挙げられる。

マルカム・ラウリー『活火山の下で』、D・H・ロレンス『メキシコの朝』、『翼の生えた蛇』、アンドレ・ブルトンの美術評論、アルトナン・アルトー『タラウマラ』、エゴン・エルヴィン・キシュ『メキシコで発見したもの』。

ラウリーの作品はメキシコを舞台にした小説としては群を抜く傑作であるが（自墮落にアルコールに溺れるイギリス人とその友人の、クエルナバカで繰り広げられる一日を描く）、メキシコ人の姿は後半の闘牛場のシーンでの群衆のほか、最終章で主人公を射殺する自警団の描かれ方にみられるとおり、あくまで粗暴で典型的である。ロレンスの『メキシコの朝』は、白人の視点から理解不可能なものとしてインディオを描いているが、白人（話者）の世界観を、インディオのそれと相対化しながら批判するなど、視点の揺らぎが認められる。アンドレ・ブルトンは「メキシコの思い出」「独立革命芸術のために」（『ブルトン集成7』、47ページ、53ページ）でメキシコ芸術を高く評価している。それに対してフリーダ・カーロは「この連中がどんな種類の畜生どもか、想像もできないでしょう。吐き気がします。奴らのあまりにもいまましい「インテリ」ぶり、どうしようもないくだらなさには、これ以上我慢なりません。」と鋭く彼を批判した（エレラ、1988年、241ページ）。ブルトンにしろトロツキにしろ、そしてアルトー『タラウマラ』も、ヨーロッパにないユートピア、パラダイスをメキシコに投影しただけで、彼らが著したものを讀むと、ヨーロッパ文明批判の梃子としてメキシコ文化は用いられ、いわゆる「高貴な野蛮人」としてメキシコ人は描かれる。

すぐれたジャーナリストとして世界を駆けめぐってきたキシュの『メキシコで発見したもの』は、ステレオタイプでもなく美化するでもないメキシコを、ヨーロッパ人に紹介するガイドになっている。なお、スペイン内戦のあとの数千人にのぼるとされる亡命者の作品については未見である。

- (6) 沼野充義『徹夜の塊 亡命文学論』（作品社、2002年）29ページ。ちなみに、ゼーガースはメキシコ市で子ども二人をフランス語学校にやることを選んでおり、スペイン語社会に対する関心は薄かったと思われる。とはいえ、1946年12月6日、Lene Lore Wolf宛の手紙で「メキシコが好きだ」と語っており、その思いはドイツ帰国後も終生変わらなかった。
- (7) この事故の直前、写真家ティーナ・モドッティもタクシーの中で不審死を迎えており、当時は事件性（ファシストのスパイによる凶行）が疑われた。Wedermann, 2020, S.22.
- (8) この機会にゼーガースは看護師のインディオを知る。ゼーガース家の家政婦もクリサンタという女性であった。目を覚ましたゼーガースは、息子ピエールにスペイン語で「腕が痛い！ Me duele el brazo！」と呟いたという。Ibid., S. 22., Radvanyi, p.107.
- (9) 1942年、ボストンのリトル・ブラウン&カンパニーから刊行されるや、4ヶ月で34万部を売り上げる。つづいてコミック版も発売され、1944年には前線に向かう兵士用に省略版が発行された。1943年6月ハリウッドで、オーストリア人フレッド・ジンネマン監督、スペンサー・トレイシー主演で映画化され、この契約によりゼーガースは75000ドルを手にする。同書は、イギリス、カナダでも刊行。スペイン語版（メキシコ）、スウェーデン語版、ポルトガル語版（ブラジル）が続く。

ドイツ語版については、ソ連の Internationale Literatur に掲載されるも、独ソ不可侵条約のため最初の数章で打ち切り。1941 年、「十月」誌に部分掲載。完全版は、El libro libre から 2000 部。ドイツ本国で読まれるのは、1946 年の Aufbau 社（東占領地区）、Weller 社（西占領地区）を待たねばならなかった。

アメリカで大好評を得た『第七の十字架』であるが、FBI はゼーガースについて 1000 ページに及ぶ調査書を残していた。あくまで彼女はアメリカにとって要注目人物だった。Weidermann, 2020, S.94.

- (10) Seghers, 1970, S.193.
- (11) 初稿では主人公はフランスを出発するが、決定稿ではフランスにとどまる決意をする。ただし初稿が失われているため、詳細は不明である。
- (12) 結局『トランジット』は、1947 年ベルリン新聞に掲載されたあと、48 年単行本化される。
- (13) 『第七の十字架』で経済的成功をおさめた彼女への嫉妬もあったという。Vgl. Zehl Romero, 2020, S.391.
- (14) まず列車でアメリカを横断、ニューヨークからスウェーデンの汽船でエーテボリへ。ストックホルムでドイツ滞りビザが下りるのを待ち、3 月パリへ向かう。パリでプレヒト夫妻と会い、将来のドイツの動向について意見交換する。プレヒトの証言によれば、ゼーガースは怯えていたという。(Weidermann, 2020, S.159) 彼女はパリから軍用列車でベルリンに帰った。プレヒト夫妻も、敗戦後のドイツに不信感を抱いており、まずはスイスに腰を落ち着ける。しかし共産主義者であるプレヒトに収入の道が乏しく、ようやく 1948 年 10 月になって、ドイツに帰ることにする。その際、西側占領区を通過できず、妻である俳優ヘレーネ・ヴァイゲルの故郷ヴィーンを経て（オーストリア国籍を取得）、プラハ経由でベルリンに向かった。共産党員でもなく、平和主義者だったプレヒトはソ連占領区で必ずしも歓迎されなかった。ハインリヒ・マンは経済的困窮の中、ドイツ民主共和国への帰還を果たすことなく 1950 年カリフォルニアで病死する。
- (15) Melchert, 2011, S.8-11. 帰国直後のゼーガースについては、本書がくわしい。
- (16) メキシコ市でバカロレアに合格したルートは医学、ピエールは物理学をソルボンヌで学ぶ。Vgl. Melchert, 2011, S.49.
- (17) しかし、西地区に位置する故郷マインツに帰ることは叶わなかった。共産主義者の作家ゼーガースの帰郷が実現するのは 1954 年秋になってからのことである。同じ理由で、フランスは 1950 年から彼女の入国を一時拒否する。
- (18) Melchert, 2011, S.23f.
- (19) ただしこの時期がまったく不毛だったわけではない。1947 年 8 月、ヴロツワフで開催された「世界平和会議」でエメ・セゼールと知り合った。シュルシュールの本を読んでいたゼーガースは、11 月セゼールとパリで再会し、トゥサン・ルヴェルチュールに関する本を彼の蔵書から借り、また国立図書館でトゥサンについて調べている。これが「ハイチの結婚」にはじまる「カリブ物語」群に結実する。Vgl. Melchert, 2011, S.74-76.
- (20) Melchert, 2011, S.57.
- (21) ウルブリヒトは彼女に東ベルリンへの移住と、メキシコ国籍の放棄を強く迫り、彼女は受け入れざるをえなかった。Melchert, 2011, S.89.
- (22) Díaz Pérez, 2016, S.213-219.
- (23) Melchert, 2011, S.118.
- (24) Zehl Romero, 2000, S.385.
- (25) Radvanyi, 2014, p.117.
- (26) Seghers, 1971, S.69. 1949 年に書かれた「ディエゴ・リヴェラ」では次のようにパラフレーズされる。「もしファシズム政権がよりよい、より幸福な未来への人々のあらゆる努力を、そして前に進もうとした記憶を、メキシコで破壊しようと思うなら、ヒトラーがドイツでしたように本を燃やすことはおこなわないだろう。ヒトラーはそのかわり公共の建物の壁に描かれたフレスコ画を引き剥がさせるだろう。というのは、メキシコの画家たちは、自分たちの感性の中で、そして思考の中で、役割を演じている民衆の革命の歴史のすべてをフレスコ画に描いたからである」Seghers, 1971, S.85.

- (27) しかし、戦後のリヴェラとフリーダ・カーロがスターリンに傾倒していたことは、すでに病状が進行していたカーロの自室の未完のキャンバスに、スターリンの肖像画が残されていたことから窺える。
- (28) クエルナバカ滞在は、メキシコ市での権力闘争から距離を置くためだともいわれる。
- (29) von Bernstorff, 206, S.45. ゼーガースは、ホテルの仮住まいの部屋に友人の壁画画家クサヴィエ・ゲレロの妻で親友のクラリータ・ボルセトの写真とともに、リヴェラの壁画の写真飾っていた。彼女はメキシコへの郷愁をボルセトに宛てた手紙で語る。また実現の可能性がどれほどだったかはわからないが、廃墟のベルリンにゲレロを招いて壁画に描いてもらおうと計画していた。Vgl. Melchert, 2011, S.27.
- (30) Seghers, 1971, S.70.
- (31) Ibid., S.72.
- (32) Ibid., S.87.
- (33) アンドレ・ブルトンはフリーダ・カーロを絶讃する評論を書いている一方、リヴェラについての言及は管見のかぎりない。一方、ゼーガースにフリーダ・カーロへの言及はない。情熱的に自己言及するカーロに対し、主情を隠すゼーガースの性格の違いによるものであろうか。Vgl. Weidermann, 2020, S.119. ゼーガースが言及するのは男性の画家ばかりである。マリヤ・イスキエルドと交友関係があったことは、パヴロ・ネルゲについてのエッセイからもわかるのだが。Vgl. Seghers, 1971, 97f.
- (34) Díaz Pérez, 2016, S.234-244.
- (35) 先にも述べたように、クリサンタはメキシコ時代のゼーガース家の最初の家政婦の名前である。von Bernstorff, 2006, S.74, Zehl Romero, 2000, S.127.
- (36) Weidermann, 2020, S.6.
- (37) ゼーガースの作品においてユダヤ性前面に出る作品はほとんどない。これは冷戦体制下の共産圏での反ユダヤ主義が原因と考えられる。
- (38) von Bernstorff, 2006, S.96, Díaz Pérez, 2016, S.224-251.
- (39) Seghers, 1971, S.44
- (40) Seghers, 1970, S.191.
- (41) この時、ゼーガースは病院で譫言のように、「ピーアマン、ピーアマン」と繰り返していたことを息子ピエールが証言している。Radvany, 2014, p.145.
- (42) Díaz Pérez, 2016, S.224.
- (43) 1970 年、アウフバウ社から版画挿絵入り「死んだ少女たちの遠足」、「クリサンタ」、「消えた民族の帰還」、「ほんとうの青」の4篇を収めた『メキシコからの物語』が刊行される。
- (44) Díaz Pérez, 2016, S.252-260.

使用文献

Seghers, Anna: Das wirkliche Blau. Eine Geschichte aus Mexiko. Aufbau Verlag, Berlin, 1979.

Dies.: Geschichten aus Mexiko. Aufbau Verlag, Berlin, 1970.

Der Ausflug der toten Mädchen (1944)

Crisanta (1951)

Das wirkliche Blau (1967)

Die Heimkehr des verlorenen Volkes (1965)

Dies.: Transit. Luchterhand, Darmstadt, 1963, 1977.

Dies.: Toten bleiben jung. Luchterhand, Darmstadt, 1963, 1977.

Dies.: Über Kunstwerk und Wirklichkeit. I. Tendenz in der reinen Kunst. Akademie Verlag, Berlin, 1970.

Dies.: Über Kunstwerk und Wirklichkeit. II. Erlebnis und Gestaltung. Akademie Verlag, Berlin, 1971.

Breton, André: Oeuvres complets. II. Gallimard, Paris, 1992.

Kisch, Egon Erwin: Entdeckungen in Mexiko. Null Papier Verlag, Berlin, 2019.

Radvanyi, Pierre: Au-delà du fleuve, avec Anna Seghers. Le Temps des Cerises, Paris, 2014.

参考文献

【外国語文献】

- Díaz Pérez, Olivia C.: Mexiko als antitotalitärer Mythos. Das Werk von Anna Seghers zwischen Nationalsozialismus, mexikanischem Exil und Wirklichkeit der DDR. Stauffenburg Verlag, Tübingen, 2016.
- Hilmes, Carola/ Nagelschmidt, Ilse (Hrsg.): Anna Seghers Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Metzler Verlag, 2020.
- Karlos, Baghira: Wechselnde Relevanzen. Zur Rezeption der Exilromane von Anna Seghers. Grin Verlag, Norderstedt, 2006.
- Melchert, Monika: Heimkehr in ein kaltes Land. Anna Seghers in Berlin. 1947 bis 1952. Verlag für Berlin-Brandenburg, Berlin, 2011.
- Dies.: Im Schutz von Adler und Schlange. Anna Seghers im mexikanischen Exil. Quintus Verlag, Berlin, 2020.
- Scharade, Andreas: Anna Seghers. Metzler Verlag, Stuttgart, 1993.
- von Bernstoff, Wiebke: Fluchtorte. Die mexikanischen und karibischen Erzählungen von Anna Seghers. Wallstein Verlag, Göttingen, 2006.
- von Sternburg, Wilhelm: Anna Seghers. Ein Porträt. Aufbau Verlag, Berlin, 2012.
- Weidemann, Volker: Brennendes Licht. Anna Seghers in Mexiko. Aufbau Verlag, Berlin, 2020.
- Zehl Romero, Christiane: Anna Seghers. Eine Biographie. 1900-1947. Aufbau Verlag, Berlin, 2000.
- Dies.: Anna Seghers. Eine Biographie. 1947-1983. Aufbau Verlag, Berlin, 2003.

【日本語文献】

- アンナ・ゼーガース『第七の十字架』（山下肇、新村浩訳、岩波文庫、2018年）
- アンナ・ゼーガース『トランジット』（藤本淳雄訳、中央公論社、1971年）
- アンナ・ゼーガース『死んだ少女たちの遠足』（長橋美美子訳、講談社、1976年）
- アンナ・ゼーガース『死者はいつまでも若い』（上・下）（北通文、道家忠道、山下肇、新村浩訳、白水社、1953年）
- 「ゼーガース ルカーチ往復書簡」（佐々木基一・好村富士彦訳、『ルカーチ著作集 8－リアリズム論』所収、白水社、1987年）
- アンナ・ゼーガース『トルストイとドストエフスキー』（伊東勉訳、未来社、1966年）
- 道家忠道、上野修、長橋美美子ほか『アンナ・ゼーガースの文学世界』（三修社、1982年）
- 河野富士夫、河野正子『アンナ・ゼーガースの文学：時代と文学』（東洋出版、1997年）
- 神田和恵「アンナ・ゼーガースとメキシコ」（内田イレーネほか『異文化理解の諸相－ちがいを知ること 同じであること』所収、近代文芸社、2007年）
- ヴァルター・ヤンカ『沈黙は嘘－暴露された東独スターリン主義』（林功三訳、平凡社、1990年）
- 林功三「アンナ・ゼーガースはなぜ沈黙していたのか－ヴァルター・ヤンカ『沈黙は嘘』をめぐって」（『思想』No.802、1991年4月、岩波書店、pp.127～143）
- 山口知三『ドイツを追われた人びと－反ナチス亡命者の系譜』（人文書院、1991年）
- 山口知三『廃墟をさまよう人びと－戦後ドイツの知的原風景』（人文書院、1996年）
- 沼野充義『徹夜の塊 亡命文学論』（作品社、2002年）
- マルカム・ラウリー『火山の下』（斎藤兆史監修、白水社、2010年）
- D. H. ロレンス『メキシコの朝』（伊藤整訳、講談社、1975年）
- D. H. ロレンス研究会編『ロレンス研究－『旅と異郷』－』（朝日出版社、2010年）
- アルトナン・アルトー『タラウマラ』（宇野邦一訳、河出文庫、2017年）
- アンドレ・ブルトン『アンドレ・ブルトン集成 7』（粟津則雄訳、人文書院、1971年）
- エゴン・エルヴィン・キシュ『メキシコ発見』（永戸多喜雄訳、講談社、1958年）、（ことたび抄訳、『翻訳文学紀行 III』、2021年）

増田義郎『メキシコ革命 近代化のたたかい』（中公新書、1968 年）
国本伊代『メキシコ革命』（山川出版社、2008 年）
加藤薫『メキシコ壁画運動ーリベラ、オロスコ、シケイロス』（平凡社、1988 年）
ヘイデン・エレラ『フリーダ・カーロ 生涯と芸術』（野田隆、有馬郁子訳、晶文社、1988 年）
堀尾真紀子『フリーダ・カーロ 引き裂かれた自画像』（中央公論社、1991 年）
中原佑介『一九三〇年代のメキシコ』（メタログ、1994 年）
北海道立旭川美術館編「メキシコの美術：1920-1950 展カタログ」（1998 年）

言語表現から見る気候変動と ドイツのエネルギー政策

佐 藤 和 弘

▶ キーワード

新造語、エネルギー政策、
気候危機、原子力回帰

▼ 要 旨

21 世紀も四半世紀を迎え、ますます地球温暖化 (Erderwärmung) や気候変動 (Klimawandel) に対処したエネルギー政策が喫緊の課題となっている。気候変動をめぐる原子力が脱炭素化の救世主となりうるのか、気候問題を表す複合語が的確にその問題性を表現しているのか、このような疑問を紐解くべく、本論ではまずドイツのエネルギー政策に注目し、原子力開発期から脱原子力期、また原子力ルネサンスと表現される現在において、ドイツ語圏メディアが用いる言語表現を通時的に取り扱った。第 1 章では構成素 „Atom-“ を規定語とする複合語に焦点を当て、Weinrich や Harlass, G./Vater, H. の造語論に基づき、Kernenergiegesetz、Atomgesetz などの新造語と Atomkanone、Atommonopol などの廃語となったかつての新造語に注目した。原子力関連用語の複合語は基本として「名詞＋名詞」で構成された複合語が主であるが、「名詞＋ハイフン＋名詞」の複合語も多数見られる。原子力開発創成期にはドイツ語圏メディアにおいては、ハイフンを使用することで „Atom-“ を構成素とする新造語を生み出す段階であった。第 2 章においては気候変動、原油価格の高騰が世界を原子力回帰へ向かわせ、また、原子力発電所の新設が多くの国々で計画されている社会状況においては、原子力反対論者と原子力肯定論者などが用いる言語表現にはレトリックやフレーミング技法による情報操作が行われており、言語が「汚染」されてしまっている状況を指摘した。我々は常に言葉に対する感性を繊細に研ぎ澄ませておかなければならない。

はじめに

ドイツ西部ノルトライン＝ヴェストファーレン州にある小集落リュッツェラート (Lützerath) が 2022 年末からドイツメディアで盛んに報道されていた。この地域は褐炭露天掘り地

帯であり、電力会社である RWE AG⁽¹⁾（以下 RWE とする）の所有となっている。2020 年より褐炭採掘のためにリュッツェラートに住んでいた 20 家族が立ち去ると、気候危機をもたらす化石燃料の褐炭採掘に反対する多くの活動家（Aktivist⁽²⁾）がこの地を占拠し、立ち退きを迫る当局との攻防が日々激しさを増していた⁽³⁾。2023 年 1 月 15 日にはスウェーデンの気候活動家であるグレタ・トゥンベリ（Greta Thunberg）が参加し土塁に座り込んでいたが、警察に抱えられてその場を強制退去させられる場面が大きく映し出された⁽⁴⁾。

ドイツ語圏のメディア報道では Klimaaktivist（気候活動家）、Klimakrise（気候危機）など „Klima-“（気候）を構成素とする複合語が 2000 年以降頻繁に現れるようになっていく。これら 2 つの „Klima-“ を構成素とする複合語はいずれも新造語であり、表 1、表 2 の使用頻度推移曲線に見られるように 2018 年あたりから急速に右肩上がりで使用頻度が高まっている⁽⁵⁾：

表 1 Klimaaktivist（気候活動家）

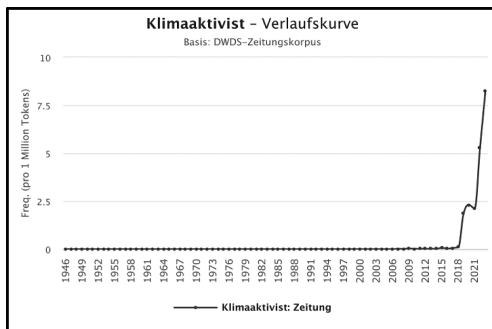
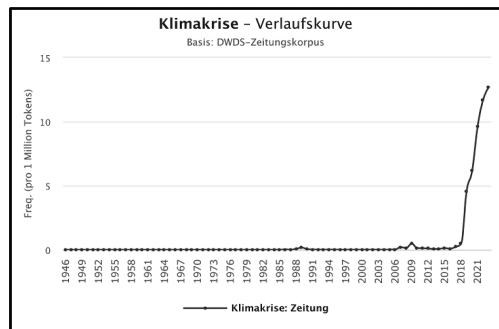


表 2 Klimakrise（気候危機）



最新の情報を斬新な切り口で社会に伝達することがメディアの重要な使命の一つである（仲川／塚越 2011: 147）。その情報伝達において新しい事物や概念を表現する新造語がメディアを通して社会に広まっていく（田中 1972: 37）。この新造語がまもなく使用されなくなる状況造語（Situationsbildung）、または即席造語（Gelegenheitsbildung）（野入／太城 2002: 92f.）として廃語となるのか、それとも社会に定着するのか。言い換えれば、新造語と廃語はその時代の社会的状況を映し出すものとも言えよう。

21 世紀も四半世紀を迎え、ますます地球温暖化（Erderwärmung）や気候変動（Klimawandel）に対処したエネルギー政策が喫緊の課題となっている。本論ではまずドイツ⁽⁶⁾のエネルギー政策に注目し、原子力開発期から脱原子力期、また原子力カルネサンスと表現される現在においてドイツ語圏メディアが用いた言語表現を通時的に取り扱う。第 1 章では複合語に焦点を当て、新造語と廃語となったかつての新造語に注目する。第 2 章においては社会状況が言語表現に与える影響をエコロジーと言語の観点から考察する。

ドイツ語圏メディアとしては週刊誌である *Der Spiegel*、週刊新聞である 2 紙 *Die Zeit*、*Die Welt am Sonntag*（以下 *Die Welt* とする）を主に用いた。これらはいずれもドイツ語圏において評価の高い週刊誌、及び週刊新聞である。統計上刊行頻度を統一するために、週刊のものを対象とした。コーパス検索としては COSMAS II、DWDS（Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache 以下 DWDS とする）を用いた。

1. 構成素 „Atom-“ を規定語とする複合名詞と新造語

ドイツでは第二次世界大戦後原子力分野の研究が禁止されていたが、1955年に主権を回復すると原子力研究開発が解禁された。エネルギー政策において原子力開発を推進するために、同年、連邦原子力省（Das Bundesministerium für Atomfragen）が設立され、シュトラウス（Franz Josef Strauß）が初代連邦原子力大臣（der Bundesminister für Atomfragen）として任命された。連邦原子力大臣には通常 der Atomminister が用いられている。この省名、及び大臣の名称はどちらも構成素 „Atom-“ を規定語とする複合名詞である。通称が der Atomfragenminister ではなく der Atomminister となっているのは、構成素 „Atom-“ が語彙素として Atomfragen の意味を内包していることから、2つの構成素からなる複合語となっている。原子力開発創成期には、構成素 „Atom-“ を規定語とする複合名詞が数多く誕生している。この章では、この時期に作られた構成素 „Atom-“ を規定語とする複合名詞を取り上げ、ドイツ圏メディアが用いた新造語を分析していく。

1.1. 原子力開発創成期の複合語

原子力大臣シュトラウスは翌年1956年6月、政府の特命を受けて3基の軽水炉型原子炉を発注するために北アメリカに飛ぶ。シュピーゲル誌は1956年第25号で目次にATOMGESETZ（原子力法）、記事にはGeheime Bundessache（国家機密）とタイトルを付け、原子力という一般社会にはまだ新しい情報を、以下のように発信している：

(1)

Atom-Gesetz Geheime Bundessache

Am Dienstag vergangener Woche hob sich der westdeutsche Atomminister Franz-Josef Strauß vom Flugplatz Rhein-Main in Richtung Nordamerika in die Lüfte: In seiner Aktenmappe trug er die Bestellungen für drei sogenannte ^①Unterwasser-Atomreaktoren⁽⁷⁾, die nach ihrer Lieferung in München, Frankfurt und Hamburg aufgestellt werden sollen. Zwei weitere ^②Atombrenner werden—gleichfalls noch im Juni—bei der britischen Firma Nuclear Energy Company Ltd. bestellt. (Der Spiegel 25/1956: 10f.)

先週の火曜日、西ドイツ原子力大臣フランツ＝ヨーゼフ・シュトラウスは Rhein-Main 空港から北アメリカに向かって飛び立った：彼の書類カバンには、ミュンヘン、フランクフルト、ハンブルクに建設が予定されているいわゆる^①軽水炉型原子炉3基の発注書が収まっていた。さらに2基の^②原子炉が、同様に6月にイギリス企業の Nuclear Energy Company Ltd. に発注されている。

時期として国家機密的な扱いであった原子力開発に関する記事は、当時まだメディアに登場する機会は多くなかった。この記事に用いられている原子力関連の複合語に焦点を当ててみると、当時の用語使用に苦心の跡が見られる。引用（1）のこの記事の冒頭部分で使用されてい

る構成素 „Atom-“ を規定語とする複合名詞①の Unterwasser-Atomreaktoren は、この言葉を初めて目にする人には必ずしも正確に理解できない用語と言えよう。原子力分野の専門用語である „Atomreaktoren“ の前に規定語としての „Unterwasser“ がハイフンで結ばれている。読者の理解に配慮して sogennante (いわゆる) と前置きし、あえて日常語である „Unterwasser“ を用いて「軽水炉型原子炉」の理解を補足しようとする試みがここには見られる。しかし、実際に Unterwasser-Atomreaktoren という用語は専門用語としては存在せず、この記事のために特別に用いられた造語である。同様に下線②の Atombrenner は専門用語では Atomreaktor であるが、Reaktor ではなく、あえて一般的な表現でもある Brenner (燃焼炉) を基礎語とする複合語を用いている。

この記事の全文中では „Atom-“ を構成素とする複合語が 21 種類使われている：

1) Atomminister, 2) Unterwasser-Atomreaktor, 3) Atombrenner, 4) Atomnutzung, 5) Atomgesetz, 6) Atomwirtschaft, 7) Atomenergie, 8) Atomrisiken, 9) Atom-Reaktoranlagen, 10) Atomschäden, 11) Atomanlage, 12) (Atom-) Anlagen, 13) (Atom-) Abfallbeseitigung, 14) Atomenergie, 15) Atomstrahlen, 16) Atom-Reaktoren, 17) Atommeiler, 18) Atomfachleute, 19) Atom-Kraftwerke, 20) Atom-Schiffe, 21) Atom-Flugzeuge

この記事中で用いられている原子力関連用語の複合語は基本として「名詞＋名詞」で構成された複合語が主であるが、「名詞＋ハイフン＋名詞」の複合語が 21 語中 8 語 (2), 9), 12), 13), 16), 19), 20), 21)) 見られる。これらのハイフンを用いて構成されていた複合語は 2) と 13) を除いて現在ではハイフンのない複合語として定着している⁸⁾。原子力開発創成期にはドイツ語圏メディアにおいては、ハイフンを使用することで „Atom-“ を構成素とする新造語を生み出す段階であったことがわかる。

1.2. ドイツ原子力法と新造語

ドイツ原子力法は 1960 年 1 月 1 日に発効される⁹⁾。この法律の正式名称は「Gesetz über die friedliche Verwendung der Kernenergie und den Schutz gegen ihre Gefahren (原子力エネルギーの平和利用と危機対策に関する法律)」であるが、これを縮約した形で一般的には「Atomgesetz (原子力法)」が使用されている。この複合語には正式名称で使用されている „Kernenergie“ が用いられず、„Atom“ に置き換えられた縮約形となっている。規定語を „Atom“ „Kern“ „Energie“、基礎語を „Energie“ „Gesetz“ とすると「Atomgesetz (原子力法)」の法規に使用された複合語には次の 4 つのパターンが考えられる。ただしこの場合、„Energie“ は規定語 „Kern“ の基礎語であると同時に „Kernenergie“ の形で „Gesetz“ の規定語でもある。この „Energie“ の持つ 2 つの機能は „Atomenergiegesetz“ においても同様となる：

1-a) Kernenergiegesetz	規定語＋基礎語／規定語＋基礎語
1-b) Atomenergiegesetz	規定語＋基礎語／規定語＋基礎語

- | | |
|-----------------|-----------|
| 2-a) Kerngesetz | 規定語 + 基礎語 |
| 2-b) Atomgesetz | 規定語 + 基礎語 |

Weinrich は造語論の中で、新しい複合的な語彙、つまり複合語はそれ自体で大部分がその言葉の意味するところがわかるものであるか、または、新しい造語を形成する個々の構成素間に意味の繋がり曖昧さが残るとしても、少なくともコンテキストの中で、聞き手が容易にその言葉の意味が理解できるものとしている (Weinrich 1993: 914)。この説明に従えば 1-a) は規定語 (Kern) + 基礎語 / 規定語 (Energie) + 基礎語 (Gesetz) の 3 つの部分からなる複合語で、基礎語である Gesetz を規定するものが何であるかが理解しやすいものとなっており、同様に Weinrich が指摘するように、この複合語は「透明性のある (durchsichtig)」ものになっている (同上: 914)。スイスでは原子力法の名称にこの複合名詞が用いられている⁽¹⁰⁾。1-b) も構成素 „Kern-“ が „Atom-“ に置き換えられたものであるが、1-a) と同様に複合語の造語として意味の理解に誤解が生じることはない表現である。しかし、2-a) の場合は 1-a) の Kernenergiegesetz の規定語の一つとしての構成素 „-energie-“ が省略された枠形式 (Klammerformen)⁽¹¹⁾の複合語であり、この場合は省略されているものが正しく補完されなければ誤解を招く恐れがある。例えば das Klimaschutz-Kerngesetz⁽¹²⁾のように用いられると、ここでは「気候保護のためのコアとなる法律」となり、原子力法として理解することはできない。2-b) は 2-a) と同様に枠形式の複合語で、Atomgesetz を正しく理解するためには 2-a) と同様に省略されている構成素 „-energie-“ を補完しなければならない問題がある。

Harlass, G./Vater, H. は 1960 年当時の原子力関連用語を収録し分析を行っている⁽¹³⁾。その中で Weinrich の造語論でも示されているように、枠形式からなる複合語として „Atom-“ を構成素とした複合語を例として取り上げ、„Atom“ を規定語として複合語を作る場合、„-kernspaltung-“ が省略されているか、または規定語 „Atom“ それ自体が枠形式となっているとして、以下の例を挙げている：

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 3-a) Atomwaffe = Atomkernspaltungswaffe | 核兵器 |
| 3-b) Atomkrieg = Krieg mit Atomwaffen | 核戦争 (Harlass, G./Vater, H. 1974: 52) |

つまり、3-b) の複合語 Atomkrieg は、基礎語 „Krieg“ との結合においては規定語の „Atom“ が Atomwaffe の意味を含有する語彙素となっており、核兵器を用いる戦争を意味する複合語となる。Harlass, G./Vater, H. は „Atom-“ を構成素とする複合語として以下の 40 語を挙げている：

Atomabkommen, Atomarmee, Atomausrüstung, Atombedrohung, Atombewaffnung, Atombombe, Atomforscher, Atomfrage, Atomgemeinschaft, Atomgespräch, Atomgranatwerfer, Atomkanone, Atomklub, Atomkommission, Atomkonferenz, Atomkraftwerk, Atomkrieg, Atommacht, Atommonopol, Atom-Parade, Atomphysiker, Atompilz, Atompolitik, Atomprogramm, Atomrakete, Atomrüstung, Atomschirm, Atomschlag, Atomstrategie, Atomstreitmacht, Atomtechnik, Atomtest, Atom-U-Boot, Atom-Ultra, Atom-

この語彙が収集された時期である 1960 年代前半は、「核エネルギーの平和利用」を目的とした、ドイツにおける核開発の黎明期であった。1961 年にドイツで初めて原子力発電所が稼働すると、メディア分野においても核開発に関する多くの複合語が登場する。しかし同時に、キューバ危機で象徴されるように核戦争など「核の脅威」がメディア報道の主要テーマの一つとなっていた時期でもあった。そのために Harlass, G./Vater, H. の収録した複合語の大半は Atomarmee (核武装した軍隊)、Atomaufrüstung (核武装)、Atomrakete (核弾頭ミサイル) などのように、規定語である „Atom-“ に核兵器や原子爆弾など「脅威としての核」の意味を内包する構成素 „Atom-“ を規定語とする複合語と、その脅威を阻止すべく組織された、(Europäische) Atomgemeinschaft (欧州原子力共同体)、Atomkommission (原子力委員会) などのような複合語で占められている。

1.3. 廃れていく新造語

Duden online (以下 Duden とする) には „Atom-“ を構成素とする複合語は現在 118 語収録されている⁽¹⁴⁾。上記 Harlass, G./Vater, H. の収録した 40 種類の新造語の中で Duden に収録されている複合語は 21 語であった。Duden に収録されていないが、ドイツ語語彙辞典 Dornseiff⁽¹⁵⁾ に収録されているものは Atomforscher、Atomfrage、Atomschlag、Atomzentrum の 4 語であり、これらを加えると 25 の語彙が 60 年を経た現在においても生き残っていることになる。一方、Duden にも Dornseiff にも収録されていない複合語は次の 15 語であった：

- 1) Atomarmee, 2) Atomaufrüstung, 3) Atombedrohung, 4) Atombewaffnung, 5) Atomgemeinschaft, 6) Atomgespräch, 7) Atomgranatwerfer, 8) Atomkanone, 9) Atomkommission, 10) Atomkonferenz, 11) Atommonopol, 12) Atom-Parade, 13) Atomschirm, 14) Atom-Ultra, 15) Atom-Unterseeboot

これらはすべて核軍備及び核軍縮交渉に関する複合語であり、1950 年代から 1960 年代にかけてメディアで頻繁に取り上げられるが、1960 年代末以降、使用頻度はほぼ 0 に近い横ばいとなっていることから見られるように、メディアで取り上げられることはほとんどなく、これらの複合語は廃語状態となっていると言えよう。Atomgranatwerfer (1986 年以降)、Atommonopol (1996 年以降)、Atom-Unterseeboot (2006 年以降) に関しては時期こそずれているが使用頻度は完全に 0 となっていることから、これらの複合語も廃語状態であることがわかる。それに対し例外として Atomgespräch と Atomschirm がある。

表3 Atomgespräch 使用頻度推移曲線

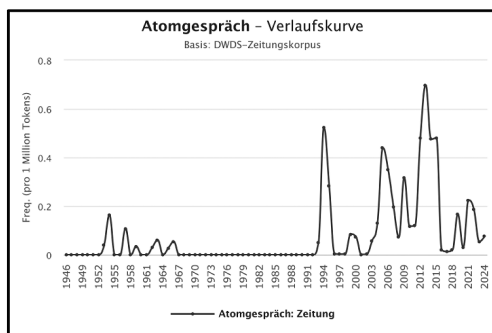


表4 Atomschirm 使用頻度推移曲線

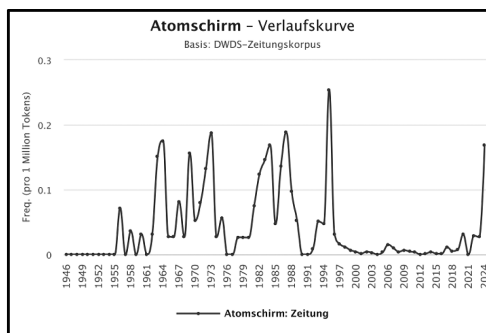


表3に示されているように核兵器保有をめぐる話し合いである Atomgespräch（核交渉）は1952年から1967年の15年間にわたってなだかな上昇と下降を繰り返しながらも使用頻度は低い水準で曲線を描いている。冷戦期における核の抑止力が反映され、核兵器保有に関する米ソを中心とする両陣営の緊張関係が危険水域を超えることがなく、メディアが特に取り上げるテーマとはならなかったのだろう。その後は1992年まではドイツ語圏メディアでこの用語はほとんど使用されていない。しかし、1989年11月ベルリンの壁が崩壊しポスト冷戦の時代に入ると、1992年から1995年にかけて一挙に使用頻度が上昇している。一度1996年に頂点に達し、その後は急降下するが、2012年から2013年にかけて再び頂点に達し、またいったん2017年に下降している。その後は上昇と下降を繰り返している。1967年から1992年までの約25年間使用されることなく、死語（廃語）状態にあったこの複合語は、イラン、北朝鮮などの核開発問題により再び息を吹き返したのである。

表4の Atomschirm（核の傘）は1954年、1964年、1969年、1973年、1984年、1987年の冷戦期の時代と、冷戦後の1995年を頂点とする7つの山のカーブ曲線を描いている。この „Atomschirm“ という用語は、核兵器保有国と非核兵器国の同盟関係を報道する際に使用されるが、2002年以降はほぼ使用されない推移であったが、ウクライナ戦争においてロシアが核兵器使用に言及すると2023年に急上昇している。

2. 原発回帰

シュピーゲル誌は2008年第28号の表紙のタイトルとして „ATOMKRAFT? DAS UNHEIMLICHE COMEBACK“ を掲げ、この記事におけるキーワードの一つである Klimawandel（気候変動）に対処するためのエネルギー政策の選択肢の一つとして注目される、世界的な原発回帰の傾向を特集記事として取り上げた（*Der Spiegel* 28/2008: 20-32）。原子力発電からの撤退がすでに法制化されているドイツ⁽¹⁶⁾ではあるが、表題の中に „ATOMKRAFT?“ と疑問符が付けられているように、ドイツ国内でも原子力回帰への傾向が窺えるようになっていた：

(2)

Kernkraft — ja bitte?

Klimawandel und Ölpreisanstieg führen weltweit zu einem ^③Comeback der Kernenergie. Viele Länder planen den Bau zusätzlicher Reaktoren, in Deutschland will Kanzlerin Angela Merkel ^④den Ausstieg aus dem Atomausstieg durchsetzen. In der SPD ist ^⑤das Thema tabu — noch. (同上：20)

原子力—えっ、何ですって？

気候変動と原油価格の高騰が世界中を^③原子力発電のカムバックへと導いている。多くの国々が原子炉建設を計画している。ドイツではメルケル首相が^④原子力撤退からの撤退を望んでいる。社会民主党（SPD）内では^⑤このテーマはタブーである—今のところは。

上記引用（2）はこの特集記事の内容を端的に表した見出し部分である。下線③ „Comeback der Kernenergie“ にあるように世界的な原子力回帰への動きに対し、„ja bitte?“ と疑問符を付けることで疑問を投げかけ、原子力からの撤退が決定されているドイツにおいても「脱原子力（Atomausstieg）」反対派が多くいることを示唆している。SPD⁽¹⁷⁾と緑の党⁽¹⁸⁾の連立政権から2005年にメルケル首相が率いるCDU⁽¹⁹⁾／CSU⁽²⁰⁾とSPDの大連立政権が誕生するとドイツの脱原子力政策にも変化が見られる。この記事では気候変動、原油価格の高騰が世界を原子力回帰へ向かわせ、原発の新設が多くの国々で計画されている状況が詳細に示されている。ドイツにおいても、原子力擁護派のメルケル第2次内閣⁽²¹⁾の下で下線④の脱原子力からの撤退（den Ausstieg aus dem Atomausstieg）が現実味を帯びてくる。

一方、緑の党との連立政権の下⁽²²⁾、脱原子力を法制化したSPDにおいては原子力回帰のテーマは下線⑤のようにタブーとなっているが、„noch“（今のところ）を付け加えることで原子力政策においては、いつこの状況が変わるかも知れないという皮肉をこめてシュピーゲル誌は見出し文を締めくくり、SPD内部においても原子力政策に関して一枚岩ではない状況を浮き彫りにしている。2008年当時のSPDにおいても原発の活用に関する議論がすでにタブーではなくなりつつあることがここに示されている。

この記事の中では Atomausstieg（脱原子力）のように „Atom-“ を構成素とする複合語は27語見られ、のべ78回の使用が見られる：

Anti-Atom-Bewegung（2）⁽²³⁾， Anti-Atom-Ideologen， Anti-Atomkraft-Demonstration， Atom（2）， Atom-Euphorie， Atomabfall（2）， Atomausstieg（10）， Atomdeponien， Atomenergie（7）， Atomenergiebehörde， Atomfonds， Atomindustrie（6）， Atomkonsens（2）， Atomkraft（7）， Atomkraftfachmann， Atomkraftwerk（9）， Atomlager， Atommanager， Atommeiler（5）， Atommüll（10）， Atomreaktor， Atomstrom（3）， Atomstrom-Gemeinde， Atomscene， Atomtod， Atomwaffe， Atomwirtschaft

この「原発回帰」をテーマとした記事の中では、„Atom-“ を構成素とする複合語が名詞の場合、原子力が人類にとって危険なものであること、原子力の内包する脅威を顕現的に表してい

るものは Atomtod, Atomwaffe の 2 語しか見られない。

この記事中の複合語の使用から見てくるのは、2008 年当時の議論は、気候変動をめぐる原子力が脱炭素化の救世主となりうるのかであり、ドイツが主流となる反原発運動 (Anti-AKW⁽²⁴⁾-Bewegung) とフランスが中心となっていく原子力推進運動 (Kernkraft-ja-bitte-Bewegung) のように、„Atom-“ „Kern-“ を構成素とする対立概念の複合語が新たに生み出されているということである。本来同義語である Atomkraft と Kernkraft においては、ドイツ国内では反原発の立場においては „Atomkraft“ を用い、原発を肯定的に評価する場合は „Kernkraft“ が意識的に使われることが多く見られる (佐藤 2020: 48)。上記引用 (2) においても、下線③ „Comeback der Kernenergie“ で見られる原子力に対する肯定的立場での „Kernenergie“ の使用に対し、下線④の „Atomausstieg“ は原子力に対し否定的な意味合いを持たせる複合語となっており、構成素の使い分けがここでも巧みに行われている。

2.1. 脅威としての原子力を意味する複合語

Duden は 1.2. で示唆したように、現在 „Atom-“ を構成素とする複合語として 118 語を収録している⁽²⁵⁾。その中で人類にとって危険なもの、脅威となるものという観点から分類すると次のようになる：

1) 原子力発電関連事故及び放射性危険物：

Atomabfall (核廃棄物), Atomexplosion (核爆発), Atommüll (核廃棄物), Atom-müllendlager (核廃棄物貯蔵施設), Atomtod (核兵器、被曝による死)⁽²⁶⁾, Atommüll-transport (核廃棄物運搬)

2) 武器・兵力としての核：

Atomangriff (核攻撃), Atombombe (原子爆弾), Atombombentest (原子爆弾実験), Atombomber (原子爆弾を搭載した爆撃機), Atompilz (核爆発によるきのこ雲), Atomrakete (核ミサイル), Atomrüstung (核武装), Atomsprenkopf (核弾頭), Atomsprenkörper (核爆弾), Atomstreitmacht (核戦力), Atomtest (核実験), Atomwaffe (核兵器)

3) 原子力がもたらす国際間の緊張：

Atomklub (核兵器国家連合体), Atomkrieg (核戦争), Atommacht (核兵器大国), Atomstaat (核兵器大国),

Duden は „Atom-“ と同義語である „Kern-“ を構成素とする複合語として 60 語を収録している⁽²⁷⁾。その中で人類に脅威を与えるという観点から語彙を選出すると以下の 7 語しかない：

Kernbombe (核爆弾), Kernexplosion (核爆発), Kernschmelze (炉心溶融), Kernstrahlung (原子線), Kernwaffentest (核兵器実験), Kernwaffenträger (原子爆弾を搭載した爆撃機), Kernwaffenversuch (核兵器実験)

„Kernwaffe“ から派生した関連語彙を一つにまとめると 5 語の複合語を収録するにとどまっており、„Atom-“ を構成素とする複合語と比較すると、„Kern-“ を構成素とする複合語は原子力発電事故関連、核兵器関連語彙などにおいては極めて少なくなっている。

2.2. 原子力反対論者と原子力肯定論者が用いる言語

シュピーゲル誌は 2020 年第 34 号で「シュピーゲル誌上討論 (SPIEGEL-Streitgespräch)」と題し、反原子力の立場をとる (Atomkraftgegner) イギリスの科学者 Dorfman と原子力を肯定する (Atomkraftbefürworter) スウェーデンの原子力技術者 Qvist の二人に、「原子力は気候危機 (Klimakollaps) を救えるのか」、また「原子炉は危険であり、コストもかかりすぎるのか」について討論の場を設定した。シュピーゲル誌が司会を務め、対談は次のように始まる：

(3)

Herr Dorfman, Herr Qvist, ist die Klimakrise eine willkommene Gelegenheit für Lobbyisten, die gefährliche Atomenergie erneut zu propagieren — mit dem Versprechen, die Menschheit vor der globalen Erwärmung zu retten? (*Der Spiegel* 34/2020: 94)

Dorfman さん、Qvist さん、気候危機は原子力ロビイストにとって、人類を地球温暖化から救うことを約束することで、危険な原子力を改めて宣伝できる喜ばしいチャンスでしょうか。

この問いに対し Qvist はシュピーゲル誌の質問の仕方に異議を唱え、次のように反論する：

(4)

Qvist: Ich erhebe Einspruch gegen die Formulierung dieser Frage! ⑥Sie verdächtigt jeden, der Argumente für die Atomkraft findet, ein Lobbyist zu sein — und entwertet seine Argumente. Gute, sachliche Argumente: (同上：94)

Qvist: 私はこの質問の仕方に異議を申し立てます。⑥この質問の仕方では、原子力に賛成意見を述べるものはすべてロビイストと疑われてしまい、彼らの意見が不当に扱われます。明確な公平な意見が正しく評価されなくなるのです。

つまりこのような質問形式では、下線部⑥にあるように「原子力を肯定する意見を述べるものは誰でも原発ロビイストであるというような嫌疑を人々に与えるものである」と Qvist は主張する。彼の立場からするとシュピーゲル誌の質問は「ロビイスト」に焦点が当てられるようにレトリックが意図的に行われており、その結果、隠蔽された否定的な情報操作が働き、原子力に関する正当な意見が評価するに値しないものとなってしまう危険性があることを非難している。

この両者の論争のコアとなるのは、2050 年が気候変動問題に対処するための一つの目標で

あるカーボンニュートラルの達成期限だとすると、脱炭素化に向けていかなる方策があるかということである。シュピーゲル誌は二人の主張をそれぞれ一文でまとめ、冒頭に以下のようなタイトルを付けている（同上：94）：

2-1) ^⑦Veraltete AKW sind ein reales Risiko. (Dorfman)

^⑦老朽化した原発は危険そのものである。

2-2) ^⑧Der Atomausstieg führt jedes Jahr zu über 1000 Toten. (Qvist)

^⑧原発からの撤退が原因で、毎年 1000 人以上の人々が命を落としている。

Dorfman は 2-1) の下線^⑦で示された „Veraltete AKW“ に対し「2050 年をカーボンニュートラルの達成期限とすると、原発の新設は時間的に間に合わない、老朽化した原発の稼働期間の延長は重大事故を起こすリスクが大きすぎる、それゆえ自然エネルギーの開発、設置を急ぐことが喫緊の課題」であり、またコストの面でも建設には莫大な費用がかかるゆえ、その予算を自然エネルギーの開発に充てるべきだと主張する。一方、Qvist は 2-2) の下線^⑧で示された „Der Atomausstieg“ に関して、「ドイツのように原発をすべて停止するような脱原子力政策を進めると、不足分を自然エネルギーで補うことは不可能であることから、これからも化石燃料に依存し、その結果毎年 1000 人以上の死者を生み出すことになる」と脱原子力政策に対し、次のような例を挙げて反論する：

(5)

Warum stößt Deutschland noch so viel ^⑨Klimagas aus, obwohl es mit den Erneuerbaren ganz weit vorn ist? ^⑩Frankreich hingegen ist praktisch dekarbonisiert, Schweden ist dekarbonisiert, was die Elektrizität betrifft. Das funktioniert dort, weil es mehr als 60 Reaktoren gibt, die jahrzehntelang in Betrieb sind. (同上：96)

なぜドイツは自然エネルギーに関しては世界を牽引する先進国であるにもかかわらず、^⑨気候危機の原因となるガス（Klimagas）を大量に排出しているのか。^⑩それに対し電力資源に関しては、フランスは実質ほぼ脱炭素化を達成しており、スウェーデンは脱炭素を達成している。その成功の理由は、何十年にもわたり 60 基を超える原子炉が稼働しているからだ。

ここではフランスとスウェーデンの原子力発電の例を挙げ、下線^⑨の Klimagas と下線^⑩の „dekarbonisiert“ を対峙させ、たたみ込むように „dekarbonisiert“ を連続して用い、大気汚染の原因となる „Klimagas“ を排出しない原子力発電のクリーンさを強調する。

気候変動は人類存続の危機を導く。気候危機に直面している現在において、脱炭素化社会の構築へ向けて CO₂ を排出しないことは確かに喫緊の課題である。しかし、脱炭素化があまりに強調され、安全性が担保されていないにもかかわらず「ブリッジテクノロジー（Brückentechnik）」として原子力発電が揺るぎないものとして提示されると、その効率性ゆえに本来の内包されている放射能の危険性が見えなくなる。この論法はレストランなどの給仕係がはじめ

に習う常套手段と同じものである。給仕係が注文を取る際に、「何にいたしますか」ではなく、「コーヒーになさいますか、それとも紅茶になさいますか」と尋ねると、客はそもそも他のものを注文しようと思っていたことを忘れてしまい、具体的に提示されたものを注文する割合が高くなるとされている⁽²⁸⁾。このようなフレーミング技法を用いた言語表現が今まさに問題となっている。気候危機対策として脱炭素化がテーマとなる中、「天然ガスがいいですか、原子力発電がいいですか」と二者択一を迫られると、化石燃料で地球温暖化の原因となる温室効果ガスを放出する天然ガスではなく、CO₂を排出しない原子力発電を選択する人々の割合が自ずと高くなる。また、上記引用(5)にあるように「ドイツは自然エネルギーに関しては世界を牽引する先進国であるにもかかわらず、気候危機の原因となるガス(Klimagas)を大量に排出している。それに対しフランスとスウェーデンは、電力資源に関しては、フランスもスウェーデンも脱炭素を達成している。その理由は60基を超える原子炉が何十年にわたり稼働しているからだ」という論理が今の気候活動家の運動を支える原理の一つとなりつつある。

2.3. 原子カルネサンスが問いかけるもの

2021年は福島第一原子力発電所事故から10年目にあたり、一つの節目としてドイツメディアでもさまざまな形で原子力発電の現状を総括する記事が取り上げられている。その一つツァイト紙(Die Zeit)は2021年3月4日付で„Atomkraft! Wie bitte?“と見出し語を付けて原子力発電の特集記事を組んでいる。これは前記引用(2)で扱ったシュピーゲル誌の2008年の特集記事„Kernkraft — ja bitte?“を彷彿させるものである。ツァイト紙は福島第一原子力発電所事故から10年後に見る世界の原子力発電の状況がどのようなものか、次のように端的に述べている：

(6)

Vor zehn Jahren schockierte die Explosion des Kraftwerks in Fukushima die ganze Welt. ⑪Heute gilt die Atomenergie sogar manchen Umweltschützern als wirksames Mittel gegen die Erderwärmung. Die Idee ist verlockend — und gefährlich.

(Die Zeit 10/2021: 1)

10年前に福島で起きた原子力発電所爆発は全世界を震撼させた。⑪今日では原子力は環境保護者の間においてさえも地球温暖化を抑えるのに有効な手段としてみなされている。その考えは魅惑的である — そして危険である。

ツァイト紙はこの記事において気候危機と原子力の問題をテーマとし「原子力が戻ってきた(Sie ist wieder da.) (同上：1)」ことを伝えている。下線⑪にあるように、今日では原子力が環境保護者の間においてさえも地球温暖化を抑えるのに有効な手段としてみなされるようになったことである。ツァイト紙はあえてここではKlimaschützerではなくUmweltschützerを用いている。ここにはかつての反原子力運動の核の一つをなしていた環境保護者が原子力を地球温暖化抑止のために認めるという時代の変化を、これら両複合語の基礎語„Schützer“に規定語が„Klima“ではなく„Umwelt“にすげ替えられているところに象徴的に表現されている

と言えよう。

この時代の変化、原子力を肯定的にとらえる潮流はとりわけ若い層において見られる。Fridays-for-Future の創設者であるグレタ・トゥンベリも「自分は原子力の友達ではないが、原子力は脱炭素化に少なからず役立つもの」と自身の Facebook に投稿している⁽²⁹⁾。実際 Fridays-for-Future は世界各地で行われているデモにおいて、「気候保護のためには原発が必要であること」を訴え始めている。それは原子力発電から撤退したドイツの首都ベルリンで行われたデモでも例外ではなかった。彼らは「気候変動から守る原子力！(KERNKRAFT GEGEN KLIMAWANDEL!)」と書かれたポスターを掲げてデモを行っている (*Die Zeit* 10/2021: 15, *Der Spiegel* 2/2022: 18)。この標語を一つのパラドックスとすると、ポリンジャーが高度経済成長期に大気汚染、水質汚染におけるエコロジー的問題と言語の「汚染」との類似性を指摘したように (Bollinger 1980: 182)、この若者たちの行動や、かつての環境保護者 (Umweltschützer) から気候活動家 (Klimaaktivist) へと変身を遂げた人々は、この汚染された言語により原発回帰への衝動に駆り立てられていると言えるのではないか。

おわりに

気候問題を表す複合語が的確にその問題性を表現しているかどうかという疑問に対し、我々は常に言葉に対する感性を繊細に研ぎ澄ませておかなければならない。例えば本論のタイトルで用いられている、我々が日常において頻繁に耳にするようになった複合語 Klimawandel (気候変動) は婉曲表現である。複合語 Klimawandel の基礎語である „Wandel“ は再帰動詞としての sich wandeln (変化する) の名詞化したものであり、Klima (気候) が sich wandeln (変化すること) で、その気候変動の原因となっている人間の存在が直接には見えない構図になっている。この複合名詞においては一般的には、wandeln は他動詞としては理解されないであろう。また、wandeln (変化する) はポジティブな状態への変化の意味もあることから、気候変動問題を扱う用語としての „Klimawandel“ には適さない表現となっている (Wehling, E. 2018: 136ff.)。

同様に Klimaerwärmung (気候温暖化) も婉曲表現となっている。複合語の基礎語 „Erwärmung“ は他動詞 erwärmen (暖める、熱する) が名詞化されたものであるが、しかし、この表現も気候温暖化の状況を正しく表現していない。Klimaerwärmung においては、erwärmen は他動詞であり、この用語の場合、行為者 (Agens) である人間を見出す可能性はあるが、一方で再帰動詞 sich erwärmen (暖まる) という理解も可能性として残る。しかし、この複合語の問題は基礎語として用いられている „Erwärmung“ という語彙の選択である。温暖化を地球規模で見ると、2度から3度の温度の上昇は未曾有の被害を環境に及ぼすことは多くの科学者が指摘するところである。しかし、この „Erwärmung“ という表現では地球環境の危機的状況がベールに包まれているかのように曖昧にしか伝わってこない。今の地球環境は、人間に例えるならば高熱を発している状態にあると言えよう。Klimaerwärmung (気候温暖化) ではなく Klimaerhitzung (気候高温化／灼熱化) と表現することで、我々に問題の深刻さがより正確に伝わり、またより深く我々は気候変動の危険性を意識することができるであろう⁽³⁰⁾。

注

- (1) 1990 年までの社名は Rheinisch-Westfälisches Elektrizitätswerk AG（ライン・ヴェストファーレン電力会社）で、ドイツのエッセンに本社を置くドイツ第二位の大手電力会社である。
- (2) ドイツ語では詳細なジェンダー別表記を用いるべきだが、本論では以下、個別のものを除いて、紙面の都合上男性形のための表記とする。
- (3) 本論においては筆者がエネルギー政策関連用語として重要と思われるものについては日本語とドイツ語を併記した。
- (4) Bild.de: 2023 年 1 月 15 日閲覧
<https://www.bild.de/regional/koeln/koeln-aktuell/luetzerath-klima-ikone-greta-thunberg-erneut-im-braunkohle-dorf-82563680.bild.html>
- (5) 表 1 から表 4 は Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache (DWDS) の Wortverlaufskurven（語彙使用頻度推移曲線）を使用した。
- (6) 本論では旧西ドイツと現在のドイツ連邦共和国をドイツとする。
- (7) 以下、本論の引用文中にある番号や下線は本論執筆者によるものである。
- (8) Duden online に収録されている語彙を検索。2024 年 6 月 30 日閲覧：<https://www.duden.de/woerterbuch>
- (9) 1959 年 12 月 23 日に決定され、翌年 1 月 1 日に発効された。
- (10) <https://www.fedlex.admin.ch/eli/cc/2004/723/de> 2024 年 9 月 2 日閲覧
- (11) Weinrich 1993: 929, Harlass, G./Vater, H. 1974: 50ff. 参照
- (12) Berlin (Reuters) – Klimaschutz in Deutschland wird per Gesetz zur Pflicht gemacht. Neben dem Klimaschutz-Kerngesetz beschloss das Parlament noch eine Reihe weiterer begleitender Vorhaben. 2024 年 9 月 2 日閲覧
<https://jp.reuters.com/article/deutschland-klima-bundestag-idDEKBN1XP10F>
- (13) 1960 年から 1964 年までの日刊新聞、週刊新聞、週刊誌を資料としている。とりわけ、1962 年と 1963 年のものが多く収集されている。(Harlass, G./Vater, H. 1974: 7)
- (14) 2024 年 9 月 20 日現在
- (15) 1934 年の初版より改訂が重ねられ 2020 年に第 9 版が刊行されている。
- (16) Bundesgesetzblatt Jahrgang 2002 Teil I Nr. 26, ausgegeben zu Bonn am 26. April 2002. Bundesgesetzblatt は以下 BGBl. とする。参照箇所の URL は、検索する毎に変更されるので、<https://www.bgbl.de> のみ提示する。
- (17) Sozialdemokratische Partei Deutschlands（ドイツ社会民主党）：本論においては SPD と表記する。
- (18) 緑の党の正式名称は Bündnis 90/Die Grünen（同盟 90/緑の党）であるが、本論では「緑の党」と表記する。
- (19) CDU (Christlich-Demokratische Union キリスト教民主同盟)：本論においては CDU と表記する。
- (20) CSU (Christlich-Soziale Union キリスト教社会同盟)：本論においては CSU と表記する。
- (21) メルケル首相は 2009 年 10 月 28 日に FDP (Freie Demokratische Partei 自由民主党) と第 2 次連立政権を樹立する。
- (22) SPD のシュレーダー首相は 1998 年 10 月から 2005 年 11 月まで緑の党と政権を組み、脱原子力政策を推進した。
- (23) 以下語句の後に付けられた数字はその語句の出現回数を示す。
- (24) AKW は Atomkraftwerk（原子力発電所）の略語であり、「Atom-」を構成素とする複合語となっている。
- (25) Duden: 2024 年 9 月 15 日閲覧：<https://www.duden.de/rechtschreibung/Atom> Atom 以下参照
- (26) Duden では Atomtod は「核兵器、被曝による死 (Tod durch Atomwaffen, Atomstrahlen)」と説明されている。2024 年 9 月 15 日閲覧：<https://www.duden.de/rechtschreibung/Atomtod>
- (27) Duden: 2024 年 9 月 15 日閲覧：<https://www.duden.de/rechtschreibung/Kern> Kern 以下参照

- (28) DER PRAGMATICUS: <https://www.derpragmaticus.com/r/atomkraft-klima/> 2024 年 9 月 15 日閲覧
- (29) So kommt es, dass zu den Befürwortern der Atomenergie heute auch Menschen zählen, von denen man es früher am wenigsten erwartet hätte: Umweltschützer.
Die Fridays-for-Future-Gründerin Greta Thunberg verkündete 2019 in einem viel beachteten Facebook-Post, sie sei zwar keine Freundin der Kernkraft, dennoch könne diese »einen kleinen Teil zu einer großen CO₂-freien Lösung« beitragen. (*Die Zeit* 4. März 2021/10: 14)
- (30) 例えば三省堂 辞書を編む人が選ぶ「今年の新語 2023」では、「地球沸騰化」が 2023 年の大賞として選出されている。地球に危機的・破壊的状况をもたらす気候変動が、「地球温暖化」という表現ではもはや正確には言い表せていないことへの警鐘として生まれた新語である。

参考文献

- 佐藤和弘, 「エコロジーと原発用語」, 『龍谷紀要』, 第 42 巻第 1 号, 2020 年, 35-51。
- 佐藤和弘, 「エネルギー政策とドイツメディアの言語表現」, 『龍谷紀要』, 第 43 巻第 2 号, 2022 年, 77-92。
- 壽福眞美／法政大学サステナビリティ研究センター編, 『「エネルギー計画 2050」構想：脱原子力・脱炭素社会にむけて』, 法政大学出版局, 2019 年。
- 田中宏幸, 「現代ドイツ新聞語の特色」, 『金沢大学教養部論集 人文科学篇』, 1972 年, 33-52。
- 田中宏幸, 「現代ドイツ語の語彙と造語の特色」, 『金沢大学教養部論集 人文科学篇』, 1976 年, 83-104。
- 仲川秀樹／塚越孝, 『メディアとジャーナリズムの理論』, 同友館, 2011 年。
- 野入逸彦／太城桂子, 『語彙・造語』, 大学書林, 2002 年。
- 浜崎長寿／野入逸彦／八本木薫, 『動詞』, 大学書林, 2008 年。
- 米本昌平, 『地球変動のポリティクス 温暖化という脅威』, 弘文堂, 2011 年。
- Chomsky, N./Pollin, R., 早川健治 訳, 『気候危機とグローバル・グリーンニューディール』, 那須里山舎, 2021 年。
- Radkau, J./Hahn, L., 山縣光晶／長谷川純／小澤綾羽 訳, 『原子力と人間の歴史』, 築地書館, 2015 年。
- Bollinger, D.: *Language The Loaded — Weapon*. London and New York. Longman. 1980.
- Dargiewicz, A.: Wörter ohne Grenzen. Zur Form und Funktion der Komposita in den Presseartikelüberschriften am Beispiel der Online-Ausgabe der Wochenzeitung „Die Zeit“. In: Bartoszewicz, I. et. al. Hrsg.: *Grenzen der Sprache — Grenzen der Sprachwissenschaft*. Wrocław — Dresden. Neisse Verlag. 2017. S. 55-66.
- Dornseiff, F.: *Der Deutsche Wortschatz nach Sachgruppen*. 9. Auflage. Berlin, Boston. De Gruyter. 2022.
- Fill, A.: *Ökologlinguistik*. Tübingen. Gunter Narr Verlag. 1993.
- Fill, A. / Mühlhäusler, P.: *The ecolinguistics reader*. London u. New York. Continuum. 2001.
- Harlass, G./ Vater, H.: *Zum aktuellen deutschen Wortschatz*. Tübingen. TBL Verlag Gunter Narr. 1974.
- Kammermann, N.: *Argumentationen über den Klimawandel in Schweizer Medien*. Berlin, Boston. De Gruyter. 2022.
- Liimatainen, A.: *Untersuchungen zur Fachsprache der Ökologie und des Umweltschutzes im Deutschen und Finnischen*. Peter Lang GmbH. 2014.
- Mattfeldt, A./ Schwegler, C./ Wanning, B.: *Natur, Umwelt, Nachhaltigkeit. Perspektiven auf Sprache, Diskurse und Kultur*. De Gruyter. 2021.
- Trampe, W.: Language and ecological crisis. In: Mühlhäusler, P.: *The ecolinguistics reader*. London and New York. Continuum. 2001, S. 232-240.
- Wehling, E.: *Sprache, Werte, Frames*. Frankfurt a. M. u. New York. Campus Verlag. 2014.
- Wehling, E.: *Politisches Framing. Wie eine Nation sich ihr Denken einredet — und daraus Politik macht*. Berlin. Ullstein Verlag. 2018.
- Weinrich, U.: *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich. Dudenverlag. 1993.

BMUV. (Bundesministerium für Umwelt, Naturschutz und nukleare Sicherheit und Verbraucherschutz) :

<https://www.bmuv.de>

BGBI. (Bundesgesetzblatt): <https://www.bgbl.de>

Duden online-Wörterbuch: <https://www.duden.de>

COSMAS II: <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/faces/noAccess.xhtml>

DER SPIEGEL Online-Nachrichten: <https://www.spiegel.de>

Die Zeit Online: <https://www.zeit.de/index>

Salvador de Madariaga y sus relaciones con los representantes diplomáticos durante la Segunda República: un análisis de *Espanoles* *de mi tiempo* (1974)⁽¹⁾

Keishi YASUDA

► Palabras clave

Salvador de Madariaga;
Alejandro Lerroux;
Luis de Zulueta;
Julio López Oliván;
Manuel Azaña

▼ Resumen

Salvador de Madariaga (1886-1978), diplomático, historiador y pensador gallego, influyó de forma notable en la política exterior de la Segunda República española (1931-1936), como representante del gobierno de Manuel Azaña en la Sociedad de Naciones. Tras el estallido de la Guerra Civil (1936-1939) en España, Madariaga vivió exiliado en Suiza. En 1974, se publicó uno de sus libros más personales, *Espanoles de mi tiempo*. En esta obra, Madariaga reflexiona sobre algunos de los personajes españoles más trascendentales del siglo XX, como Manuel Azaña, presidente del gobierno de España de 1931 a 1933 y presidente de la República durante el periodo 1936-1939, o como Luis de Zulueta, intelectual republicano que se exilió en Estados Unidos después del comienzo de la contienda, y que había ejercido el cargo de ministro de Estado entre los años 1931 y 1933. Esta investigación tiene como objetivo profundizar en la política exterior del gobierno azañista; sobre todo, en las principales características de la diplomacia desarrollada en la Sociedad de Naciones. Para cumplir este objetivo, primordialmente, por una parte, se analizan el susodicho libro de memorias de Madariaga y, por otra parte, los personajes destacados de los que trata esta obra, que no ha

sido suficientemente estudiada hasta ahora en el campo de la investigación histórica.

Introducción

Salvador de Madariaga (1886-1978), uno de los más destacados intelectuales, historiadores, pensadores en la España del siglo XX, es bien conocido por su labor como diplomático durante la Segunda República (1931-1936). Madariaga también integró la amplia nómina de intelectuales de aquella época que intervinieron en política. Después de que estallara la Guerra Civil (1936-1939), primero se exilió en Gran Bretaña y finalmente en Suiza. Falleció en Locarno en 1978. En 1974, cuatro años antes de su muerte, publicó *Espanoles de mi tiempo*⁽²⁾, uno de sus libros de memorias más peculiares debido a que rememora a los personajes políticos, los intelectuales y los artistas (entonces ya todos fallecidos) que más le impresionaron en su vida. Primordialmente, José Manuel Lara Hernández, conocido editor de la Espasa-Calpe de aquella época⁽³⁾, fue quien le aconsejó e impulsó a que escribiera este libro. Ese mismo año salió a luz su otro libro biográfico *Memorias (1921-1936). Amanecer sin mediodía*⁽⁴⁾ en el que retrataba sus vivencias durante los quince años como diplomático en la Sociedad de Naciones y durante el periodo republicano.

En cuanto a la política exterior de la Segunda República, hasta la actualidad ha habido diversos estudios existentes que analizan el segundo libro de memorias de Madariaga, con el fin de profundizar en la actitud diplomática de la Segunda República o en las relaciones hispano-japonesas en torno al Incidente de Manchuria en 1931⁽⁵⁾. Aunque algunas investigaciones han apuntado a que la Segunda República no contaba con una auténtica diplomacia en comparación con la que posteriormente tuvo durante la Guerra Civil o, por otra parte, con la desplegada por el franquismo, se ha comprobado que también la Segunda República desarrolló una política exterior muy activa con la presencia de Madariaga. Ahora bien, en cuanto a lo concerniente a la política exterior republicana⁽⁶⁾, es necesario matizar que ha sido un aspecto que *Espanoles de mi tiempo* se ha indagado e investigado relativamente menos que en su otro libro de memorias. Por lo tanto, el presente estudio, teniendo en cuenta como el principal documento el libro *Espanoles de mi tiempo*, que consiste en el análisis de diversos personajes trascendentales de aquella época y que no ha sido analizado suficientemente, tiene como objetivo arrojar nueva luz sobre la proyección de la política exterior del régimen republicano.

Por otra parte, conviene subrayar que los personajes recogidos en *Espanoles de mi tiempo*, todos ellos sin excepción, habían fallecido antes de la publicación del libro en 1974. Esta elección de personajes —pasados a mejor gloria— por parte de Madariaga, le ocasionaría algunas críticas ya que, como es obvio, “los muertos no hablan” y, por consiguiente, no pueden defenderse. Pero, dejando esto a un lado, sería pertinente enfatizar que el testimonio de Madariaga fue “valioso” por ser un intelectual “longevo” (vivió hasta sus noventa y dos años) que desplegó una gran actividad, recorriendo España, Francia, Gran Bretaña y Suiza, en

los ámbitos de las letras, las humanidades, la política y la diplomacia.

1. La vida de Madariaga

Primeramente, expondremos de manera concisa la historia personal de Madariaga. Nacido en A Coruña en 1886. A sus catorce años empezó los estudios en Francia para estudiar ingeniería y así cumplir los deseos de su padre. Éste era coronel en el ejército de tierra y pensaba que la derrota de las tropas españolas en la Guerra de Cuba estaba relacionada con la baja potencia de la ingeniería española. De ahí que mandara a su hijo a adquirir los mejores conocimientos científicos y tecnológicos a Francia, país que poseía una tecnología puntera muy superior a la de España. En 1911, cuando Madariaga cumplió veinticinco años, obtuvo la Licenciatura en Ingeniería y, al mismo tiempo, comenzó a mostrar claramente su interés y vocación por el campo de las Humanidades. Después de volver a España en 1912, prestó sus servicios como ingeniero ferroviario y se casó con la escocesa Constance Archibald. Manejando no sólo español y francés, sino también inglés y alemán, trabajó como intérprete a la vez que se dedicaba a las actividades literarias⁽⁷⁾.

En 1921, Madariaga llegó a Ginebra con el fin de trabajar en la Sociedad de Naciones, organismo internacional diseñado y establecido para el cumplimiento y mantenimiento de la paz mundial. El diplomático gallego principalmente estuvo en el Departamento de Desarme hasta 1927, adquiriendo en este periodo un profundo conocimiento sobre la política exterior y la sociedad internacional. Esta experiencia le llevaría posteriormente a que le consideraran como “el más europeo de los españoles”⁽⁸⁾. Pese a que como diplomático tenía una agenda muy apretada en esta etapa, supo compaginar este trabajo con su investigación literaria. El fruto de su labor y vocación literaria dio como resultado una de sus principales obras, *Guía del lector del “Quijote”: ensayo psicológico sobre el “Quijote”*, que fue publicada en 1926.

En mayo de 1931, Madariaga fue nombrado embajador de Washington por el gobierno de la Segunda República, que había sido instaurada tan solo un mes antes. El gobierno republicano profesaba y alentaba el pacifismo en su diplomacia, como se ve en el artículo sexto⁽⁹⁾ en el que queda reflejada su “voluntad de renuncia a la guerra como instrumento de política nacional”. Su política concordaba con la de la Sociedad de Naciones en pro del pacifismo y del desarme. El hecho de que se recogieran estos principios pacifistas en la Constitución republicana, establecida en diciembre de 1931, se debe en gran medida al esfuerzo de Madariaga⁽¹⁰⁾. Manuel Azaña, presidente del gobierno durante el primer bienio republicano e intelectual de gran talla, conocía muy bien a Madariaga, y los dos tenían relaciones amistosas desde 1914, sobre todo, a través de las actividades literarias. Es decir, Madariaga ejerció una influencia decisiva para que la República contara con una Constitución pacifista.

Además, la postura del gobierno azañista de ser fiel a la política de la Sociedad de Naciones estaba relacionada con la baja capacidad de su diplomacia debido a la limitación de

recursos. La Segunda República, recién instaurada tras la dictadura de Primo de Rivera (1923-1930), poseía poca fuerza en su política exterior y su principal línea política de acción se basaba en evitar cualquier tipo de desavenencias con las grandes potencias europeas de la época, como Francia y Gran Bretaña. En todo caso, estos países desempeñaban un papel orientador en la institución ginebrina.

Madariaga, como representante de España en la Sociedad de Naciones, intervino en el proceso de negociaciones para solucionar varios conflictos internacionales, tales como el asunto derivado del Incidente de Manchuria entre China y Japón en septiembre de 1931. Después, volvió a España y, en marzo de 1934, fue nombrado ministro de Instrucción Pública por el gobierno de Alejandro Lerroux (1864-1949) del Partido Radical, ejerciendo el cargo hasta abril del mismo año. Seguidamente, ocupó la cartera de Justicia, cuya experiencia terminó también en un corto periodo de tiempo. Antes del estallido la Guerra Civil en julio de 1936, fue elegido miembro de la Real Academia Española, pero después de la contienda se le negó el ingreso durante muchos años debido a su aversión al régimen del general Franco. De ahí que no volviera de Suiza, donde se encontraba en exilio, para aceptarlo de forma reglamentaria. Finalmente, el discurso para su ingreso oficial se celebró en mayo de 1976, aproximadamente seis meses tras la muerte del dictador, cuando Madariaga tenía ya noventa años⁽¹¹⁾. La actitud en contra tanto de Franco como de su dictadura quedó plasmada en diversos de sus ensayos como *General, márchese Vd.* en 1959 y en algunas de sus declaraciones. De manera que, previamente en enero de 1976, ya había criticado con dureza a Franco como “usurpador que consideraba España su propiedad tras su conquista”⁽¹²⁾.

Por otra parte, Madariaga siguió mostrando una imagen brillante de intelectual de carácter liberal en el exilio. En 1948 en el Congreso del Movimiento Europeo celebrado en La Haya, fue nombrado presidente de la Comisión de Cultura y propuso la instauración del Colegio de Europa en Brujas, el cual se haría realidad al año siguiente⁽¹³⁾. En 1973, valorada su larga trayectoria como diplomático y escritor, se le otorgó el Premio Carlomagno desde la ciudad alemana de Aquisgrán⁽¹⁴⁾. Además, tanto en 1937 como en 1952 fue el candidato al Premio Nobel de la Paz⁽¹⁵⁾. Por añadidura, asistió varias veces al programa de la televisión suiza *Tele-revista* (1973-1989), producido por emigrantes de España durante la Guerra Civil. En una entrevista emitida en febrero de 1976, tres meses después del fallecimiento de Franco, señaló que “la obligación máxima que tenemos es la de evitar esa guerra civil” y enfatizó la necesidad de la unión entre los españoles una vez acabada la prolongada dictadura⁽¹⁶⁾.

2. Alejandro Lerroux (1864-1949)

A partir de este apartado, se analizan los personajes referidos en *Espanoles de mi tiempo*. Empezamos con Alejandro Lerroux. Madariaga mantuvo una estrecha relación con Lerroux, quien fue ministro de Estado (abril-diciembre de 1931) en el gobierno provisional de Manuel Azaña (octubre-diciembre del mismo año⁽¹⁷⁾), sobre todo a través de su labor diplomática en la

Sociedad de Naciones.

El 1 de mayo de 1931 Madariaga, que era catedrático de Español y de Literatura Española en la Universidad de Oxford, se enteró en La Habana, donde se encontraba como invitado en una conferencia, de la noticia de que había sido nombrado embajador de Washington por el gobierno de Azaña. A este respecto, contaría que le inquietó dejar el puesto en Oxford, pero no tuvo más remedio que aceptar el cargo de embajador⁽¹⁸⁾.

En septiembre de 1931, Madariaga, ya ejerciendo de embajador, tuvo que acudir a la institución ginebrina, acompañando a Lerroux, ministro de Estado, puesto que Lerroux no manejaba bien el francés, idioma indispensable en la Sociedad de Naciones, y Madariaga se vio obligado a estar a su lado como auxiliar. Aunque Madariaga mencionaría este punto posteriormente en otro libro de memorias, en *Espanoles de mi tiempo* se describe aun más la pobre capacidad lingüística de Lerroux. Según Madariaga, Lerroux chapurreaba esta lengua franca y aunque no le costaba tanto leer el francés coloquial, no lo entendía ni podía pronunciarlo ni leía un registro más culto como el lenguaje literario⁽¹⁹⁾. El mes de septiembre de 1931 fue el momento en el que se discutía vigorosamente sobre el “asunto de Manchuria” en la institución ginebrina para encontrar una solución adecuada a este conflicto internacional. Entonces, España, pese a que era potencia “menor” en el escenario político internacional, oficiaba de presidente del Consejo de la Sociedad de Naciones. En todo caso, por su limitada capacidad lingüística, a Lerroux le resultaba complicado que las reuniones marcharan sin el menor contratiempo, por lo que Madariaga, quien manejaba bien diversos idiomas y estaba al tanto de la política exterior, le sirvió de intérprete.

Kenkichi Yoshizawa (1874-1965), ministro plenipotenciario de Japón en París en septiembre de 1931, cuando empezó a discutirse sobre el asunto de Manchuria en la Sociedad de Naciones, se entrevistó con Madariaga en el Hotel Metropole de Ginebra donde estaba la representación diplomática de Japón. Yoshizawa lo describió en su libro de memorias detalladamente, refiriéndose sobre todo a la relación entre Madariaga y Lerroux:

A las diez de la mañana me visitó De Madariaga, el segundo representante plenipotenciario de España en Ginebra (el primero era Lerroux, el ministro de Estado), con la orden de Lerroux. Me dijo que había llegado un telegrama sobre el gran incidente en Mukden y que había causado una gran conmoción dentro de la Sociedad de Naciones. Luego me pidió que le explicara los detalles de lo ocurrido.

Yo le contesté que me había enterado de esta noticia por medio de un periódico que anteriormente me habían enviado desde Japón, pero en aquel momento aún no me había llegado el telegrama procedente del gobierno nipón, por lo que le comuniqué que no conocía ningún detalle. De ahí que simplemente le informara de que nada más que recibiera un informe oficial de Japón sobre este asunto, me pondría en contacto con él. Poco después me llegó el telegrama oficial. (...) Y como se lo había prometido, le comuniqué el contenido a De Madariaga⁽²⁰⁾.

De lo expresado por Yoshizawa, se deduce que a pesar de que Lerroux representaba a la delegación diplomática en Ginebra como ministro de Estado, la persona encargada *de facto* era Madariaga. La relación entre ambos se basaba, por un lado, en la escasa capacidad como el líder de la representación diplomática y, por otro lado, en el conocimiento y la experiencia de Madariaga, tanto en el aspecto lingüístico como en el diplomático, que compensaban las susodichas carencias. Además, Madariaga recuerda que, varias veces para poder entablar conversaciones con Yoshizawa, tuvo que frecuentar el hotel en lugar del ministro de Estado. Asimismo, Madariaga detalla que, al sentarse Lerroux en la silla del Consejo de la Sociedad de Naciones, siempre se ponía al lado suyo como su intérprete y que las reuniones marchaban como si todos los asuntos se estuvieran discutiendo en Madrid. Sin embargo, Lerroux no se refiere en ningún momento a este hecho en su libro de memorias, lo cual fue muy criticado por Madariaga⁽²¹⁾.

Como se ha indicado, entre marzo y abril de 1934 Madariaga, a petición de Lerroux, que llegó a ser presidente del gobierno, fue nombrado ministro de Instrucción Pública y justo poco después de Justicia. Madariaga, reflexionando sobre este hecho, anotó que en el régimen de Lerroux era previsible un inminente fracaso y que el hecho de ejercer de ministro y de haber dejado el puesto de embajador de París y el de la institución ginebrina resultó “el mayor desacierto” en su carrera como político y diplomático⁽²²⁾.

En todo caso, en *Espanoles de mi tiempo*, a Lerroux se le valora poco no sólo como ministro de Estado, sino también como presidente del gobierno. Además, Madariaga lo culpó de ser uno de los personajes que provocó el derrumbamiento de la Segunda República.

3. Luis de Zulueta (1878-1964)

En *Espanoles de mi tiempo*, Luis de Zulueta, sucesor de Lerroux en la cartera de Estado, fue una persona apreciada por Madariaga, a diferencia de Lerroux. Zulueta, conocido pedagogo, pese a que era republicano, destacaba también por ser un ferviente católico. Madariaga, teniendo en cuenta su profunda devoción, expresó acerca de Zulueta que “daba siempre la impresión clerical” elevándolo a la misma categoría de Miguel de Unamuno (1864-1936), mientras que, en otra ocasión, lo describió muy favorablemente con tales palabras como “leal, recto, buen amigo, buena persona y de muy aguda inteligencia” o que “no conocía la envidia”⁽²³⁾. Asimismo, Madariaga alabó la capacidad lingüística de Zulueta, afirmando que “no hablaba inglés, pero sí buen francés”⁽²⁴⁾. De ahí que Madariaga manifestara que Zulueta se había posicionado como el mejor ministro de Estado después de Fernando de los Ríos (1879-1949)⁽²⁵⁾.

En enero de 1932, Madariaga dejó oficialmente el puesto de embajador de España en Washington y luego se encargaría exclusivamente a realizar las labores que conllevaba desempeñar el cargo de primer delegado de España en la Sociedad de Naciones en Ginebra⁽²⁶⁾. En aquel entonces, Madariaga criticaba de manera intensa la postura de Japón en la

institución ginebrina, sosteniendo que el Estado nipón, por su conducta en Manchuria, violaba el pacifismo que profesaba la Sociedad de Naciones, de modo que el representante español se posicionó a favor de imponer alguna sanción a este país. No obstante, la actitud de Madariaga fue criticada por las grandes potencias europeas como Francia y Gran Bretaña, que vacilaron en penalizar a Japón, que estaba entrando en el grupo de los países de primer orden al igual que ellas⁽²⁷⁾. En febrero de 1932, Azaña, presidente del gobierno en Madrid, se entrevistó con Zulueta, ministro de Estado, y anotó lo siguiente en su diario:

Madariaga, según Zulueta, que está enteradísimo de los asuntos de Ginebra, ve demasiado a España como una pieza de la Sociedad, y hay que frenarlo (...). Esto es a propósito del Japón, con el que no nos conviene ponernos a mal⁽²⁸⁾.

En efecto, Madariaga colaboraba en la institución ginebrina con los representantes de los países “modestos” como Suecia, Noruega, Finlandia, Holanda, Checoslovaquia y Suiza. Todos ellos acuerdan poner de relieve la necesidad de que la Sociedad de Naciones sancione a Japón. Sin embargo, al cabo de casi cuarenta años, Madariaga mostraría cierto sentimiento de indignación en esta anotación sobre Azaña en *Espanoles de mi tiempo*:

Ni en el caso de Azaña ni en el de Zulueta pudo haber deficiencia de la función intelectual. (...) Pero en el caso de Zulueta se dio además aquel carácter tan timorato y como recomido de escrúpulos que le llevó a adoptar sin resistencia los prejuicios personales de Azaña⁽²⁹⁾.

De estas líneas se desprende que Zulueta fue descrito sumamente de forma “negativa”, pero también resulta interesante apreciar que la valoración global que Madariaga hace de Zulueta fue “positiva”. En abril de 1932, Madariaga, acerca del asunto de Manchuria, alegó que la Sociedad de Naciones debía enviar armas a China para su apoyo y volvió a exhibir la misma postura acerca de esta índole en un discurso en el que criticaba en público el militarismo nipón llevado a cabo en Ginebra ocho meses más tarde. Desde luego, en Madrid, Azaña no pudo reprimir su disgusto y comenzó a barajar la idea de quitar a Madariaga en su puesto de representante de España en la Sociedad de Naciones. Esta idea de Azaña fue rechazada por Zulueta, que valoraba la capacidad extraordinaria de idiomas y la larga experiencia en la institución ginebrina de Madariaga⁽³⁰⁾.

En esta obra, Madariaga reprochó a Zulueta su postura de “adoptar sin resistencia los prejuicios personales de Azaña”. Madariaga tenía la confianza en que España, pese a su categoría de un país pequeño, podía desplegar grandes actividades en la escena internacional, lo cual fue muy bien valorado por Zulueta. Por esta razón, Madariaga calificó de manera más favorable a Zulueta, con un tono muy diferente que a su antecesor Lerroux.

4. Julio López Oliván (1891-1964)

En *Espanoles de mi tiempo*, Madariaga se enfoca no sólo en los políticos e intelectuales, sino también en varios diplomáticos quienes trabajaron como subordinados de los anteriores. En 1931 cuando Madariaga se convirtió en representante de la institución ginebrina, Julio López Oliván, diplomático de carrera, prestaba sus servicios como director de Política del ministerio de Estado.

Por aquel entonces López Oliván había pasado la mayoría de los años como diplomático en Marruecos. Madariaga, mencionando a López Oliván, apreció su aspecto avezado como diplomático competente⁽³¹⁾. Además, le colmó de alabanzas afirmando que López Oliván poseía la indispensable “objetividad” en la labor diplomática que resultaba un pilar básico para desarrollar la creatividad y la resistencia⁽³²⁾. Por otra parte, también Lerroux, como ministro de Estado, destacaría en su libro de memorias que López Oliván era el hombre más “prominente” en la representación diplomática de España en Ginebra y llegaría a señalar que “la Segunda República pudo desarrollar su diplomacia ‘sin titubeos’ gracias a este hombre lúcido y respetado”⁽³³⁾.

En septiembre de 1931, cuando se inició el proceso para solucionar el asunto de Manchuria en la Sociedad de Naciones, López Oliván acompañó a Madariaga hasta Ginebra como director de Política del ministerio de Estado. Entonces, como ya se ha indicado en el apartado sobre Lerroux, Yoshizawa, ministro plenipotenciario de Japón en París, vio a Madariaga en el Hotel Metropole. Esta escena de principio a fin también aparece en *Espanoles de mi tiempo* en el capítulo dedicado a López Oliván. En efecto, López Oliván estuvo con Madariaga en su visita a Yoshizawa. En aquel momento en el que España desempeñaba la presidencia del Consejo de la Sociedad de Naciones en la institución ginebrina, se veía obligada a conocer el movimiento del cuerpo diplomático japonés, de ahí que los dos visitaran a Yoshizawa. Madariaga anotaría el estado de la entrevista de esta forma:

Voy, pues, a ver a Yoshizawa⁽³⁴⁾, el delegado japonés, al Hotel Metropole, desde luego ruego a Oliván que me acompañe. (...) Yoshizawa sabe perfectamente que aquel incidente en Mukden es la primera escena de una aventura que conduce inexorablemente a la anexión de Manchuria por el Japón, digan lo que quieran los artículos, ya del Pacto ya del *Times*; y nos recibe atrincherado tras una muralla de supuesta inocencia e ignorancia. “No sé. Me voy a enterar”, dice, y en secreto piensa: “Mientras me entero de lo que ya sé, han avanzado una etapa nuestras tropas”⁽³⁵⁾.

De estas líneas, se puede inferir que la expresión de Madariaga, aunque se trataba de la misma escena, era muy diferente a la de Yoshizawa y que el diplomático gallego pensaba que Yoshizawa ya estaba sobradamente al corriente del transcurso de la invasión japonesa del

territorio manchú. Tras la entrevista, Madariaga intercambió opiniones con López Oliván:

Salimos y digo a Oliván: “Si la Sociedad juega bien sus cartas, podremos crear una situación tal que los Estados Unidos tengan que ingresar en ella: porque la Sociedad va a tener que enfrentarse con el Japón y el Japón es hoy el enemigo mayor de los Estados Unidos.” Y me dice Oliván: “Este Yoshizawa dice que no sabe nada y lo sabe todo. No nos harán caso. De modo que el Japón no le tiene miedo ni a Ginebra ni a Washington”⁽³⁶⁾.

López Oliván acertó en su predicción y Estados Unidos continuó sin entrar oficialmente en la Sociedad de Naciones, mientras que Japón, sin tener excesivo miedo a Estados Unidos, siguió con su invasión de Manchuria y se retiró de la institución ginebrina en marzo. Madariaga, en *Espanoles de mi tiempo*, criticaría a Estados Unidos, basándose en el hecho de que este país no fuera miembro de la Sociedad de Naciones, y exigiría responsabilidades a Hoover, presidente, y a Stimson, secretario de Estado norteamericano. Asimismo, llegaría a reconsiderar la posibilidad de que si Estados Unidos se hubiera encargado del núcleo de esta organización, se habría evitado el ascenso al poder de Hitler, el cual llevó a Alemania a la retirada de la institución ginebrina en 1933⁽³⁷⁾.

En suma, López Oliván, a través de la entrevista con Yoshizawa, mostró su capacidad de diplomático de primera categoría que contaba con una buena visión de futuro. Madariaga lo alabó destacando “su agudeza habitual”⁽³⁸⁾.

5. Manuel Azaña (1880-1940)

En esta obra, Madariaga dedicó a Azaña el mayor número de páginas entre todos los personajes referidos. De igual manera, se observa que Madariaga tenía una fuerte consideración hacia Azaña tanto en el plano intelectual como en el político. Además, su valoración a Azaña resulta una mezcla entre lo positivo y lo negativo, de lo cual se deduce naturalmente que Madariaga abrigaba hacia Azaña una especie de “respeto”, y a la vez un sentimiento de cierto “desprecio”.

En cuanto a las cualidades de Azaña, señaló que era una persona “inmutable” y “noble” y escribió que la nobleza que emanaba de él era “flor natural de su elegancia interna”⁽³⁹⁾. Al mismo tiempo, puso por las nubes su elocuencia, de ahí que anotara “el orador parlamentario más insigne que ha conocido España”⁽⁴⁰⁾. Madariaga no valoró a Lerroux y a Zulueta tan favorablemente y eso sugiere que Azaña era uno de los personajes más excelsos del siglo XX, no sólo en el mundo intelectual sino también en el político.

Madariaga, por su parte, al hacer mención al primer bienio republicano (de octubre de 1931 a septiembre de 1933) en el que Azaña fue presidente del gobierno, desarrolló una serie de críticas hacia él. Madariaga indicó con dureza que la diplomacia del gobierno azañista fue un “fracaso” y enumeró varios hechos que motivaron su descontento.

Entre otros, Madariaga criticó principalmente que cuando en la Sociedad de Naciones la postura del “desarme” en conformidad con el “pacifismo” se convirtió en un problema pendiente, pese a que la Segunda República asimismo profesaba una demarcada y profunda actitud proclive hacia el “pacifismo”, no llegó a adoptar una actitud de participación activa en esta línea de pensamiento político. Así pues, Madariaga ejemplificó la mala gestión diplomática republicana en la Conferencia de Desarme que tuvo lugar en Ginebra entre febrero de 1931 y junio de 1933. El asunto del desarme no evolucionó tan favorablemente en los años veinte y la esperada Conferencia por fin se celebró con la iniciativa de la institución ginebrina con la participación de sesenta y cuatro países del mundo, incluidos Estados Unidos y la Unión Soviética, dos grandes potencias que todavía no eran miembros de esta organización. Mientras que en la Conferencia, la Unión Soviética apeló a la prohibición de todo tipo de armas, Francia sostuvo la propuesta de desautorizar las armas con la clara capacidad de ataque e instaurar un cuerpo militar de escala internacional formado por la policía bajo la supervisión de la Sociedad de Naciones⁽⁴¹⁾. Sin embargo, los países participantes no hicieron concesiones y la Conferencia siguió durante bastante tiempo sin llegar a un acuerdo. Y en junio de 1932, Estados Unidos presentó la propuesta de recortar una tercera parte de todas las fuerzas militares de cada país y prohibir las armas con capacidad de ataque y las bombas aéreas. En principio, se preveía que muchos países apoyaran las medidas propuestas, pero Francia, alegando que la seguridad tras el posible desarme no se garantizaría, manifestó una voluntad contraria y se opuso a las medidas. A esto le siguió el hecho de que tanto Gran Bretaña como Japón simpatizaron con la postura francesa y, finalmente, el desarme no se hizo realidad⁽⁴²⁾.

Madariaga asistía a esta Conferencia como delegado de España. Como se ha indicado antes, por su experiencia de haber trabajado seis años en el Departamento de Desarme en la institución ginebrina, apoyaba el propio “desarme” y pensaba en “reducir al mínimo razonable sus fuerzas armadas y poder consagrar sus dineros a los ministerios más necesitados: enseñanza; asistencia social; agricultura; obras públicas”⁽⁴³⁾. Madariaga explicó la razón por la que el desarme no tuvo éxito y reprochó a Azaña, quien a pesar de asumir por propia voluntad el cargo de jefe de la representación diplomática republicana en la Conferencia de Desarme, no acudió ni un día a Ginebra durante el transcurso de la Conferencia. Madariaga continuó desilusionado con Azaña, sentimiento que dejó plasmado de esta forma:

Creo que su elocuencia clara, sencilla y fuerte hubiera logrado en Ginebra un éxito clamoroso, y que no había entonces en la política interior peligro tan inminente que pudiera arriesgar el viaje. A mi ver le faltó confianza en sí mismo y conocimiento bastante del tema y de su ambiente. Fue gran lástima para él y para la República⁽⁴⁴⁾.

De estas líneas, podría deducirse que para conseguir un buen resultado en el proceso de negociación del desarme, faltaba una “pieza” que era Azaña. Desde el punto de vista de

Madariaga, Azaña poseía la suficiente capacidad de poder convencer a los países participantes con la presencia de las grandes potencias occidentales. Madariaga, ahora bien, reveló que “a Azaña la política extranjera sólo le interesaba intelectualmente, pero no le apasionaba, como la política interior”⁽⁴⁵⁾. En definitiva, Azaña, pese a que poseía la suficiente capacidad de influir y producir un impacto en la sociedad internacional, no ejerció ese poder activamente, de ahí que la diplomacia republicana no pudiera dar el último empujón para poner el “desarme” en marcha.

Conclusión

Durante la Segunda República, Madariaga desplegó múltiples actividades no sólo de intelectual sino también de diplomático. *Espanoles de mi tiempo*, el libro de memorias escrito cuatro años antes de su muerte, junto con otra obra de recuerdos, realza las características de la política exterior republicana mediante el análisis de diversos personajes relacionados con la diplomacia y la política.

Las relaciones con Lerroux y Zulueta sugieren que los dos no tenían más remedio que confiar en Madariaga, que era el “auxiliar” competente por su dominio de varias lenguas y por su vasto conocimiento y profusa experiencia en la Sociedad de Naciones. Sobre todo, el hecho de que Zulueta, que valoraba positivamente este aspecto de Madariaga, fuera calificado mejor que Lerroux por el diplomático gallego, resulta uno de los rasgos más interesantes de este libro de memorias en el que se analiza y evalúa a este elenco de personajes tan influyentes de la época.

Pese a que existe la tesis de que la Segunda República no contaba con una auténtica diplomacia, el presente libro se centra en López Oliván, el diplomático de carrera y no intelectual, lo cual se puede considerar la principal particularidad de la obra. En efecto, predijo con acierto la intención japonesa de seguir invadiendo Manchuria a través de la entrevista con Yoshizawa, lo cual significaría que la Segunda República en la institución ginebrina efectuó su política exterior con la adecuada orientación.

A pesar de que la Segunda República tenía a un diplomático habilidoso como López Oliván, la diplomacia española no fue capaz de contribuir al “desarme” que estaba llevando adelante en la primera mitad de los años treinta. Madariaga culpabilizó a Azaña del “fracaso” de la gestión de la política exterior republicana, ya que éste, pese a que era el líder de la representación diplomática española en la Conferencia de Desarme, no acudió ni una sola vez a Ginebra. Madariaga anotaría que el presidente del gobierno, al no venir a apelar a la necesidad del “desarme” con su persuasiva capacidad de “elocuencia” tantas veces alabada por Madariaga, fue responsable de que la Conferencia no tuviera éxito. Madariaga llegaría a insinuar que debido a la ausencia de Azaña, el poder de la diplomacia republicana quedó más limitado y debilitado, convirtiendo España en un país de “segundo orden”.

Al mismo tiempo, el fallido intento de desarme aportó a España la prueba de que

“desarme” jamás se convertiría en sinónimo de “pacifismo”. Dicho de otro modo, aunque España, como país de segundo orden, levantó la voz a favor del “pacifismo”, esta acción no condujo por ninguna vía a un “desarme” de escala tanto internacional como sistemática. En fin, la diplomacia republicana, a través del conflicto del “desarme”, pudo medir su fuerza “excesivamente escasa” por ser un estado “modesto” y verse obligada a obedecer militarmente a las grandes potencias. La destacada postura de Madariaga en esta obra, en la que se lamenta de la ausencia de Azaña en la Conferencia de Desarme, contendría, de hecho, el desagradable sentimiento de su arrepentimiento por la “forzada limitación” del poder diplomático republicano.

Notas

- (1) Este artículo es una versión ampliada y revisada de la ponencia presentada en línea por el autor en el LVIII Congreso Internacional de la Asociación Europea de Profesores de Español (AEPE), celebrado en la Universidad de Barcelona el 17 de julio de 2024.
- (2) Madariaga, 1974a.
- (3) Ibid., p.11.
- (4) Madariaga, 1974b.
- (5) Yasuda, 2011; Yasuda, 2014; Yasuda, 2017.
- (6) A pesar de que los estudios que consideran *Espanoles de mi tiempo* como el principal documento no son muchos, algunos de ellos que podríamos poner como ejemplo son el de Ángeles Egido León (Egido León, 1987), el de David Jorge (Jorge, 2016), el de José Ramón Rodríguez Lago (Rodríguez Lago, 2022) y el de Santiago de Navascués (Navascués, 2023).
- (7) Gracia y Ródenas de Moya, 2015, p.308.
- (8) Preston, 1998, p.207.
- (9) Egido León, op. cit., p.63.
- (10) Neila Hernández, 2003, p.466.
- (11) García de la Concha, 2014, p.295; Gracia y Ródenas de Moya, op. cit., p.309.
- (12) Calvo Salgado, Langa Nuño y Prieto López, 2015, p.345.
- (13) Fernández Santander, 1991, pp.136-139.
- (14) Este premio lo recibieron los más destacados personajes españoles, tales como el rey Juan Carlos I en 1982 y el presidente del gobierno Felipe González en 1993.
- (15) Preston, op. cit., p.179.
- (16) Calvo Salgado, Langa Nuño y Prieto López, op. cit., p.344.
- (17) El gobierno llegó a ser oficial en diciembre de 1931 y duró hasta septiembre de 1933.
- (18) Madariaga, 1974a, p.48.
- (19) Loc. cit.
- (20) Yoshizawa, 1990, p.105.
- (21) Madariaga, 1974a, p.52.
- (22) Ibid., pp.54-55.
- (23) Ibid., pp.243-244.
- (24) Ibid., p.244.
- (25) Loc. cit.
- (26) Preston, op. cit., p.188.
- (27) Yotaro Sugimura (1884-1939), diplomático japonés que trabajó en la Secretaría de la Sociedad de

Naciones, en su libro de memorias publicado en agosto de 1933, poco después de la retirada nipona de dicha institución, hizo una distinción de los países participantes entre los del primer orden y los del segundo, y situó a España como uno de los del segundo. En esta obra, Suguiwura expresaría de esta forma la gran influencia de las grandes potencias como Francia y Gran Bretaña: “Cuando los países del segundo orden se desvanecen más allá de sus fuerzas reales, los del primer orden aceleran el proyecto haciendo caso omiso de la opinión de los del segundo. (...) En noviembre del año pasado (es decir, en noviembre de 1932) los representantes de los del segundo: Benes (Checoslovaquia), Madariaga (España), Undén (Suecia) y Lester (Irlanda) entregaron la propuesta de acusar a Japón, tanto Gran Bretaña como Francia no la aprobaron, argumentando que todavía era demasiado prematura. (...) Entre las grandes potencias, las que realmente cuentan con el poder de mover la Sociedad de Naciones son Gran Bretaña y Francia” (Suguiwura, 1933, p.25).

(28) Madariaga, 1974a, p.245; Azaña, 2000, p.466.

(29) Madariaga, 1974a, p.248.

(30) Azaña, op. cit., p.649.

(31) Madariaga, 1974a, p.418.

(32) Loc. cit.

(33) Lerroux, 2019, p.132. En el libro de memorias de Lerroux, cuya primera edición fue publicada en 1937, no se refería en ninguna parte a Madariaga con quien había trabajado sobre todo en la cuestión de Manchuria en la Sociedad de Naciones, lo que fue criticado con dureza por Madariaga. El diplomático gallego escribiría en *Espanoles de mi tiempo* que “ni siquiera parece haberse dado cuenta de lo que había presidido” (Madariaga, 1974a, p.49).

(34) El apellido de “Yoshizawa” se cita erróneamente como “Yoshizagua” en esta obra.

(35) Madariaga, 1974a, p.420.

(36) Ibid., pp.420-421.

(37) Loc. cit.

(38) Ibid., p.421.

(39) Ibid., p.293.

(40) Ibid., p.297.

(41) Shinohara, 2010, p.220.

(42) Ibid., pp.220-221.

(43) Madariaga, 1974a, p.304.

(44) Ibid., pp.304-305.

(45) Ibid., p.305.

Bibliografía

AZAÑA, Manuel, *Diarios completos. Monarquía, República y Guerra Civil*, Barcelona, Crítica, 2000.

CALVO SALGADO, Luís Manuel, LANGA NUÑO, Concha y PRIETO LÓPEZ, Moisés, *Tele-revista y la Transición. Un programa de la televisión suiza para emigrantes españoles (1973-1989)*, Madrid, Iberoamericana-Vervuert, 2015.

EGIDO LEÓN, Ángeles, *La concepción de la Política Exterior Española durante la Segunda República*, Madrid, UNED, 1987.

FERNÁNDEZ SANTANDER, Carlos, *Madariaga, ciudadano del mundo*, Madrid, Espasa-Calpe, 1991.

GARCÍA DE LA CONCHA, Victor, *La Real Academia Española: vida e historia*, Barcelona, Espasa Libros, 2014.

GRACIA, Jordi y RÓDENAS DE MOYA, Domingo, *Pensar por ensayos en la España del siglo XX*, Barcelona, Servei de Publicacions de la Universitat Autònoma de Barcelona, 2015.

- JORGE, David, *Inseguridad colectiva. La Sociedad de Naciones, la Guerra de España y el fin de la paz mundial*, Valencia, Tirant Humanidades, 2016.
- LERROUX, Alejandro, *La pequeña historia de España (1930-1936)*, Madrid, EEC-AKRÓN-CSED, 2019.
- MADARIAGA, Salvador de, *Espanoles de mi tiempo*, Madrid, Espasa-Calpe, 1974a.
- , *Memorias (1921-1936). Amanecer sin mediodía*, Madrid, Espasa-Calpe, 1974b.
- NAVASCUÉS, Santiago de, *Salvador de Madariaga. El hombre que entró por la ventana*, Madrid, Marcial Pons, 2023.
- NEILA HERNÁNDEZ, José Luis, “El proyecto internacional de la República: democracia, paz y neutralidad (1931-1936)”, en PEREIRA, Juan Carlos (coord.), *La política exterior de España (1800-2003)*, Barcelona, Ariel, 2003, pp.453-474.
- PRESTON, Paul, *Las tres Españas del 36*, Barcelona, Plaza & Janés, 1998.
- RODRÍGUEZ LAGO, José Ramón, *WORLD CITIZEN: Salvador de Madariaga y las redes pioneras del mundialismo (1927-1950)*, Madrid, Sílex, 2022.
- SHINOHARA, Hatsue, *Kokusai renmei —sekai heiwa heno yume to zassetsu— (La Sociedad de Naciones —el desafío y el fracaso en busca de la paz mundial—*, Tokio, Chuokouronshinsha, 2010.
- SUGUIMURA, Yotaro, *Kokusai gaikouroku (Memorias sobre la diplomacia internacional)*, Tokio, Chuokouronsha, 1933.
- YASUDA, Keishi, “La diplomacia de la Segunda República española en torno al Incidente de Manchuria: un análisis de la visión de Salvador de Madariaga y Manuel Azaña”, en CID LUCAS, Fernando (coord.), *Japón y la Península Ibérica: cinco siglos de encuentros*, Gijón, Satori Ediciones, 2011, pp.157-174.
- , “Manuel Azaña no nikki ni miru Spain daini kyouwasei no gaikou —Salvador de Madariaga tono kankei wo chushinni—” (“La diplomacia de la Segunda República española a través de los diarios de Manuel Azaña —Reflexiones sobre la relación con Salvador de Madariaga—”), *Spain gendaishi (Historia Contemporánea de España)*, 22, 2014, pp.15-25.
- , “Spain daini kyouwasei to kokusairenmei —Manshuu jihen mondai ni taijishita chishikijin: Azaña, Madariaga y Zulueta—” (“La Segunda República española y la Sociedad de Naciones —Los intelectuales ante el asunto de Manchuria: Azaña, Madariaga y Zulueta—”), *Spain gaku (Estudios Hispánicos)*, 19, 2017, pp.33-50.
- , “Salvador de Madariaga *Espanoles de mi tiempo* (1974 nen) ni okeru Spain daini kyouwasei no gaikoukatsudou” [“Las acciones diplomáticas de la Segunda República en *Espanoles de mi tiempo* (1974) de Salvador de Madariaga”], *Spain gaku*, 22, 2020a, pp.71-83.
- , “El pensamiento diplomático de Manuel Azaña ante la Sociedad de Naciones durante la Guerra Civil española: un análisis de sus artículos y diarios”, en KIETRYS, Kyra A., MONTERO CURIEL, María Luisa, SOTOMAYOR, Carmen T. y WINKEL, Adam L. (eds.), *La tradición cultural hispánica en una sociedad global*, Cáceres, Servicio de Publicaciones de la Universidad de Extremadura, 2020b, pp.119-128.
- YOSHIZAWA, Kenkichi, *Gaikou rokujuunnen (La diplomacia durante sesenta años)*, Tokio, Chuokouronshinsha, 1990.

***The Lyke Wake Dirge* & The Survival of Catholicism in Cleveland, Yorkshire**

Simon ROSATI

► Key words

Lyke Wake Dirge; Folk song;
Catholicism; The Reformation;
Recusancy; Cleveland;
Yorkshire; Langbaourgh

▼ Abstract

The *Lyke Wake Dirge*, an overtly Catholic song, seems to have survived in the Cleveland area of Yorkshire until at least 1800. This article describes the survival of Catholicism in the area after the Reformation. It shows that continuing Catholicism created conditions that were reasonably conducive to the survival of the song. The article, acknowledges, however, that chance must have played a part.

The Lyke Wake Dirge (Roud 8194) is a song that describes the journey of the soul of a recently dead person as it attempts to make its way to heaven. The lyke is the corpse, as we still see in the lychgate outside English churches, and in German Leiche. The wake is a ceremonial watching over the dead person, long abandoned in England but more familiar in Ireland. A song for the dead is a dirge, with the word 'dirge' deriving from the Latin *dirige*, the first words of the matins ceremony for the dead, said in the presence of the corpse (Duffy 2022: 369). It was first recorded in writing by John Aubrey in around 1686 in his collection later published as *Remaines of Gentilisme and Judaisme* (1972: 176-178). Aubrey's informant said the song was sung 'about 60 yeares since at Country vulgar Funeralls' in Yorkshire (specifically near Guisborough says Sidgwick (1904: II, 89), quoting Aubrey), which gives a date of 1626 or so. (Vulgar, which Pittaway (2016) finds patronising, here means the common people.) Carol Rumens (*The Guardian*, 16th February 2009) suggests, without evidence, that the song is 14th Century. Sir Walter Scott in *Minstrelsy of the Scottish Border* (Ed. Henderson 1931: 398-401) includes a similar version, and quotes Joseph Ritson's

description of a song 'sung by the lower ranks of Roman Catholics' in Cleveland in Yorkshire, watching over a dead body during the reign of Elizabeth I (reigned 1558-1603). Ritson's description corresponds closely to the text of the song. Sidgwick (1904: II, 89) explains:

Ritson found an illustration of this dirge in a manuscript letter, written by one signing himself 'H. Tr.' to Sir Thomas Chaloner, in the Cotton MSS. (Julius, F. vi., fols. 453-462). The date approximately is the end of the sixteenth century (Sir Thomas Chaloner the elder, 1521-1565; the younger, 1561-1615). The letter is concerned with antiquities in Durham and Yorkshire, especially near Guisborough, an estate of the Chaloner family. The sentence referring to the Lyke-Wake Dirge was printed by Scott, to whom it was communicated by Ritson's executor after his death.

This is the text given by Aubrey:

This ean night, this ean night;
Every night and awle:
Fire and Fleet and candle-light
And Christ receive thy Sawle.

When thou from hence doest pass away
Every night and awle
To Whinny-moor thou comest at last
And Christ receive thy Sawle.

If ever thou gave either hosen or shun
Every night and awle
Sit thee downe and putt them on
And Christ receive thy Sawle

But if hosen nor shoon thou never gave nean
Every night, &c:
The Whinnes shall prick thee to the bare beane
And Christ receive thy Sawle.

From Whinny-moor that thou mayst pass
Every night &c:
To Brig o'Dread thou comest at last
And Christ &c:

From Brig of Dread that thou mayst pass
Every night &c:
To Purgatory fire thou com'st at last
And Christ &c:

If ever thou gave either Milke or drinke
Every night &c:
The fire shall never make thee shrink
And Christ &c:

But if milk nor drink thou never gave nean
Every night &c
The Fire shall burn thee to thy bare bane
And Christ receive thy Sawle

There is clearly a stanza or two missing after the arrival at the Brig o'Dread (as Scott points out), as there is no indication of how one may pass, or fail to pass, the bridge, in contrast to Whinny-moor and Purgatory. Atkinson (1868: 595-605) discusses the song at some length. He suggests the following for the missing stanzas (603-604):

If ever thou gave either awmous or dole,
Every night and alle;
At Brigg o' Dread nae ill thou sal thole,
And Christe receive thy saule.

But if awmous or dole thou never gave neean,
Every night and alle;
Thou s'fall an' be brusten to the bare been,
And Christe receive thy saule.

Blakeborough (1898: 123-124), supplies the following at that point in his version:

If ivver thoo gav' o' thi siller an' gawd,
Ivvery neet an' awl,
At t' Brigg o' Dreed thoo'll find footho'd,
An' Christ tak up thi sowl.

Bud if o' siller an' gawd thoo nivver ga' neean,
Ivvery neet an' awl,

Thoo'll doon, doon tumm'l towards Hell fleams,
An' Christ tak up thi sowl.

As we see, both suggestions involve almsgiving. Blakeborough's version does not include Purgatory, which has been replaced with Hell, so it is less Catholic. It does, however, still contain 'a strong sense of the efficacy of salvation through works', as Hutton (1995: 93) puts it. Gray (2019: 357) says:

The folk belief in 'shoes for the dead' sits easily with the medieval stress on the necessity of performing bodily works of mercy.

Blakeborough suggests (p 122) that it was sung as late as 1800 in Kildale, a village in Cleveland in the North York Moors. Moorman (1919: 101-106) includes Blakeborough's version, and then a similar song called *A Dree Neet* which mentions the 'Brig o'Deoad'. He also quotes from Aubrey's manuscript that the song was sung 'till about 1616-24'.

The Survival of the Song

The song, then, is clearly Catholic in origin, possibly dating from before the Reformation, and is strongly associated with the Cleveland area of North Yorkshire. The question this paper will explore is why such a Catholic song survived there until 1800 or so, 250 years after the Reformation, albeit in attenuated form.

Cleveland

Cleveland is an area in eastern North Yorkshire. It corresponds to the old Scandinavian administrative areas, or wapentakes, of Langbaugh, East and West, but can also include the coastal wapentake of Whitby Strand. The borders of the wapentakes have varied over the centuries. For the purposes of this paper Allertonshire, to the west, will also be included. The region is thus bounded by the river Tees in the north, the North Sea in the east, and covers most of the North York Moors, as far south as Pickering and as far west as Northallerton. It should be remembered that the modern large industrial town of Middlesbrough was a hamlet before 1800, and Guisborough was the only substantial inland town. Cleveland was long sparsely populated and remote. Even today the population living within the North York Moors National Park, an area of 1,436 square kilometres which covers much of Cleveland, numbers only 23,000 people (2021 census).

The Reformation

The English Reformation was not a single event but a process. There had been pressures for a considerable while to stop ecclesiastical corruption and to allow the Bible in English. Henry VIII, no Protestant despite the break with Rome, executed some of these reformers, for example Tyndale in 1536. In many people's minds, the event that started the Reformation was the Dissolution of the Monasteries by Henry, from 1533. The great iconoclasm, however, the stripping of the altars (Duffy 2022), occurred under his successor Edward VI, who reigned from 1547 to 1553. After Catholic Mary I, 1553 to 1558, Elizabeth I continued to make England a Protestant country, with great success. By the end of her reign Catholics were a tiny, persecuted minority (see Duffy, Thomas 1971: 58-89, Haigh 1975 and 1993, Dickens 1991).

Dickens puts forward the standard Anglican view, that the English Reformation was inevitable, almost universally welcomed, and accomplished smoothly, a view he stuck to in his second edition, despite the revisionist publications since the first edition of 1964. In this view, those who remained Catholic were disloyal, even traitors, for who can have two allegiances, to Pope and Queen?

More recent, revisionist publications have argued that the Reformation, or Reformations, plural (Haigh 1993), took a long time to fully gain the hearts and minds of the people. Bossy (1975), Duffy, Thomas and others show that old customs and practices lingered for many years (see also Haigh 1975: 218ff), though different ones survived in different places. There was not in fact a clear divide between Anglicans and Catholics. Attendance at church services was required once a month, along with taking Communion at Easter, at least. There were Puritans (Calvinists), Church anglicans (not Anglicans), who were nominal converts, and Church Papists, who conformed to the law but not in spirit. There were also recusants, who simply refused to attend Anglican church. This was illegal and laid them open to court cases and fines. (See for example Bossy 1975: 140ff; Haigh 1975: 247-294 and 1993: 251-267; Walsham 1999.)

Areas of Catholic Survival

Within quite a short time, in very few areas of England were more than 2% of the population Catholic. There were variations, however. The south and east were generally more strongly Protestant, as were more industrialized areas in the north, such as the cloth-weaving parts of Lancashire and the mining areas of Cumberland. The north more generally, particularly upland areas, had a stronger tendency to cling to the old religion. Bossy (1975: 404) shows that the three English counties with more than 2% of recusant households were County Durham, Lancashire and Monmouthshire. Yorkshire as a whole had between 1% and 2% of

recusant households, making it one of the more Catholic counties.

As said, older practices and customs associated with the Catholic Church survived for many years around England. One would expect them to survive longer in more Catholic areas. So our song, the *Lyke Wake Dirge*, might have been expected to last longer in Lancashire than in Yorkshire. Gerard (1951: 32-33), a secret Jesuit missionary in Elizabethan times, describes personally seeing congregations of 200 or more at Catholic masses in Lancashire in the 1590s. On the other hand, it would not have lasted long in Kent or East Anglia or other strongly Protestant areas. We are concerned with Cleveland, the area of North Yorkshire where the song was recorded. Let us look at Catholic remnants there.

Cleveland under Elizabeth

Under Elizabeth I (reigned 1558-1603) the Church of England was initially rather slow to proselytize in the north (Aveling 1966: 11-13; 1970: 33-34). Many gentry families remained Catholic, and they would often employ Catholic servants. Dures & Young (2022: 71-73) mention the Meynells of North Kilvington, in the west of Cleveland, and the Fairfaxes of Gilling, just to the south of Cleveland, for example. There were also the Scropes of Danby, in the centre of the moors (Aveling 1976: 147). After the abortive Rising in the North of 1569, which was in part Catholic, as well as feudal and regional, stronger efforts were made. People who did not attend church could be fined, and it was treason, and thus a capital offence, to be a Catholic priest. Priests, and sometimes lay people, were executed in considerable numbers. After 1581, the fine for recusancy was £20, forty or fifty times an artisan's monthly wage (Haigh 1993: 263-264).

In Cleveland, however, many of the parishes were large, with dispersed populations. This meant a parish would have a main church, but also a number of smaller chapels. These could often be poorly maintained. Dickens (1991: 364) points out the poverty of many Anglican livings, meaning that Anglican priests would be badly paid in areas like Cleveland, and would be unwilling to work there (Aveling 1970: 155; Watson 2007: 298). All this meant that enforcing attendance at Anglican services was difficult. Catholic priests would arrive on the north east coast and be sheltered at Grosmont Priory in the moors (Dures & Young 2022: 37), and then move around Cleveland, going from sympathetic house to sympathetic house. Aveling gives figures of 273 presentments (court cases) for recusancy and non-communicating (in an Anglican church) in the Langbaugh wapentake between 1590 and 1595, and 445 in 1603-1604. These would be people who could pay a fine, as there was little point in fining impecunious labourers and widows (Aveling 1966: 179). Dickens (1941: 182) shows that between 1575 and 1590 Cleveland, including Allertonshire, had the highest number of presentations for recusancy (180) and non-communicating (16) in all of Yorkshire.

Our song concerns death, and one occasion Catholics would not avoid Anglican churches was in death. On these occasions they would try to get into the church, or at least the

churchyard, while the clergy would often try to keep them out. Among many examples, Bossy (1975: 141) gives this one from Cleveland:

Katherine Hodgson of Egton died in childbirth in 1595, and her brother-in-law John 'together with all or most of the recusants of that chapelry did come with the corpse of the said Katherine in the dawning of the day, having gotten the church key, into the church, and buried her without any minister'.

Old Practices

Moving into the seventeenth century, we find continuations of old practices. One was pilgrimages. At Mount Grace Priory near Osmotherly, in the west of our area, there was a Lady Chapel (then a ruin but now restored). In 1614 30 people were prosecuted for praying there on the eve of the Nativity of the Virgin Mary (Dures & Young 2022: 63). Aveling (1976: 351-352) suggests that it was not only Catholics who made such pilgrimages. In 1642 the Yorkshirewoman Mary Ward, founder of the Institute of the Blessed Virgin Mary, and her companions, including a Catholic priest, made a pilgrimage there, quite openly (Littlehales 1998: 236-237; Kenworthy-Browne 2008: 66-67).

Another old practice was praying for the dead, which Protestants regarded as superstition – the dead are dead and gone, and prayer can have no effect. Women seem to have been important in this regard (Marshall 2002: 139):

Women were prominent in the clutch of offenders found burning candles and laying crosses in the vicinity of Ripon in 1615, and even more so in the group from Dishforth and Thornton-le-Beans praying for the dead at crosses in 1612. The accused comprised two men and sixteen women.

Thornton-le-Beans is within the area of our discussion.

Yet another old practice was the playing of 'interludes'. In 1609 (Aveling 1966: 289; Boddy 1976) or 1610 (Bossy 1975: 83) a group of actors from Egton, a small village in the middle of the moors, undertook a tour of north Yorkshire, performing morality plays or Shakespeare. At Gowlthwaite Hall they performed *St. Christopher*, a play about an irreligious man, Reprobus, who is persuaded to adopt Christianity, and is given a new name, Christopher. The players, however, inserted an interlude (Aveling 1966:289):

This was a burlesque-serious dialogue between a Catholic priest, holding a crucifix, and a Protestant minister, holding a Bible; the priest prevailed, and the interlude ended with the minister being carried off-stage by devils

Aveling says the players were not caught, though Boddy suggests otherwise. Aveling describes the continuation of the troupe until at least 1616, suggesting that as uneducated men, they must have been coached by priests from Douai (see below), who were familiar with the performance of plays (p 290). He also mentions a similar performance much later, in 1655. Another point is that the audiences on these occasions were not necessarily Catholics. In any case, it could be difficult to determine a person's sectarian allegiance. As Walsham (1999: 78 and passim) points out, some members of a family, usually men, would outwardly conform for economic and social reasons, while others, mostly women, would not.

The *Lyke Wake Dirge*, according to Aubrey, was still being sung in the form he gave (including Purgatory) at around this time, so we should see it as part of a pattern of behaviour, not as a unique remnant of the past.

The Seventeenth Century

Aveling (1966: 267) puts the number of Catholics in the three parts of Langbaurch at 445 in 1604, rising to 541 in 1642. For neighbouring Allertonshire the numbers are 70 and 180-190 (p 266). These are not large numbers, even in a sparsely populated area, but they do show an increase. He suggests that Catholics were tending to gather in fewer but larger communities. Dures & Young (2022: 72) estimate that Egton was one third Catholic in the early seventeenth century. In 1633 166 Catholics from Egton, a 'huge number', were presented (tried) (Sheils 1998: 120).

Aveling also (pp 295-297) points out the continuing illegal practice of sending sons to receive a Catholic education in Douai or Saint Omer, then in the Spanish Netherlands (now in France).

A key figure later in the century was Nicholas Postgate. He was born around 1598, entered the seminary at Douai in 1621, was ordained, and returned to England in 1630. He spent 30 years tending to gentry families. He moved to Cleveland around 1660 and worked as a poor priest until 1679. Apparently he was well-known to Protestants as well as Catholics. He was then captured, tried and executed in York, almost the last person to be executed just for being a Catholic priest. (See Hamilton 1980; Camm 2004: 281-303.) From his career we get an impression of a large Catholic community in Cleveland, from all levels of society. Postgate himself said his converts were 'mainly of the poorer sort' and it seems that in 1676, again, a third of the population of Egton were listed as Roman Catholic (Sheils 1998: 122).

In Osmotherly from 1665 there was a Franciscan mission, to serve the Lady Chapel (see above). There were plans for expansion in 1684-1685, but the deposition of the Catholic James II in 1688 ended them (Aveling 1966: 337-348 and photograph facing p 225).

So we see a continuing and fairly openly Catholic community, living alongside Anglican, and, increasingly, Quaker neighbours (Aveling 1966: 343-344).

The Eighteenth Century

In the eighteenth century the Catholic population of Cleveland grew slowly but steadily. For example, Aveling (1966: 394) lists the following numbers for the Egton area: 1700: 290; 1769: 320; 1780: 415. Despite the hostility to Catholics of a new landlord from 1758, Catholics and Protestants in Egton were roughly equal in numbers, with also a small group of Quakers (Rowlands 1999: 300-301).

Aveling (1966: 388) describes how Catholic chapels gradually became more visible, descending from attics to the first floor, then the ground floor and later to a separate building. Bossy (1975: 143) says that there was a Catholic area in the cemetery at Egton by 1750. Sheils (1998: 128) suggests that families in Egton could contain both Catholics and Protestants, and that relations between Catholics and Protestants were warm. Smallwood (2019: no pagination) mentions a letter from the Vicar of Whitby in 1736:

It is clear from this letter that not only were there large numbers of Catholics in the area but also that they were not being prosecuted under the recusancy laws; they were attending Mass in known houses and even the names of priests in Egton and Whitby were common knowledge.

Against this we should note the temporary upsurge in anti-Catholic feeling following the Jacobite rebellion of 1745 (Aveling 1966: 375; Smallwood 2019), with mobs attacking Catholics in Whitby and a Catholic mass-house in Stokesley (twice).

In general, though, tolerance of Dissenters, including Catholics, was increasing, leading to the Catholic Relief Acts of 1778 and 1791, which removed most of the penalties imposed on people for being Catholic. Full Catholic Emancipation came in 1829.

After the *Lyke Wake Dirge*

This brings us to 1800, after which, according to Blakeborough (1898: 122) the *Lyke Wake Dirge* was no longer sung. Today there remains a cult of Nicholas Postgate (Shell 2007: 143), one of Yorkshire's most famous Catholic martyrs, along with Margaret Clitheroe from York itself (see Rayne-Davis 2002). In Egton there is a Postgate Inn (pub), and the Victorian Catholic church of St Hedda is surprisingly large for such a small village in an Anglican country.

Conclusion

We cannot definitively answer the question of why the *Lyke Wake Dirge* survived for so long

in this area, rather than, say, the more Catholic rural Lancashire. A sparse, isolated population is one reason. The poverty of the area meant that there was little Anglican proselytizing. Old customs continued for longer in peripheral areas, not closely watched by the authorities, unlike more southern counties. Neighbourly feeling meant that Catholics were relatively unmolested. After that, we must put its survival down to chance.

Bibliography

- Atkinson, J. (1868) *A Glossary of the Cleveland Dialect*. London: John Russell Smith.
- Aubrey, J. (1972) *Three Prose Works*. Ed. J. Buchanan-Brown. Fontwell, Sussex: Centaur Press.
- Aveling, J. C. H. (1966) *Northern Catholics*. London: Geoffrey Chapman.
- Aveling, J. C. H. (1970) *Catholic Recusancy in York 1558-1791*. London: Catholic Record Society.
- Aveling, J. C. H. (1976) *The Handle and the Axe*. London: Blond & Briggs.
- Blakeborough, R. (1898) *Yorkshire Wit, Character, Folklore & Customs of the North Riding of Yorkshire*. London: Henry Frowde.
- Boddy, G. W. (1976) "Player of Interludes in North Yorkshire in the Early Seventeenth Century", in *North Yorkshire County Record Office Journal*, vol. 3. Northallerton: North Yorkshire County Council.
- Bossy, J. (1975) *The English Catholic Community 1570-1850*. London: Darton, Longman & Todd.
- Camm, D. B. (2004) *Forgotten Shrines*. Leominster, Herefordshire: Gracewing.
- Cressy, D. (1999) *Birth, Marriage & Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*. Oxford: Oxford University Press.
- Dickens, A. G. (1941) "The First Stages of Romanist Recusancy in Yorkshire, 1560-1590", *Yorkshire Archaeological Journal* 35/138, pp 157-182.
- Dickens, A. G. (1991) *The English Reformation*. Second Edition. University Park, PA: Pennsylvania State University Press.
- Duffy, E. (2022) *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England, 1400-1580*. Second Edition. New Haven and London: Yale University Press.
- Dures, A. & F. Young (2022) *English Catholicism 1558-1642*. Second Edition. London: Routledge.
- Gerard, J. (1951) *The Autobiography of an Elizabethan*. Trans. P. Caraman. London: Longmans, Green & Co.
- Haigh, C. (1975) *Reformation & Resistance in Tudor Lancashire*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haigh, C. (1993) *English Reformations: Religion, Politics and Society under the Tudors*. Oxford: Clarendon Press.
- Hamilton, E. (1980) *The Priest of the Moors*. London: Darton, Longman & Todd.
- Kenworthy-Browne, C. (Ed.) (2008) *Mary Ward 1585-1645*. Woodbridge, Suffolk: Catholic Record Society, Boydell & Brewer.
- Littlehales, M. M. (1998) *Mary Ward, Pilgrim and Mystic*. Tunbridge Wells: Burns & Oates.
- Marshall, P. (2002) *Beliefs and the Dead in Reformation England*. Oxford: Oxford University Press.
- Pittaway, I. (2016) "The Lyke-Wake Dirge: the Revival of an Elizabethan Song of the Afterlife". <https://earlymusicmuse.com/lyke-wake-dirge/>
- Rayne-Davis, J. (2002) *Margaret Clitherow: Saint of York*. Beverley: Highgate.
- Rowlands, M. B. (1999) (Ed.) *Catholics of Parish and Town 1558-1778*. London: Catholic Record Society.
- Scarbrick, J. J. (1984) *The Reformation and the English People*. Oxford: Blackwell.
- Scott, W. (1931) *Minstrelsy of the Scottish Border*. Ed. T. Henderson. London: Harrap.
- Sheils, W. J. (1998) "Catholics and their Neighbours in a Rural Community: Egton Chapelry 1590-1780", *Northern History*, 34/1, pp 109-133.
- Shell, A. (2007) *Oral Culture and Catholicism in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge University

Press.

Sidgwick, F. (1904) *Popular Ballads of the Olden Time*. Second series, volume 2. London: A.H. Bullen.

Smallwood, D. (2019) "Egton Catholics 1600-1900".

[https://www.newman.org.uk/ArticleList/May%202019%20-%20Egton % 20 Catholics %201600-1900.pdf](https://www.newman.org.uk/ArticleList/May%202019%20-%20Egton%20Catholics%201600-1900.pdf)

Thomas, K. (1971) *Religion and the Decline of Magic*. London: Penguin.

Walsham, A. (1999) *Church Papists: Catholicism, Conformity and Confessional Polemic in Early Modern England*. Woodbridge, Suffolk: Boydell Press.

Watson, E. (2007) "Disciplined Disobedience? The Survival of Catholicism in the North York Moors in the Reign of Elizabeth I", *Studies in Church History* 43: Discipline and Diversity.

Young, F. (2016) *English Catholics and the Supernatural, 1553-1829*. London: Routledge.

執筆者紹介

角 岡 賢 一	本 学 経 営 学 部 教 授 (英 語)
岡 田 典 之	本 学 文 学 部 教 授 (英 語)
國 重 裕	本 学 経 営 学 部 教 授 (ド イ ツ 語)
佐 藤 和 弘	本 学 法 学 部 教 授 (ド イ ツ 語)
安 田 圭 史	本 学 経 済 学 部 教 授 (ス ペ イ ン 語)
Simon ROSATI	本 学 経 済 学 部 教 授 (英 語)

編集後記

わたし語りになってしまうが、本学で教養教育の一環として英語を教える身として、何を伝えたら授業したことになるのかと考えることがある。いまの英語教科書はよく出来ており、英語の長文を映像や音声を通して効率よく摂取し、ペアになって理解を確認したり意見を交換したり出来るよう工夫されている。素晴らしいのだが、「教養」に憧れる(?) オジサンとしては、もうちょっと何かがほしい。

Michael Chabon の *The Mysteries of Pittsburg* (1988) を読んでみると、ある場面で、ハーレー=ダビッドソンのそばで煙草を吸う男が主人公の友人クリーブランドに “Hey, Peter Fonda” と絡み、主人公にも “And who's this? Dennis Hopper?” と問い掛ける。何が起きているのか掴めない主人公=語り手の視点を通して、読者も緊迫した状況を感じ取るが、同時にある映画が想起され、ワイルドな主題歌が脳裏に響く。ピッツバーグで展開する話なのに、ロードムービーの古典をネタとした台詞。この話をロードムービーと考えたらどうなるだろう。

Paul Beatty の *The Sellout* (2016) を読んでみると、冒頭から、黒人の主人公が逮捕され拘留されながら人種差別に関わる事件を想起していく場面に出くわす。Dred Scott, *Plessy v. Ferguson*, Chief Justice Rehnquist...わたしの知らない名前が出てくる。何も想起されないのが、インターネットでブリタニカに訊く。それぞれ、19世紀に下された、奴隷制を撤廃した州でも黒人には自由はないとした米連邦最高裁の判決の原告と、人種隔離政策が法の下での平等と反しないとした判決、そして、後者の判決を支持した20世紀の最高裁判事のことだとわかる。これらの名前は、米国における黒人差別とその歴史にかかわる知識を前提としており、それがこの大胆な小説の伏線にもなっている。

テキストから想起できることと、想起できないこと。どちらも、ちょっとした知的興奮を与えてくれる。小説でも、映画でも、ニュースや記事でも、良質なテキストは、文化や歴史や人権についていろいろ教えてくれる。効率的な英語学習の先にあるそういったものを伝えるのも、教養教育の一部としての英語科目の役割でもあるのではないか。

本紀要は、そうした教養科目で学生たちに伝えられるものの背後にある研究を発表し、知的興奮を共有する場でもある。執筆してくださった先生方に感謝申し上げます。(五十嵐海理)

編集委員

五十嵐 海 理	道 元 徹 心	國 重 裕
新 井 潤	松 浦 さと子	札 埜 和 男

2025年3月10日 印刷

2025年3月17日 発行

龍谷紀要第46巻 第2号

編 集 龍 谷 大 学
龍谷紀要編集委員会

発 行 龍 谷 大 学
京都市伏見区深草塚本町67
電 話 (075) 642-1111

印 刷 所 協和印刷株式会社

RYUKOKU KIYO

THE RYUKOKU JOURNAL
OF
HUMANITIES AND SCIENCES

Vol.46 No.2

March, 2025

CONTENTS

- Some Linguistic Aspects around the Kinki Dialects KADOOKA Ken-Ichi (1)
- Animal, Machine, and (Im)material Soul in Early Modern Natural Philosophy
..... OKADA Noriyuki (17)
- Anna Seghers in Mexiko KUNISHIGE Yutaka (33)
- Klimawandel, deutsche Energiepolitik und Sprache SATO Kazuhiro (43)
- Salvador de Madariaga y sus relaciones con los representantes
diplomáticos durante la Segunda República:
un análisis de *Espanoles de mi tiempo* (1974) YASUDA Keishi (59)
- The Lyke Wake Dirge* & The Survival of Catholicism
in Cleveland, Yorkshire Simon ROSATI (73)
-

Published by
Ryukoku University
Kyoto, Japan